

---

# 始祖ブリミルの祝福を

義雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

始祖ブリミルの祝福を

### 【Nコード】

N6487W

### 【作者名】

義雄

### 【あらすじ】

第一部：メアリー・スーに祝福を

やあ、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュフォール。トリステイン王国の伯爵家に転生した元男の女の子なんだ。名状しがたい神さまから色々特典ももらったし、のんびり生活を目指す！

第二部：始祖ブリミルの祝福を

第一部とは雰囲気が一転しているのでタイトル変更しています。クロムウェルがもたらした輝くトラペゾヘドロンによって、メアリー

は……。生きとし生ける者がすべてを賭け、今ハルケギニアの命運をかけた戦いがはじまる。

第一部はいわゆるご都合主義、神様転生に対する皮肉を含んでいます。また物語の進行に伴い原作キャラが死亡します。当SSは

Arcadia様にも投稿しています。

## ジョン・フェルトンに安息を（前書き）

クセの強いお話です。

所謂神様転生に対する皮肉を含んでいるのでそついうキャラに愛を感じる方は読まない方が良いと思います。  
用法・用量を守ってお読みください。

## ジョン・フェルトンに安息を

ジョン・フェルトンに安息を

A・D・6088 ジョン・フェルトン・コンスタンス・ド・  
ロシュフォール

この日記帳には我が娘のこののみを記す。

今日は非常にめでたい日だ。

我がロシュフォール家に初めての子供が生まれたのだ。

可愛らしい女の子だ。

名前はメアリー・スー。

口元は私に似ており、目元が妻に似ている。

妻も意識ははっきりしており、経過は順調だ。

昨夜恐ろしい夢を見たが関係はなさそうだ。

いや、あの冒流的に聞こえたフルートは祝福だったのかもしれない。

始祖ブリミル様と私では感覚も大きく異なるに違いない。

祝福ならば我がロシュフォール家も安泰ということだろう。

＊＊

メアリーに髪が生えはじめた。

アルビオンに連なる峰々、その頂上にかかる雪のように白い。

ハルケギニアでは非常に珍しい髪の色だ。

すでに目も開いており順調に育っている。

ただ、赤い瞳と白い髪、そして異常と感じるまでの肌の白さ。

親としては少し不安だ。

それにメアリーは普通の赤子と比べてあまり泣かないようだ。

手がかからないのは良いことだ、と妻は言っているが元気に育ってくれるか。

定期的に医者に見せた方が良くかもしれない。

＊＊

メアリーが寝返りをうった。

もうしばらくすればハイハイもできるようになる、とは乳母の言葉だ。

それ自体はめでたいことだ。

しかし私は奇妙なことに気付いた。

寝返りをうつたとき、メアリーの右目が青くなったような気がしたのだ。

ひょっとしたらメアリーは月目なのかもしれない。

少し注意して様子を見よう。

＊＊

間違いない、やはりメアリーは月目だ。

ハイハイをした記念すべき日なのだが素直に喜ぶことはできない。

メアリーは激しい動きをするとき右目が青くなるようだ。

通常の月目は常に色が違うと聞く。

これは異常なことではないだろうか。

アカデミーの連中やロマリアの坊主どもに見つかってしまったては危険だ。

後で妻に相談しなければならぬ。

＊＊

記念すべき日だ！

メアリーがはじめて喋った！！

たどたどしい言葉ではあったが確かに「パパ」「ママ」といった。

この歡びは文章にあらわせない。

使用人たちには特別に上等なワインを振舞ってやろう。

メアリーがあまり泣かないものだから言葉に障害があるのかも、と一人悩んでいたのだ。

今日はよく眠れそうだ。

\*\*\*

あの歡びは間違いだったのかもしれない。

メアリーはよく喋る、喋るがまったく意味が分からない。

この時期の言葉はそういうものだ、と乳母は言うが何か違うのだ。

狂気じみた言語、というのが最も近いだろうか。

ハルケギニアでは使われない言葉を話しているように感じるのだ。

天使のような声色でおどましき何かを口走る様を私は慄然たる思いで注視していた。

個人的によくしている司祭に相談した方が良いかもしれない。

＊＊

メアリーが生まれて一年と少しがたった。

すでに屋敷の中を歩き回れるようになり、運動面では問題ないようだ。

しかしメアリーは言葉が遅れている。

乳母の話ではすでに会話ができてもおかしくない、ということだ。

相変わらずあの狂気じみた言語を使っているようだ。

人がいないところではよく呟いている。

司祭に相談すると「悪魔憑き」かもしれないという助言をくれた。

確かにあの冒流的な言葉は悪魔の言語というに相応しいのかもしれない。

考えたくはないが、幽閉用の塔を用意する必要があるかもしれない。

＊＊

メアリーがマトモに喋れるようになった。

喜ばしいことだ、と諸手をあげることにはできない。

唐突すぎるのだ。

今までほとんど喋れなかったメアリーが大人のように理路整然と話す様は、とてもじゃないが幼児には見えない。

正直なところを書こう。

私は恐ろしい。

天使のように可愛らしいメアリーに恐怖を覚えつつあるのだ。

妻も同じ思いを抱いているらしい。

いや、私たち夫婦はきつと疲れているのだ。

メアリーの誕生以来子供ができる気配も一向にない。

焦りもあるのだろう。

きっと一年後にはこの日記を笑い飛ばせるようになる。

今はただ見守るしかない。

＊＊

あれから一年がたった。

やはり、メアリーは悪魔憑きなのかもしれない。

流暢に喋るようにはなった。

しかし男言葉を話すのだ。

まるでメアリーの中に名状し難いものが潜んでいて、それが喋っているようだ。

暗澹たる思いで幽閉塔の建造を指示する。

一階に豪華な聖堂を造るつもりだ。

始祖ブリミル様、どうか貴方の御威光でメアリーを救ってください。  
妻と二人で日々祈っています、救いを賜るようお願いします。

＊＊

来るものが来たか、という思いだった。

五歳の誕生日、メアリーが魔法の練習を願い出てきたのだ。

予想をしていなかったわけではない。

しかし悪魔憑きである可能性がある以上魔法を教えることはできない。

言い含めると意外なまでに素直な様子だった。

幽閉塔が完成した。

錠前も枢機卿が祝福を施した聖なる銀を元に頑丈なモノを用意した。

図書館もあるのでメアリーには当面そちらに移ってもらう。

妻は限界が近い。

ロマリアなどで息を抜いたほうがいいかもしれない。

＊＊

メアリーが幽閉塔に入って一年がたつ。

六歳の誕生日、メアリーは再び魔法練習を願い出た。

男言葉に変わりはない。

またその表情も、目も依然と変化がなかった。

もう少し様子を見た方がよさそうだ。

引き続き勉強と、始祖ブリミル様へより祈りを捧げるよう指示しておく。

白すぎる肌、白い髪、赤い瞳と神秘的な外見は今では悪魔のようにしか見えない。

妻はもう限界だろう。

ひと月ほどロマリアで休養してもらうことにする。

＊＊

七歳の誕生日、やはりメアリーは魔法練習を願いだした。

これ以上引き延ばすのはおそらく得策ではない。

勝負に出ることにする。

聖堂にメアリーを呼び出し、始祖ブリミル様への祈りを命じた。

念のため杖には手をかけておく。

悪魔なら祈りの言葉を口にただけで激しく苦しむはずだ、と司祭からは助言を受けている。

私はラインメイジではないが、聖堂なら始祖様の祝福で大きな力を引き出せる気がした。

しかし、結局は無駄なことだった。

メアリーは始祖に唾するような、冒瀆的な表情で聖句をそらんじたのだ。

もう私ではどうすることもできない。

妻と二人でその晩は泣いた。

\*\*\*

気が付けばメアリーが生まれて十四年がたつ。

本来ならば魔法学院にいれなければならない。

だが私は恐ろしい。

メアリーはあつという間に親である私を抜いてトライアングルになったのだ。

メイジの力量は血統によるところが大きい。

私も妻もラインである以上、メアリーがこれほどまでに驚異的なスピートでランクをあげることはありえないのだ。

妻は早く嫁にやれば、というがそんなことはできない。

この世の物ならざる知識をもつメアリーを嫁に出してしまえば、最悪ロシュフォール家は異端として取り潰されるだろう。

今私はオールド・オスマンに手紙を書いている。

今までにあつたことをすべて余さず記した。

彼ほどのメイジでなんとかできなければ、それこそ教皇の力をお借りするしかないだろう。

始祖ブリミル様、我らをお救いください。

なにとぞお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

メアリー・スーに祝福を

やあ、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュフォール。

トリステイン王国のロシュフォール伯爵家長女だ。

皆おなじみ「ゼロの使い魔」の世界に転生した元男、現女の子なんだ。

前世の名前？

ふつつーの名前だったよ、きわめて模範的な男子高校二年生と言ってもいいね。

どうにも俺は神様の手違いでさっくり殺られちゃったらしい。

現に転生前に神様っぽいヤツに会ったし。

神様の容姿？

んー全身が黒くて、足は三本だったかな、現代日本にはないフォルムだった。

想像していたよりはグロテスクな感じがしたな、いや人間の感覚を神様に当てはめる方がおかしいんだろうけどさ。

ただ圧倒的な存在感だけはあったな！

すぐに人間形態、エジプト人っぽい感じになってくれたから話やすかったけどね。

どんな場所だったか？

星の海、といってもいいくらい超宇宙的なところでBGMは素晴らしいフルートの音色だったよ。

一般的なイメージと違う？

いやいやあの神々しさというか名状し難さは会ってみないとわからないよ。

正視に堪えない、ってよく言うだろ？

アレ神様にも当てはまると思うぜ、存在の規模というか、なんか違いすぎてマトモに見たら発狂しそうなレベルなんだよ。

いあ！ いあ！ って感じだな。

\*

まあ神様の話はいいや。

とかく俺は神様が望みを叶えてくれるっていうんでゼロの使い魔の世界に転生することを願ったんだ。

勿論才能もつけてもらったぜ、そこそこの鍛錬をつめば風メイジの

スクウェアになれるという話だ。

他の能力はいらないのか、って？

あんまり詳しくないし、ヒーローってのは苦戦してこそ輝くもんじやないか。

だから俺は圧倒的戦力で蹂躞・粉砕というのは良くないと思うんだ。ま、この世界からすれば風のスクウェアってだけでもチートに近いんだけどな。

それに容姿も自由って話だったから、アルビノにしてもらったよ。

本気を出せば右目だけが青くなる、限定的オッドアイ付きだ！！

こんな姿前世だったらアニメの中にしかいなかったね。

とりあえず原作知識をもってるから危険すぎる戦闘はなるべく避けて楽しく暮らすんだ。

トリステイン、ここはなんだかんだ言って安全なはずだからのびのびと領地経営して穏やかな余生を目指すぜ！

幸い俺が第二の生を受けたのは伯爵家、しかも長女だ。

原作には程よくかわって、安全に武勲をちょいちょいあげてやるぜ！

と、武勲を挙げるためにはやっぱり魔法だ。

マトモにやっつてればスクウェアになれるらしいけど、成長速度までは指定してなかったしな。

何事も早いにこしたことはないだろう。

言語習得は日本語のクセが残りすぎて苦戦したが、一人で特訓したおかげで話せるようになった。

魔法はちょちょいのぱっぱとマスターしてやるっ！

だが父上ことジョン・フェルトン・コンスタンス・ド・ロシュフォール（アルビオン系だ！）は過保護らしい。

「父上、俺もそろそろ魔法を習いたいのですが」

「メアリー、お前にはまだ早いだろう。立派な貴族には魔法以外にも学ぶべきことはたくさんあるんだ。今はそちらに集中しなさい」

立派な金色の口髭（カイゼルだな！）をしごきながら穏やかに言い放つ。

早い、と言っても俺はもう五歳だ。

一般的な魔法の修練開始時期が六歳なので早すぎるということはない。

ま、父上が過保護ということはそこまで悪いことじゃないだろう。

実際前世の知識つてのはそこまでアテにならない。

農地改革とかやろうとしてもそんな輪作とかノーフォークとか細かいところを覚えているはずがない。

どんな肥料があるかもわからないくらいだ。

それに下手なことをやらかしたらロマリアさんから一発異端認定だ。

大人しく図書室にこもっていつものように勉強をすることにしよう。

ハルケギニアにマッチした内政チートを目指してやるぜ！

\*

さて、光陰矢のごとしという言葉もあるようにあっという間に六歳だ。

早速父上に魔法の指導をお願いしに行こう。

「父上、俺もそろそろ魔法を習いたいのですが」

「メアリー、お前にはまだ早い。確かに回りの貴族は魔法を学びだす頃だ。しかし魔法以外にも学ぶべきことはたくさんあるんだ。今はそちらに集中しなさい」

まあ父上はアルビオンからトリステインに婿入りしてきた変わり種

だ。

きつと世の酸いも甘いも十七歳までしか生きてない俺よりよっぽど詳しい。

それにやっぱり父上は過保護だ。

なんと、俺のために塔を建ててくれたのだ。

一階には聖堂、二階には食堂と厨房と寝室、三階から五階はぶち抜きの図書館だ！

錠前もかなり頑丈だから防犯はばっちりだ！

おかげで去年の誕生日からほとんど俺は外に出ていない。

父上も母上もわざわざ会いに来てくれるのが少し心苦しいな。

母上はほとんど来ないけど。

ま、しっかり勉強してハルケギニアの常識を身に着けるのは悪いことじゃないからいいさ。

よーし、がんばるぞー！！

\*

勉強は実にスムーズに進んで俺は七歳になった。

例によって父上をお願いだ。

塔の一階、聖堂で父上は待っていた。

「父上、俺もそろそろ魔法を習いたいのですが」

父上は穏やかな笑みを浮かべた。

その手は杖にかかっている。

やっと、しかも直々に教えてくれるんだな！

「メアリー、始祖ブリミル様への祈りをそらんじることとはできるかい？」

毎朝聖堂で祈りを捧げている俺に死角はない！

父上の前ですらすと、余裕の表情さえ浮かべて暗唱してみせた。

「仕方がない、お前にも魔法を教えようか」

父上はえらく渋々とした様子で認めてくれた。

過保護な親をもつと大変だなあ。

ま、杖さえもらってほつといってくれば勝手に修行でもなんでもやってスクウェアになっちゃうんだけどね！

\*

さて、すすく育って俺も十四歳だ。

来年から魔法学院に入学して原作にちよいちよい顔出ししておかないとな。

戦争で武勲挙げ放題だぜー！！

あ、ちなみに今風のトライアングルです。

かなりの成長速度らしいよ、神様ありがとう！　ってなもんだよね。

「父上、そろそろ魔法学院入学の時期ではないですか？」

「む、そうか……」

父上は最近疲れ果てている。

俺が魔法を学び始めたころから疲れが目立つようになって、ゴージャスな金髪が今じゃ真っ白だ。

安心してくれ、俺がスクウェアになって親孝行してやんよ！

と言ってもハイパー過保護な父上だ。

貴族のお決まり、舞踏会とかにも全然いかせてくれない。

ずっと前の夜、母上に叫んでるの聞いちゃったしね。

「アイツを嫁にやるわけにはいかん!!」って。

いや不覚にも涙腺に来たね。

絶対内政チートで両親ともに幸せにしてやるぜ!

弟も妹もないから俺の代は後継者争いも一切気にしないでいいしな!!

婿は……心は男って感覚が残ってるから困るな。

最悪養子をとって跡継ぎにしよう。

\*

さあやってきました魔法学院。

なんつーか、ド田舎ですな!

まわりなーんにもないの、陸の孤島って感じ。

ちょっと早くついたらなんとオスマン校長自ら出迎えてくれたんだよ。

才能ある生徒はやっぱVIP待遇なんかね?

「噂は聞いているよミス・ロシュフォール。ま、お手柔らかに頼むわい」

そのままフォッフォッフォッと去っていくオールド・オスマン。

威圧感なかなかすごかった。

ふつつーの女の子、下手したら男の子でもあんなオーラぶつけたら泣いちゃうぞ？

俺は転生時の神様に会って耐性あったから余裕だったけどな！

しかし、ここから俺ののんびりレジェンドがはじまるのか。

ワクワクしてきたぜ！！

## オスマン老に安らぎを

オスマン老に安らぎを

A・D・6103 トリステイン王立魔法学院校長オールド・オスマン

万一を考えてこの手記を後世に残しておく。

ロシュフォール伯より恐るべき手紙を受け取った。

慄然たる思いで手紙を読み終えると儼は大きく息をついた。

急ぎ書を認めねばならない。

ミス・ロングビルに人払いを頼み机に向き合う。

始祖ブリミルよ、我が教え子たちに祝福をお願い申し上げます。

\*\*\*

ロシュフォール家より長女が到着する。

手紙に会った通り、この世ならざる容姿をしておった。

病的なまでに白い肌は太陽の下でなお輝いている。

まるで十年近くも外に出ていないような、それほどまでに青白い。

白百合よりもなお白い狂気じみた髪の色がまた不気味さを強調している。

さらに瞳が血のように赤い。

漆黒の星空から生まれ落ちたような少女じゃった。

しかし儂も伊達に百年生きておらん。

ありったけの胆力で少女を威嚇した。

魔法学院は儂が守る、貴様の思惑は容易ならざるものと思え、と。

だが少女は涼しげに儂の威圧を受け流したのじゃ。

並みの貴族なら腰を抜き、下手をすれば気を失うほどの活を浴びても変化がない。

ロシュフォール伯の危惧は的中している可能性が高そうじゃった。

入学式のイベントは中止することにする。

\*\*\*

入学式、儂はありったけの思いを込めて演説を行った。

普段のおちゃらけは一切出さん、そんなことをすればミス・ロシュフォールに追撃されるかもしれん。

すべての生徒は話に聞き入っており。

しかしあの異形の子には無駄なことだったようじゃ。

始祖ブリミルの偉業など知ったことか、と冒瀆的な表情が内心を物語っておった。

儂と目が合うと顔を伏せ、おぞましき忍び笑いを漏らしている。

監視の目を強めねばならんかもしれん。

\*\*\*

今年の入学生にトライアングルは二人しかおらん。

生贄にするようで悪いが、そのうちの一人、ミス・ツェルプストーにはミス・ロシュフォールと同じクラスになってもらう。

ガリアからの使者、ミス・タバサも監視役として潜入してもらった。儂が手紙を出したオルレアン機関の中でも腕利きであり、鼻が利くという。

常に監視できるわけではないので大助かりじゃ。

ジヨゼフ王はこういう事態を予測していたというのじゃろうか。

いや、今は考えまい。

モートソグニルにも申し訳ないが、ミス・ロシュフォールについて

もらっ。

用心に用心を重ねたが、不安をまだ消えん。

最近夢の中でも何かに追われている気がする。

＊＊

ミス・タバサから早速報告があつた。

彼女の正体に気付かれているかもしれない、ということじゃ。

ありえない、とは言い切れないのが恐ろしいところじゃ。

ミス・ロシュフォールはミス・タバサのことをよく目で追っている。

まるで貴様の正体はわかっているが泳がせているんだ、と言わんばかりじゃ。

それだけでなく、ミス・ツエルプストーにまで視線を送っている。

単純に実力者を見ている感じはしない。

どこか、身体を這いずり回るような視線じゃ。

男ならまだしもそんな目をした女は見たことがない。

また、おそましき三本脚の獣が月に吠える夢を見た。

祈りの時間を増やすことにする。

敬虔なブリミル教徒が膝を屈するわけにはいかん。

＊＊

百年生きてきてこれほどまでに背筋が粟立ったときにはない。

ことのおこりはミス・タバサが披露したフライじゃ。

ミス・ロシュフォールはあえて遅く詠唱し、わざと低く飛んだ。

これは間違いない、長年教鞭をとるミス・ギトーも認めたことじゃ。

どのような意図があつて実力を低く偽ったのか、わからん。

しかも薄気味悪い笑みを浮かべていたそうじゃ。

ただ彼女の本性を垣間見る瞬間があつた。

ミスタ・ロレーヌがミス・タバサに決闘を挑んで負けたとき、彼女は遠くから観察していたのだ。

決着がついたときも、その顔には何の感慨も浮かんでいなかった。

まるで決まりきった運命を知っていたかのように。

彼女は運命を知っているのじゃろうか。

だとしたらこれほど恐ろしいことはない。

始祖ブリミル、我が生徒をお守りください。

\*\*\*

新人生歓迎の舞踏会、めでたい日であろうとも儂の心は晴れない。

今日も今日とて問題が起きた。

決闘に負けた腹いせにミスタ・ロレーヌがミス・タバサとミス・ツエルプストーの二人を嵌めたのじゃ。

幸い二人は和解した、これからもいい友としてあるじゃろう。

しかし、それを些事と済ませるにあたる問題が起きたのじゃ。

やはりミス・ロシュフォールは未来を知っている。

モートソグニルに監視させておいたが、彼女は壁際から最初動かなかった。

しきりにミス・ツエルプストーを目で追っているのじゃ。

普段はミス・ツエルプストーとミス・タバサ、両者を同じくらいの比率で追っていたのにも係わらず今日は一人だけを熱心に見ておつた。

そこにミスタ・ロレーヌが事件を起こした。

その時彼女はミス・ツエルプストーを男のような情欲に満ちた目で

眺めておったのじゃ。

すぐその邪悪な表情を誤魔化すため手洗いに駆けて行ったが、おぞましき顔じゃった。

さらに帰ってきてからも冒流的な笑顔で視線がミス・ツエルプストーの体を舐め回しておった。

モートソグニルの報告によれば、その時彼女の右目が青く染まったようじゃ。

ロシュフォール伯の手紙にあった通りに。

青と赤の月目など聞いたことがない。

まして普段は両方とも同じ目なのに特定の時にだけ月目になるということはありえない。

始祖ブリミル様、儂はいつたいどうすればいいのでしょうか。

百年生きた儂にも一切わかりません。

お答えを賜りますようお願い申し上げます。

\*\*\*

ミス・ロシュフォールはとうとう二年生に進級した。

明日は使い魔召喚の儀式だ。

儂は恐れておる。

彼女を、彼女が呼び出す使い魔に底知れぬ恐怖をおぼえておる。

どのような使い魔を呼び出すのか。

この世ならざる深淵に潜む怪物を呼び出すのではなからうか。

明日は授業のないすべての教師に使い魔召喚の儀式を監視するよう命じておく。

いざとなれば何をおいても駆けつけ、生徒を守るようにと。

念には念を入れ、マザリー二枢機卿にも書を認めておく。

始祖ブリミル様、無力な子羊たちをお導きください。

\*\*\*\*\*

メアリー・スーに寿ぎを

やつほー、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュ  
フォル。

トリステイン王国のロシュフォール伯爵家長女だ。

神様の力で皆おなじみ「ゼロの使い魔」の世界に転生した元男、現女の子なんだ。

さて、とうとうトリステイン魔法学院に入学しちゃったよ。

ここで地味くに友だちの輪を広げておかないとな。

領地の繁栄も大事だけど青春は謳歌するためにあるっ！

それに今の俺はオンナノコなのだ。

つまり、つまりだ、もうみんなわかってるんだろ？

堂々と覗きができるってことなんだよ！！

ここらへんまだ俺には男の感覚が残ってるみたいだな。

まあいいじゃないか、跡継ぎなんて養子養子。

キャッキャウフフな青春は少し望めそうにないのが残念なところ。

いや待てよ。

ふっ、そういうことか。

あえて言おう、百合もまた良しッ！

ただルイズの同級生とそんな仲になっちゃうと原作の流れにどん

な影響がでるかかったもんじゃない。

百合百合ターゲットは下級生ということで、来年まで我慢しよう。

今はただ女の子を物色して、ウォッチングにとどめるだけ。

ふっふっふっふ、ターゲットはキュルケあたりかな。

ぺたん娘も悪くはないがやはり男たるものナイスバディには惹かれるのだよ。

お前今女だろって？

こまけえこたあいいんだよ！

\*

さて、入学式だ。

原作通りならオールド・オスマンが飛び降りるんだが、今回はそんなことがなかった。

なんでだろ、流石にアレは寒いと思ったのかな？

まあいいや。

なんか始祖から賜った魔法がどーたらこーたら言ってるけど正直な話どーでもいい。

それどころか話が長くなって欠伸が出ちゃったぜ。

げ、校長と目があつた。

やっべ、顔伏せておこ。

周りの貴族のお坊ちゃまお嬢さまはなんでこんな話をクツソマジメに聞けるんだろーね？

やっぱ感覚の違いかな、トリスティン人は大仰なことが好きっていうし。

日常会話で演劇みたいな言い回しが飛び交うって、元日本人としては恥ずかしいことこの上ないぜっ！

\*

これも神様のお導きなのかもしれない。

なんと赤青キュルタバコンビと一緒にのクラスになっちゃったのだ。トライアングルは一まとめにしておけ、ってことなんだろうなきつと。

それにしてもタバサ可愛いなあ。

無口で近寄るなオーラ出しちゃってるけどそこがまた良し！

食事もなんか一生懸命食べてる感があつて、リス？ みたいな。

思わず目で追っちゃうのも仕方ないよね！

キュルケもキュルケであのすばでは素晴らしい。

トリステイン貴族は慎ましかな体型が多いから余計にいい感じ。

\*

ザ・ギトーがなんか前で言ってる。

てか父上俺がトライアングルって言ってなかったんかな？

ドットとラインしかない、とかのたまってるや。

目立つのはイヤだからいいんだけどさ。

というわけでレッツ・フライ！

タバサが飛んで少ししてから、少し低めに飛んでみる。

ほぼ同時に同じ高さまでいけたんだけどやっぱり原作キャラを立ててあげないとね。

べ、別にスカートの中を覗きたいっていうんじゃないんだから！

タバサは少しだけ驚いてた。

いかん、その表情萌えますよおじょーちゃん、顔デレデレしちゃう。

スカートは抑えてなかったからきつとバレてない、よね？

あ、そういやヴィリエが原作通り挑んでボロ負けしてました。

\*

新人生歓迎舞踏会ーどんどんぱふぱふー！。

なんと素晴らしい日だろう。

この日はキュルケのエクセレント・ボディを拝むことができるのだ。

これは俺の持論だが、マツパよりもエロいものはある！

それは中途半端に肌蹴てたり破けてたりする服だ！！

数々のエロ本を読み漁った俺がその結論に至のにそう時間はかからなかった。

え？ 前世でエロ本しか読んでなかったのかつて？

……言うな、言うなよ。

てかさ、高校二年でそんなぐつちよぐちよぬちゃぬちゃするヤツいないって。

うんないない。

いないんだよ……きつと。

俺は断じて友達の体験談とか耳に挟んじやいないね！！

まあそれはおいておこう。

リアルでやったら犯罪な切り裂かれた服、今日はほっといても見れるんだ。

この機会を逃すバカはいねえ！

舞踏会中ずっと壁際に突っ立ってキュルケをガン見しておく。

ちよつち顔がにやけてるかもしれない。

ぶっ！？

破けたドレスがひらひら舞って……靴以外マッパだと！？

これは、イイ！

靴下だけというのも確かに乙なものだ、しかし舞踏会用の靴だけというのも、こう、クルものがあるね！

もう心の中は狂喜乱舞、百花繚乱さっ！！

多分今の俺すっげーニヤニヤしてる。

ちよつと顔洗ってこないと。

お、キュルケ上着羽織って……ヴィリエ。

お前のこと誤解してたよ。

お前も、紳士だ！

素っ裸にタキシードの上だけ羽織るって、それもイヤンバカンなビデオに出てきそうですよっ！

ふーふー、鼻血出そうだわ、本気で抑えないと。

うん本気で顔に力入れたらおさまった気がした。

さ、交友関係もちつとは広げにいかないとな。

視線はちらちらキュルケを追っちゃうんだけどね。

\*

キュルタバの決闘やらなんやらかんやらが終わり、俺は二年生に進級した。

なんか初日以来タバサはちらっちらっちを見てたりする。

こっちもタバサを見つめてたりするからよく目が合うんだ。

いやタバサ可愛いから目で追っちゃうんだってば。

視線がかち合ったらにっこり笑って手を振ったりするんだけど、そうするとタバサは恥ずかしそうに顔を逸らすんだよ。

……萌える。

ツンデレ＝ルイズorモンモンと思ってた時期が俺にもありました

よ。

子どもっぽいツンデレならタバサのが萌えるかしんないね。

そうそう、明日は使い魔召喚の日だ。

三日ほど前に神様と夢であつたんだよ、なんか神父っぽいカッコしてた。

せっかくだから使い魔どんなのが良い？　って親切にも聞いてくれたんだよ。

俺は悩んだよ、星の海でうんうん唸ったよ。

グリフォンとかドラゴン、マンティコアはまずアウトだろ。

そんな強そうなヤツらを呼んだら否応なしに原作ルートへ行きそう  
だ。

だからといってカエルとかネズミはちよつとなあ……。

というわけで犬か猫がいい、と思ったんだ。

でも俺は気まぐれな猫よりかまってもらいたがりな犬のが好きだ。

というわけで犬が良いって神様をお願いしといた。

勿論、チワワとかプルプル系じゃなくってドーベルマン的な獵犬だ。

戦闘も少しは考慮しないとな！

神様は名状し難い表情で了承したと言ってくれたよ。

ああ、明日が楽しみだ！

シャルロットに安心を

シャルロットに安心を

A・D・6103　オルレアン機関七号　シャルロット・エレ  
ヌ・オルレアン

ジョゼフ王に対してトリステイン魔法学院のオールド・オスマンよ  
り書状が届いた。

オルレアン機関に協力を求める内容だった。

これよりトリステイン魔法学院へ留学生・タバサとして潜入任務に  
入る。

なお記録・証拠として手記を残しておく。

オールド・オスマンからの書状には簡潔にこうあった。

——本年の新生であるロシュフォール家長女。

かのおそろべき者らに連なる可能性高し——

亡くなった、いや、人でなくなった父さまの手掛かりを今度こそ得  
られるかもしれない。

\*\*\*

魔法学院に来てひと月がたった。

メアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュフォールに関しては限りなく黒に近い灰色である、と判断を下した。

怪しすぎる点が次々に浮上したのだ。

最悪わたしの正体も知られているかもしれない。

彼女はわたしとゲルマニアからの留学生、キュルケ（友達になった）をよく目で追っている。

以下に異常な点をまとめると。

・烈風カリンですらたじろいたオールド・オスマンの本気の威嚇にも涼しい顔をしていた。

・入学式では、感動的なオールド・オスマンの演説にすら冒流的な笑いをこぼす。

・キュルケとわたしに対して身体を舐め回すような視線を送ってくる。

・授業でわたしのフライに対してわざと遅く、低く飛んだ。

・その際おぞましい笑顔をしていた。

・舞踏会するとき、キュルケを監視していた。

・ キルケは風魔法による襲撃を受け、そのあわれな姿を病的な嘲笑で見ていた。

・ 時折右目が青くなる。

見れば見るほど怪しい。

一周回って怪しくないかもしれない、と感じるほど露骨だ。

だが気を抜いてはいけない。

明日は使い魔召喚がある。

彼女がかの邪知暴虐な輩に連なるのなら、必ず悪しき存在を召喚するだろう。

ひよっとしたら父さまを、いややめておこう。

万全の体調で明日を迎えるため早く寝る。

\*\*\*

使い魔召喚の日。

天候は最悪、暑い雲が空を覆い雷が轟いていた。

それでも儀式は執り行うようで、みんなそろって学院から少し離れた草原まで来ていた。

監督官はミスタ・コルベール、ミスタ・ギトーなど戦闘に長けた教

員が多かった。

おそらくオールド・オスマンの配慮だろう。

特にミスタ・コルベールは過去にアカデミーで奴らと対抗したとの話も聞く。

奴らと戦って正気を保っていられる人物は希少だ。

今後も頼る機会があるかもしれない。

さて、わたしは風韻竜を召喚した。

イルククウと名乗ったが韻竜は切り札ともなりうる存在なので、シルフィードと仮の名前を与え、風竜として振舞うようにいった。

問題のロシユフォール家長女はなんとも奇怪な詠唱でサモン・サーヴァントを行った。

召喚のゲートは出現したが、しばらく使い魔は現れなかった。

すると何を思ったのか、彼女は土をゲートに盛り始めたのだ！

始祖が与えられた運命に逆らおうというのか、彼女は。

そのとき止めに入ろうと思えばできたかもしれない。

だが、実際には誰も動くことはできなかった。

それは彼女がぶつぶつとこの世ならざる言葉で何事かを呟いていた

からなのか。

それとも底知れぬ存在の気配を感じたからなのか。

今となつてはわからない。

彼女は続いて折れた木の枝をゲートに突っ込んだ。

ああ、思い出すのもおぞましい！

木の枝の根元から、深淵から染み出したような煙が噴き出てきた。

それが次第に凝集しだし、四足の獣のような形をとりだしたのだ。

あの姿を正確に形容する術をわたしは知らない。

太く曲がりくねって、先端が鋭くどがつた舌を持ち、爬虫類のような背中というべきだろうか、この世のどんな生き物もそんなおぞましい姿はとらないだろう。

大きさは子犬程度だったが、発する威圧感は並みの幻獣を凌駕していた。

しかも体からはなにか青みがかつた液体を垂れ流している。

まるで地獄の深淵から引きずり出され、この空気に耐えられない獣のようだ。

ロシュフォール家長女は恐怖など感じさせない表情で、むしろ歓喜さえあふれていた、コントラクト・サーヴァントを行った。

その際のスペルがまた特有のもので、彼女が始祖ブリミル以外の何かに仕えていることはほぼ明らかだった。

無事契約を終えた彼女は例の冒瀆的な表情を浮かべていた。

＊＊

恐るべき事実を知ってしまった。

やはり彼女はかの者らに奉仕している、確定だ。

この情報を速やかに伝えねばならない。

召喚の儀式が終わった後、外でロシュフオール家長女が唸っていた。

口から出るのはあの名状し難い言葉だ。

ひとしきり何かを呟いた後、いきなり手を叩いた。

遠くからだったが彼女の口から「Doom Tsathoggua」という言葉が発せられたのがわかった。

Doomとは古いアルビオン言葉で滅びを意味する。

そしてTsathoggua、この言葉を知っているということは間違いなくこちら側の存在だ。

あのおぞましい使い魔を召喚したということは、人類側ではなく向こう側だろう。

ひょっとすると使い魔はユゴス由来のものなのかもしれない。

父さまが連れ去られたと言われる遙か月よりも遠い暗黒の地の。

そろそろこの報告書を書き上げてしまおう。

なにか臭いがする、鼻につんと刺激を感じる臭いだ。

思わず部屋中を見回す。

何も異常はない。

いや、そんな！

あの煙はなんだ！

角に！ 角に！

\*\*\*\*\*

メアリー・スーに祝砲を

おっす、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュフ

オール。

トリステイン王国のロシュフォール伯爵家長女だ。

神様の力で皆おなじみ「ゼロの使い魔」の世界に転生した元男、現女の子なんだ。

そついや今腰くらいのさらっさらな長髪なんだけど髪切ろうかね？

ま、いいや。

いよいよ今日は使い魔召喚の儀式なんだ。

原作じゃ抜けるような青空だったんだけど、なんかどんより曇ってる。

たまにゴロゴロ雷の音も聞こえるしさ。

まあ天気くらい変わるだろ、俺っていう異分子が入って来てるんだから。

っつーわけでレッツ召喚ですよ！

天気以外は原作通り、キュルケはフレイムさん、タバサはシルフィードさんを召喚しちゃいました。

さー神様、俺の望みを叶えてくれるのかなー！

お前は特にお気に入り、的なことを言ってたから大丈夫だとは思ってんだけどねっ！

召喚のスペルはルイズのやつをマネしてみるか。

どんなのだっけ、流石にうる覚えだぞ。

確か……。

「外宇宙の果てのどこかにいる、俺の下僕よ！

強く、愛らしく、そして生命力に溢れた使い魔よ！

俺は心より求め、訴える。我が導きに応えよワンちゃん！」

さあ来いワンちゃん！

どんな子が来るのっかなー。

……。

おかしいな、出てこないぞ。

どうなってるんだ??

む、神様からテレパシーが届いたぞ。

なにに「鋭角がないと来れない子」だって？

そんな犬聞いたことないんだけどな……。

土でも盛ってみるか、ってダメか、盛った分だけゲートに吸い込ま

れていくぞ。

うーん、仕方ないからそこらの木の枝でもゲートに突っ込んでみるか。

えいつ！

お、来た来た杖の根元からなんか出てきたぞ。

なんかでろでろ青黒い煙だな、なんか臭いし。

これもサモン・サーヴァントに……なるよね、うんなるなる、なるに決まってるさ！

煙が集まってきたな……。

おお、なんか見たことない犬種だけど超強そうだ！

ハルケギニアは広いなあ。

まあ原作で出てきてない種族なんかもたくさんいそうだし。

ちつと見た目グロイ気がするけど、うん慣れればへーきへーき。

さ、レッツコントラクト・サーヴァントッ！

「我が名はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュフォール。宇宙の力を司るトラペゾヘドロン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

口にちゅっとね。

これで夢にまで見たワンちゃんライフが俺の手にも……。

ふふふ、今日はよく寝れそうだ。

でもこの子獣臭いな、あとで洗ってやるか。

なんか体も心なしかデロデロしてる気がするし。

おっと、顔ぺろぺろするな。

やけに舌長いな、まーいいけどさ。

あ、才人召喚されてら。

\*

ヴェストリの広場で俺は悩んでいた。

コントラクト・サーヴァントの影響がワンちゃんは尻尾をぶんぶん振ってじゃれついてくる。

そこらへんに生えていた猫じゃらしっぱい草で遊んでやりながら考え込む。

このワンワンにどんな名前をつけてやるか、大きな問題だ。

例えばだ、俺が父親になったとする。

息子にどんな名前をつけてやるだろうか。

うーむ、難問だ。

強くあつてほしいから獅生しおとというのはどうだろうか。

それとも心なしが狼きんろうっぽく見えなくもないから銀狼とか。

あいやここはハルケギニアだから西洋っぽい名前だな。

勝都びくとというのがいいかもしれない。

……待てよ。

キュルケのサラマンダーはフレイム、タバサの風竜はシルフィード。

なら属性とか種族に対応した名前をつけるべきか。

犬だから……パトラッシュ、ハチ公、カイくん。

んーどれもイマイチパツとしないな。

俺はそもそもこの子にどうあつてほしいんだ。

……可愛く賢くあつてほしいかなあ、強さは二の次として。

図書館にこもることが多い俺はあんまし友達いないし。

このワンちゃんのラヴリーさで友達ゲット！　みたいな感じに。

いやいや、家族になる子を利用とかよくないよな。

おっと脱線脱線、名前か。

むう……そうだ！

「今日からお前はドン松五郎だ！」

結局日本的なネーミングになってしまったが、ぴったりの気もする。

そのうち新聞とかも読ませてみようかな。

たまたま通りかかったタバサがぎょつとした顔をしてた。

どーでもいいけどコイツ目がない気がするな。

つぶらなおめめにも期待してたんだが、人懐っこいヤツだからいいか。

\*

さて、ドンは活発でお茶目なヤツだった。

多分使い魔としての特殊能力だと思うけど、部屋の隅っこから自由自在に出入りできるのだ。

ひょっとしたらすごく小さな穴でも潜り抜けることができるのかも。

だとしたらなかなか便利な能力だと思う。

俺は現代っ子だからG様やネズミがあまり得意じゃない。

そのうち駆除してもらおう。

使い魔品評会でもこれでなんかできねーかな。

話はそれだけどその能力を使って人様の部屋に不法侵入しているよ  
うだ。

特にタバサがお気に入りらしい。

コイツも大食いだからシンパシーでも感じてるのかな？

いないなーと思えばタバサの部屋の方からトコトコ歩いてくる。

まあ、可愛い子犬だしタバサもイヤだったら俺に言いに来るだろ。

それとも飼い主として先にあいさつしておくべきか？

んー前世でも犬なんか飼ったことないからそこらへんのマナーがよくわからん。

あ、でもそのうちマルトーさんには謝りに行った方がよさそうだな。  
どうもドンは常に腹ペコなようで厨房に忍び込んではいろいろ物色

してくるらしい。

というのはたまに部屋の隅っこで与えた覚えのないナニかをじゅるじゅる啜っているのだ。

俺はもう慣れたけど、綺麗にしてもちよっと臭うから料理をする場にはふさわしくない。

本音を言えば厨房には突入しないでほしいんだけど、ドンはこのことに関しては言うことを聞かない。

生意気なお犬様め、俺が飼い主でなければぺチンと叩いているところだ。

マルトーさんにきちんと話して、できれば部屋の隅っこかを石膏で埋めて穴をふさがないと。

さ、それはさておき魔法の練習練習。

目指せスクウェアー！！

## サイト・ヒラガに祝福を

2004年 じゃなくて A・D・6104 平賀才人

なんか異世界に來たし今日から日記つける。

俺の名前は平賀才人、ここ風に言えばサイト・ヒラガ。

元・東京在住の十七歳、高校三年生で青春真っ盛りのイケメンだ！

……ごめん嘘ついた、青春を楽しもうとがんばるフツメンだ！！

なんか昔っから皆には「抜けてる」って言われてるけどそんなことないぜ？

こんなよくわからないところには來たのは……事故だ。

考えてみてくれよ？

道路のど真ん中に身長くらいある銀色の楕円形がふわふわ浮いてたら。

まず裏側確認して、それから色々したくなる、誰だってそーするに決まってる。

唯一の誤算は月が二つあって魔法使いがいるファンタジー！ と思わず叫びたくなる世界に召喚されちゃったことだ。

ハルケギニアとかいう世界は魔法どころかエルフまでいるらしい。

エルフと言えば森に棲んでとんでもない美形ばかり、ってイメージだけど砂漠に住んでるんだって。

人間より魔法がすごい強くて、でも性格は穏やかだとか。

気は優しくて力持ちってヤツだな。

あとドラゴンやらグリフォンやら動物園にいればパンダなんて目じゃないヤツらもいるんだ。

実際青いドラゴン見たけどすごかった、でかい、怖い、食われそう。

大丈夫かなあ俺、ドラゴンころしが必要な場所だったら一ヶ月もしないうちに死ねちゃうぜ。

そうそう、俺を召喚しちまった貴族のお嬢さまの紹介がまだだったな。

名前はルイズ、ルイズ……ルイズなんとかかんとか！

長すぎて忘れちゃったよ、それにファーストネームで呼んでいいって言ってくれたし。

女の子の下の名前呼ぶなんてはじめてだよ、声にするだけでドキドキだよ。

そのルイズなんだけど、すっげー可愛いの！

うまく説明できないんだけどさ、「天下無双、外宇宙に名をはせる、

邪神も裸足で逃げ出す無敵無謬深淵の中を覗き込むほどの驚きを伴う美少女」って感じ？

まあ欠点は、日本語なんか誰も読めないし書いとくか、胸のサイズだな。

お隣のキュルケって子くらいなら完璧というか、宇宙一の称号を授けてもいいくらい。

というか、ピンクブロンドの髪なんてはじめて見たぜ、アレで染めてないとか遺伝子仕事してるの？

性格も書いておくか。

貴族のお嬢さまって言うからよくある「おーっほっほっほ！」とかを想像したワケですよ。

全然違う、超優しい。

この子俺に惚れてるの、ってレベル。

他の貴族とはほとんどステレオタイプなヤツらだからルイズだけが違うの。

こんな非の打ちどころのない美少女とキスしたなんて、俺幸せ者！

残念ながら帰る魔法は今のところないらしいし、とにかく精いっぱいルイズのためにがんばろうと思う。

出会い系に登録したばかりだったんだけどな……ぐすん。

今日はもう寝る！

＊＊

二日目にして色々ありまくりだったよ。

いきなり三日間寝太郎状態だったらしい、ルイズ世話かけて心配させてごめん。

とりあえず朝のことから。

女の子とかを連れ帰った渋いおっさんって、その子をベッドに寝かして自分はソファで寝るじゃん。

アレ結構きついんだな。

寝返りうてないから窮屈な感じするんだよ。

まあルイズがメイドさんたちに頼んだおかげで、石の床に寝るってのは防げたからよかったんだけどさ。

さらに女の子と一つ屋根の下どころか同室で寝るなんてはじめてだったんだ。

窮屈なのもあって「寝れるかな？」とは思ってたけど心配なかった。

一瞬で寝れたよ、俺の適応能力すごい、鈍いのかコレ？

朝はメイドさんと使用人さんと一緒にご飯、かなり美味しかった。

でもパンなんだよ、そのうち絶対ご飯が恋しくなるに違いない。

変な臭いがするからそっち見たら変な獣が舌伸ばしてみてた。

ロシュフォールさんって子の使い魔らしい。

子犬くらいの大きさにのなんか怖い、威圧感というか圧迫感がある。

同時に見ててムカついてくるのはなんでだったんだろ。

しばらくこっち見てどっかいった。

＊＊

んでもって次は授業、教室がすごかった。

海外映画でしか見たこと石造りの教室とか。

さらにすごいのが使い魔、もう怖い。

「俺こいつらと同列？」って少し悲しくもなった。

そして、ルイズがいじめられてるのもわかった。

魔法唱えたら爆発するだけだろ。

なにがゼロのルイズだよ、お前らなんでがんばってるヤツをバカにできるんだよ。

ふざけんなっての。

そう叫ぼうとしたけどルイズに肩を抑えられた。

「わたしは大丈夫」って目で言ってた、でも辛そうだった。

優しくされたのもあるかもしれないけど、そんな時は絶対ルイズの味方でいるって決めた。

あとすごく印象に残ってるの。

すごい背筋がぞわぞわする子がいた。

いや、キモイとかそういうのんじゃないんだ。

すごい美人だと思う、肌も髪も真っ白で目が赤い、日本じゃアニメにしかないみたいな感じの子。

見た瞬間「コイツはやバイ！」って思った。

ルイズが太っちょ貴族にバカにされたときとか凄い表情浮かべてた。

なんていうか、表現できない顔、喜怒哀楽全部一緒に浮かべたらあなるのかも。

そのあとも不気味にぶるぶる震えてた。

ああもう、自分で何書いてるのかわかんね。

とりあえず教室はピッカピカにしてやった。

\*\*\*

俺、実は剣の達人かも。

ルイズがお金払ってるみたいだけどお手伝いしようと思ったんだ。

ほら、一人だけゴロゴロしてると他の人が気分悪いし、バイトの予行演習にもなりそうだし。

食堂でデザート配り手伝うことになったんだよ。

この時シエスタ、って子に教えてもらって少し仲良くなった。

んで、配ってるとき親切で香水みたいな匂い捨ててやったらなんか決闘することになった。

相手は金髪フリフリキザ貴族、腹立つことにイケメン。

しかも二股かけてそれが俺のせいでバレたとか。

知るか！

とにかく広場に行ったんだけどきつたねえの、魔法強いよ。

ぼっこぼこに殴られてもう何がなんだかわからなかった。

ルイズが泣いてた気もするし、キザイケメン貴族もちょっと引いてた気がする。

でもなにより覚えているのは例の白い子。

すごい怒ってるようにも楽しそうにも見えて、ほっといたら人殺し  
そんな勢いに見えた。

メンヘラってヤツなのかもしれない。

授業中見たときは「コイツはヤバイ！」だったけどその時は「コ  
イツを何とかしろ！」って心が叫んでたような。

流石に三日間寝っぱなしだから詳しくは思い出せないけど。

白い子が顔を伏せたからイケメンの方見て、そしたら剣が刺さつて  
たんだよ。

尻もちついてたから立ち上がるために握ったらすごい。

世界が変わった。

もうイケメンとか敵じゃなかった。

あつという間に決着ついた、でも「コイツを何とかしろ！」って感  
情がすっげー強くなった、気がする。

あんだけボコスカ殴られてるんだからそりゃ忘れるよな。

で、とりあえずルイズのところにっこうとして剣を手離したらぶっ倒  
れちゃったと。

世の中不思議なことばかりだ。

起きてからルイズにすごく怒られた、泣かれた。

泣いた女の子ってどうあやせばいいの？ 誰か教えてよ！

今からルイズに土下座してきます。

\*\*\*\*\*

メアリー・スーに歓びを

ちーっす、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュ  
フォール。

トリステイン王国のロシュフォール伯爵家長女だ。

神様の力で皆おなじみ「ゼロの使い魔」の世界に転生した元男、現  
女の子なんだ。

本気出すと右目青くなるけど、冷静に考えれば俺の人生プランで必  
要になるときないよな。

ま、いいや。

前回も言っただけどサモン・サーヴァントしたんだ、ワンちゃんだぜワンちゃん。

見た目はかなり強そうだから賢くなってほしいという意味を込めてドン松五郎って名前をつけたんだ。

ハルケギニア風に言うと「ドゥンムアツグオルオ！」って感じ？

一回噛んで「ドゥンムアツトゴア」とか言っちゃった、それ以来普段はドンって呼んでる。

強そうでいて可愛いけど、グルメで大食い。

エサ代がかかるのが玉に瑕なヤツだ、なんで豚の頭とか牛の頭を好むかねえ。

\*

さておき原作開始ですよ奥さん。

めでたく才人が召喚されてごろごろ契約の痛みで転がってたり。

今までクラス違うから知らなかったんだけどさ、ルイズめっちゃ良い子なんだよ。

召喚翌日の朝ごはん、才人のことみんなかわいそうって思ったっしょ？

違うんだよこれが原作とは。

アルヴィーズの食堂には連れてこず使用人用の場所で食べさせてるんだよ。

ドンの視界共有（どこに目があるかわからんけど）で確認したから間違いない。

これにはびっくり！

この様子だと昨夜もまっとうな寝床を与えてもらったのかも。

魔法が使えないから自然平民には優しくするようになったのかもしれないな。

ここらへんも原作とのギャップだ。

でも魔法はボカンボカンやらかしてるみたいで同級生からは「ゼロのルイズ」呼ばわりされてる。

正直な、マリコルヌの悪口とか「お前小学生かよ！」って突っ込みたくなるほどちんけなの。

もう顔伏せて笑いこらえるのが精いっぱい、きつと肩とか震えまくってるよ。

おっと、ミセス・シュヴルーズが入ってきた。

授業はきっちり聞け、なんたつて魔法の勉強は楽しいからね。

物理法則なんか知ったこっちゃねえよ！　ってところが特に。

感覚頼みなところが多すぎてぶっちゃけ座学できすぎても意味ないけど。

\*

決闘って何が楽しいんだろうね。

ここは原作通りにイベント進行してくれて安心の限りだよホント。

バタフライエフェクトだっけ？

よくわからんけど風が吹けば桶屋が儲かる的なアレやコレで流れが変わりすぎても困るんです。

ただでさえ俺って異分子がいるんだから極力原作キャラとは語らずにいきたいね。

武勲挙げて領地に引っ込んで内政チート！　それが俺の人生目標。

うわ、才人フルボッコじゃなか。

ラノベとかアニメだとわかんないと思うけど、これはひどい。

もう見てるのが辛くなってくるレベル、よくこんなので立ち上げれるよな。

あーイタイイタイちよっとホント無理見てらんない。

でも剣握ってからを見守る必要はあるから動けねえな。

仕方ない、地面でも睨んでおくか。

にしても貴族様ってのはかなりいいご趣味をお持ちだね。

一対一とは言えリンチと変わんないじゃん。

ボクシングとかみたいな試合とは違うんだぜ？

なんで止めようとしないのさ、下手すりゃ死ぬぞ。

こいつら全員痛い目見た方がいいんじゃないか、って思ってしまう。

おかしいな、俺こんなこと思うキャラじゃなかったはずなのに。

普段通りのスタンスなら「モブ貴族なんて知ったこっちゃねーや」に近いと思うんだがなあ。

ああ、アレだな。ドンを召喚したことで優しさに包まれちゃったんだな。

今まで以上に優しくなるとか、人間国宝と呼ばれてもおおかしくないレベルだろ。

お、おバカなこと考えてたら才人剣握りやがった。

すげえ、ありえねえ、速いとかそんなチャチなもんじゃない。

「あなたボルトさんですか？」ってくらい、人類規格ぶつちぎり。

虚無の使い魔は伊達じゃないな……もうすぐスクウェアになれそう

な俺でも接近戦は勝てそうにない。

距離さえあればなんとでもできるんだろうけど、デルフリンガー持てばマジメイジ殺し。

……と、なんでこんな好戦的な考え方してるんだか。あほらし。

さてと、タバサが住む図書館にでも行きますかね。

\*

もうね、力がぐくと抜けたよ。

なんなんだよアレ。

今アルビオンが原作通りヤバイらしいんだけどさーレコン・キスタじゃないの。

聞きたい？

そんな聞きたい？

脱力すんなよ？

……「ニヤル様とホップを愛でる会」だ。

ほんと「ハア!？」って感じだよな。

こんなに滅ぼされそうになるってアルビオン大丈夫かよ。

ホップってビールかよ、ゼロ魔はエールだっけ？

どうでもいいか。

なんか使用人の噂話を小耳にはさんだ程度だけど、なんだかなーって人生嘆きたくなるぜ。

二回目の人生だけどな！

さて謎な名前だがどういうことだろう。

ニヤル様って人とホップを品種改良して美味しいエールを造ろうって会なのか？

それともニヤル様って人とその弟子ホップの漫才を見てニヤニヤすればいいのか？

まったく一切見当もつかん。

ここにきて原作との乖離が進み始めたなー。

物語なんだからその辺きっちりしてほしいぜ。

大筋で考えれば別にいいんだけど、無能王ジョゼフの戯れってヤツか。

まあ名前なんて些細な問題でアルビオン占領されそうになってる事実だけが大事だよな。

こりゃ俺もキュルタバに着いて現地行って確認すべきかもな。

あ、そーいや今日フリッグの舞踏会なのにフーケさん来なかったぞ。

ロケットランチャーを一度ナマで見たかったのに……。

サイト・ヒラガに祝福を（後書き）

次回「外伝 ダングルテールの影」 番外編 マルトーに沈黙を」

## 外伝 ダンゲルテールの影

A・D・6084 小隊長

深夜、黒く分厚い雲が空を覆い隠しいつもは冴え冴えと大地を照らし出す月明かりはない。

上層部からの命令で疫病が蔓延している海辺の寒村ダンゲルテールを、住民も建物もすべてを跡形もなく焼き払う。

命令書によると、特に教会と妖しげなロマリアの女を念入りに焼ける指示だ。

ロマリア人が疫病を持ち込んだのか、村人は偉大なる始祖ブリミルの威光で病気を癒そうとしているのだろうか。

今回の任務は普段の化け物退治とは異なり、腑に落ちない点が多い。

特にわからないのは妖しげなロマリアの女、特徴などは一切知らされていないのにどうやって特定しろというのだ。

疫病などは嘘で本当は新教徒の焼き討ちではないだろうか。

副長と協議した結果、まずは調査を行い真実疫病ならば跡形も残さず焼くことにした。

村に潜入する。

実験小隊は火メイジ十名、風メイジ五名、土メイジ三名、水メイジ

二名の計二十名からなる。

北は海、南は山に囲まれた村だ。

西からわたしを含め五名、東から副長含め五名、八時の床入りの鐘を合図に進入する。

他に墓場の様子を見て異常を探る犬と梟を使い魔にもつ二名、東西に四名ずつ待機要員を残し、疫病の発生を確認すればどこかで火を熾して追加要員二名ずつが外周部から村を燃やす。

街道をあえて封鎖しなければ恐怖にかられた人々は疑問も覚えず東西どちらかに逃げるだろう。

そこで待機要員が奇襲をかける。

万一村人が山に逃げても追いかければ済むことだ。

熟達した火のメイジにかかれば暗闇の中体温を感知することなどたやすい。

副長はそちらの才能にあふれているよう感じる。

地の底から響いてくるような、不気味な鐘の音が響いた。

念入りにマスクを確認する。

焼き討ちを行う予定である以上、無用の灰や死体から立ち込める瘴気を吸い込まぬよう必要な処置だ。

無言で杖を掲げ音も立てず駆ける。

目指すは村の中心にある教会、ロマリア女と並ぶもう一つの不自然な点を探る。

闇夜とはいえ道の中央を進んだりはしない、極力姿を隠しながら足を進めるがどうもおかしい。

床入りの鐘が鳴った直後だというのに人がいない。

カキを拾うしかないような寒村だとしても幾人かは床入りの鐘直後に船の様子を見に行くはずだ。

それに家から漏れるはずの灯りが見えない。

村の中は全き暗闇に閉ざされていた。

夏も近いというのに村は底知れない冷氣に覆われている。

唐突に霧が立ち込めはじめ、ただでさえ先のわからぬ漆黒の夜闇の中を行く私たちの視界をさらに妨げたのだった。

素早く方陣を組み耳を澄ませ、蠢いているようにも見える闇を凝視する。

特異的な温度変化はわからず、ぺちゃくちゃと奇怪な喋り声がどこからともなく聞こえる。

ハルケギニア公用語ではない、風メイジが教会の方角を指さした。

一分ほど襲撃に備えたが動く気配はない、その間にも霧は地の底から湧き出ているかのように濃くなっていく。

方陣を維持したままゆっくりと歩みを進める。

村は狭い、五分もせずに教会へ着いた。

反対側から霧に紛れて人がやってくる、五名だ。

油断なく杖をかまえるが、現れたのは副長たちだった。

「隊長、この村と霧は妙です」

「承知している、教会からも何か聞こえる」

声を潜めながらの会話よりも教会から聞こえる声の方が大きい。

地獄の深淵から響くような大合唱だ、念のため一部を記録しておく。

——いあ！　いあ！　ないあ×××××××！——

その時、私の隊の風メイジが猛烈に震えだす。

白目をむきながら奇妙なひきつり笑いを浮かべ、歯の根がかみあっていない。

いたるところから噴き出す汗は水たまりをつくりそうなほどの量で、明らかに正気を欠いた様子だった。

わたしと二名が介抱のために残り、他の隊員で教会の周囲を探索した。

おそらく櫓で造られた教会の重厚な扉を睨みつける。

遠目にはブリミル教の様式にのっとっているように見える、しかしそれはまやかしだった。

双月を見上げる三本脚の奇妙な獣、奇妙な姿の人物に教えを賜う民衆、どこことなく太った女性に見える何かが彫られ、まともな司祭が見れば怒り狂うだろう。

元々あったブリミル教の教会を改造したものであるようだ。

教会の主は新教徒ではない、彼らは実践的なだけであって始祖ブリミルに唾吐くような存在ではない。

墓場の方から一度だけ犬の遠吠えが聞こえる。

異常なしのサインだ。

周囲を探索していた隊員も次々と戻り首を横に振った。

ダングルテールで疫病など発生していない、これは確定した。

しかし同時に新教徒の焼き討ちでもない。

もつと狂気じみた何かだ。

これを見逃せばハルケギニアの滅亡につながると、奇妙な確信をわたしはもった。

不自然なまでに情報の少ない命令書も政治的判断などではなく、危険性が高すぎて最低限しか情報を確保できなかったに違いない。

副長も同様の思いを抱いているのか、人相の悪い顔で病的な扉を睨みつけている。

二人頷き合い、近接戦闘に長けたアルビオン系風のラインメイジのチャールズ・ウォード、魔法の威力はトライアングルに迫るゲルマニア生まれの火のラインであるエーリツヒ・ツァンを突入部隊として残し、他の隊員は恐怖のしみついた村の各地へ送る。

調子の悪い隊員は一人だけつけて街道へ伏せるよう指示を出した。

おぞましく形容しがたい儀式の声はいよいよ大きくなっていく。

私は火球を生み出し空中で待機させる、副長も同じスペルを詠唱した。

清浄なる始祖の火で祓われるかのように周囲を覆っていた霧は消え失せる。

辺りを赤色で染める炎を教会の正面にある民家にぶつけた。

光源としては十分だ、各地に散った隊員もこれを合図として村を焼きはじめるだろう。

異変を察知したのか、教会内部から這いよるように染み出ていた声は止み、まっとうなハルケギニア公用語が聞こえてくる。

チャールズが素早くエア・ハンマーを詠唱し、エーリツヒも追従してフレイム・ボールを唱え出す。

一拍早く完成した風の大槌が妖しい教会の扉をぶち抜いた。

空気の塊は余勢を駆って教会内にまで吹き込み、黒づくめの人々を数人打ち砕く。

開け放たれた正門から流れ出る空気は冷たさどころか纏わりつくような感触まであり、泥沼にひきずりこまれるような気持ち悪さがあった。

礼拝でなくとも普通は蠟燭を灯すというのに、教会内部に明かりはない。

そこにエーリツヒの強烈なフレイム・ボールが、光を伴いながらも教会内を飛び込んだ。

真昼の太陽のような明るさで得体のしれない暗闇で満たされた室内を照らしたし、中にいた村人らしき黒づくめを慈悲のかけらもなく炎に包む。

それを松明として教会に踏み込むと、おおよそ五十名近くの長椅子に座った人々がこちらを驚いた様子で振り返る。

事前情報にあった村人の数と一致する、このダングルテールは邪教

に染められていたのだ！

そして祭壇らしき大きな台座、そこには金髪の幼子が寝かされており、すぐ傍には妖しい女が佇んでいた。

なんというのだろうか、ハルケギニアにはない独特な顔立ちで遠くロバ・アル・カリイエのそのまた向こう、東の果てから来たような印象を受けた。

黒いフードをかぶってその髪型などはわからなかったが、凄まじい色香を放つ美女だった。

しかしその本質は違う、この女は始祖の威光も届かぬ夜空の果てのさらに裏側から滴り落ちて形作られた存在だ。

私は一瞬で確信を持つ、命令書にあるロマリア女だ。

恐怖に責め立てられるように一瞬で炎を練り上げ、こちらへ奇怪なうめき声をあげながら襲い掛かってくる村人を無視して一条の炎を放った。

この時私は極度の興奮状態にあり、どのような詠唱を行ったのか一切覚えていない。

焰は確かにロマリア女を貫き黒い衣を聖なる炎で包んだ。

焼かれながらもロマリア女は高々と狂笑をあげ、ついには床に倒れ伏した。

その瞬間のことだ、凄まじい勢いで女から溢れ出た漆黒の闇が、炎

の灯りすら塗りつぶして教会内を満たした。

副長が素早く一步前に進み出てフレイム・ウォールで村人と私たちとを遮断したが、暗黒はそれすらも食いつくすように襲い掛かる。

この世ならざる光景に足がすくみ絶望を覚える。

が、チャールズのウィンド・ブレイクで四人は教会内からたたき出された。

蠢く闇は教会からは出られない様子で、誰よりも早く立ち直ったエーリツヒが恐怖を振り払うかのように火球を幾度となく叩きつけた。

私たちも様々な攻撃魔法を放ったが、闇はあらゆる魔法を吸い込み続け、やがて教会内へゆるゆると後退し、ついにはその姿を消した。

全周囲への警戒も忘れ四人でじっと教会の暗闇を見つめる。

しばらく様子を見たが、教会内からは人ひとり分の心音と呼吸音しか聞こえない、というチャールズの判断を元に私たち四人はそこいらの薪を松明がわりに教会内へ踏み込むことにした。

まずは火をつけた薪を教会内に放り込むが、赤々とした光に照らされるだけで何も反応はない。

注意深く踏み入ってはみたものの、残されたものは少なく石造りの教会はがらんとしていた。

黒衣を纏った村人の姿はなく、まるで先の光景が夢であったかと錯覚しそうになる。

ただ祭壇で眠る金髪の幼子がここであつたことは現実だと教えてくれた。

得体のしれない女が立っていたところには、腹部を貫かれ絶命した金髪のロマリア女が倒れていた。

ありえないことに、私が見た女とは顔がまったく違う。

副長たちに確認をとつたところ彼らは顔を見ていないようで断固たる確証は得られなかった。

さらに炎で焼かれたあとがない、腹部の傷も鋭利な刃物で貫かれるどころか、神の祝福を受けた一撃でなければこれほど綺麗な跡にはならない。

その表情はようやく楽になれる、という死を待ち望んでいた人が浮かべるものだった。

先のスペルを覚えていないこともあって、これは顔こそ違うものの不気味な女だったと判断した。

その時、死体を検分していた私の後ろで突如叫び声があがった。

瞬時に詠唱を終えるときにも振り返ると、例の漆黒が目元に纏わりつき狂ったような笑みを浮かべて副長が私に炎球を浴びせてきたのだ。

隣で見ていたエーリツヒとチャールズが止める間もなかった。

素早く身を投げ出しファイアー・ボールを回避するも、首筋に炎がかすめる。

立ち上がると同時にごく小さな火球を容赦なく副長の目元に放った。

副長は正気を失ったかのように凄まじい叫び声をあげ、力を失ったように膝について倒れた。

私は油断なく大きな炎を生み出して教会の内部を隅々まで照らし出す。

チャールズは手早く杖を奪って風のロープで副長を拘束し、秘薬で火傷の手当てにかかった。

一方エーリツヒは杖を幼子に向け、ブレイドを唱えた。

「待つんだ」

「ですが隊長、危険すぎます」

彼の制止を振り切って私は幼子に近づいた。

邪教の祭壇に捧げられた三つほどにしかない女の子だ、むしろ私たちブリミル教側の存在ではないか、とその時の私は考えたのだ。

服装は貧しい平民の子供そのもの、金髪も顔立ちも珍しいものではない。

しかし決定的におかしな存在が目についた、指輪だ。

「これは……すごいルビーですな」

私の後ろで身構えていたエーリツヒも思わず目をうばわれたほどだ。

邪悪な気配は一切感じない、むしろこれほど聖浄な指輪がこの教会にあったのか、と驚きを覚えるほどだ。

ロマリア由来の聖遺物に違いない、と二人で結論づけた。

「隊長、副長が目覚めます」

チャールズの言葉に私は振り返る。

エーリツヒは念のため幼子を警戒していた。

「面目ねえ」

口から飛び出したのはいつもの皮肉気な声だった。

だが油断はできない、杖を向けながら拘束はとかない。

「何があつた、答える副長」

「オレにもわかりません。いきなり目の前が暗くなつたと思えば隊長に焼かれた、ってところですね」

やれやれと肩を竦めながら答える姿は完全に副長そのものだ。

しかしこの教会ではありえないことばかりが起きている、こうして喋っているのが副長であると断言はできない。

「悪いがまだ拘束を解けないな」

「それは承知してます、自分がふがいなすぎて死罪でもかまわんほどです」

うつすらと笑みを浮かべながら副長は肩を落とした。

彼は実力もさることながらプライドも高い。

邪悪な存在に一瞬とはいえ乗っ取られた自分を情けなく思っているのだろう。

副長の監視はチャールズに任せ幼子の処置をエーリッヒと二人で考える。

私は幼子連れて行くべきだと考えていたが、当然ながらエーリッヒは強く反発した。

チャールズもこの場で殺すことに、もつと言えば命令書に従うことに賛成している。

副長は何も語らず目をつむっていた。

結局私が押し切る形で幼子を連れ帰ることにした。

副長が拘束されたまま先頭を歩き、真ん中に幼子を背負った私とチャールズ、エーリツヒが殿を務め燃え盛る村から脱出する。

村外れで合流した小隊は、正気を欠いた隊員も回復して、一人も欠くことなく揃った。

皆は拘束された副長に驚きの表情を浮かべ、次いで隊員は一樣に奇妙な現象を報告してきた。

「村には人つ子一人いませんでした」

「路地裏から奇妙な笑い声が響くこともありました」

「墓場の探査では烏の群れにじっと観察されていました」

なんとも背筋が寒くなるような話だった。

ともあれ天まで届くような炎に包まれたダングルテールを背後に、小隊は帰路へ着いた。

ロマリア女の狂笑が耳元から離れなかった。

\*\*\*

この任務を最後に、私は小隊を離れトリスティン魔法学院に奉職することとなった。

小隊長は副長メンヌヴィルが継ぐ、彼なら教訓を生かして狂気に耐え、困難もうまく切り抜けるだろう。

金髪の幼子、アニエスを育てながら来たるべき日を待っている。

\*\*\*\*\*

「リッシュモン様」

音もなく現れた小姓が白髪の老人の耳元でなにごとか囁く。老人の顔はみるみる内に歪み、苛立たしげに舌打ちをした。

「追加要員をすぐに見繕え、金は一切惜しむな」  
「御意」

用件を承った黒髪の小姓は再び音もなく部屋から出ていく。その様子を対面のソファーに腰掛けたマザリーニ枢機卿は無表情で観察していた。

「何かあったのですかな」

「失踪だ、小隊のチャールズ・ウオード。手練れの風メイジであるヤツならあるいはと思ったんだがな」

リッシュモンはテーブルの上に赤ワインを注ぎ勢いよく飲み干した。それで激情を心の中に押しとどめたのか、マザリーニの正面にどつかと腰を下ろした。

だが顔に表れる焦燥感を隠すことはできなかった。

「ここ十数年動きが活発すぎる、どういうことなのだ」

「ロシュフォール家長女の誕生と重なりますな」

ロマリアとのパイプも太いまザリーニの諜報網は伊達ではない。

が、そのマザリーニですらメアリーの誕生を最近まで知らなかった。ジョン・フェルトンが幽閉塔に隠したのもあるが、理由はそれだけではない。

彼女の近辺を探ろうとしたものはことごとく失踪、あるいは発狂していくのだ。

“ヤツら”から密かに民衆を守るため、幾度となく“ヤツら”と杖を交えた猛者であろうともそれに変わりはなかった。

「……王女にはいつ知らせるつもりだ」

「十七歳まではなりませぬな、王家の秘儀で精神を強くせねば、そうであってもシャルル殿の件があったのですぞ」

マザリーニの冷静な言葉にリッシュモンは苦い表情を浮かべた。ガリア王家の失態はことを知る者にとって痛すぎる教訓だ。

「アルビオンもきな臭い、間者を潜りこませようにも発狂して終わ

りだ」

「その件には適任が、グリフォン隊隊長の『閃光』を差し向けようかと」

何気なく放たれたその言葉にリッシュモンは耳を疑った。

「正気か、スクウェアを使い潰すなど」

小馬鹿にしたような言葉にマザリーニは目を閉じて淡々と答える。

「彼はただのスクウェアではない、母君の意志を継いでおられる」

「……彼女のことは、悔やんでも悔やみきれぬ。私の差配ミスだった」

「失敗を挽回してこそそのリッシュモン殿でしょう」

それだけ言うとマザリーニはゆっくりと立ち上がる。

夜も更けたので帰宅するのだ。

「そういえば、金子の方は」

「馬鹿にするな。何のために拝金主義者と呼ばれてまで賄賂を受け取っているのだ」

「はて、何故でしたかな」

マザリーニは苦勞で老けきった顔を綻ばせる。

数少ない事情を知る者、その中でも最も協力的なリッシュモンをからかうように。

リッシュモンは苦々し気な表情で言い捨てた。

「このハルケギニアを守るためだ」

マザリーニは満足そうに笑い、別れを告げた。

アンリエッタ姫が十七になるまであと一年。

全力でトリステインを支えるためにも気合を入れなおすことを決意し、自宅への帰路に着く。

遙か遠くから、月に向かって吼える三本脚の獣が見つめていた。

**番外編 マルトーに沈黙を（前書き）**

完全なネタ番外編で本編とは一切関係がありません。

## 番外編 マルトーに沈黙を

マルトーに沈黙を

「待ちやがれこの野郎ッ!!」

牛の頭をくわえた犬を若いコックが追いかける。

日本のアニメでもありそうなシチュエーションだ。

その犬がおぞましい姿でなく、若いコックが金髪青目でさえなければだが。

「くっそ、また逃げられた」

厨房に戻った若いコックは悔しげに吐き捨てた。

拳がぶるぶる震えるほどの怒りを覚えている。

「やっぱりミス・ロシュフォールに言ったほうがいいんじゃない？」

「言っても意味ないさ、あんな騷のなっていない犬っころを放し飼いにするんだからな」

見かねたメイドの言葉にも腹立ちまぎれの言葉を返す。

ここ数日材料から仕上げた料理まで脳みそ系の食料は根こそぎ奪われていった。

あのおぞましい犬っばい何かに厨房の人々は隠しきれない闘志を燃やしている。

「なんか罨でも仕掛けてみるか？」

「お貴族様の使い魔を罨に？ 首が飛んじまうぜ」

「つつても料理長の脳みそ料理を待ち望んでるお貴族様も多いしなあ」

料理を続けながらああでもないこうでもない、と議論するコックたち。

常人ならばまず子犬の名状しがたい外見に突っ込むが、彼らは気に素振りも見せない。

メイジが召喚する使い魔はバグベアーなど奇天烈な生き物も多いから慣れている、という理由ではない。

かといって正気を失われているわけでもない。

突如投げやりな議論が飛び交う厨房の裏口が開く。

「お前ら料理に集中しやがれ」

「ウイ、料理長！」

ニメイル近い身長に、短い黒髪で如何にも強そうな精悍な顔立ち。

トリステイン魔法学院の厨房を取り仕切るマルトー料理長だ。

その右手にはさっきの恐ろしい子犬がにぎられている。

子犬は暴れることなく、むしろ借りてきた猫のように大人しく尻尾を握られぶらさがっていた。

「やっぱり料理長にかかったちゃ形なしか」

「料理長なら仕方ない」

ぼそぼそとした小声以外は調理の音しか聞こえなくなる厨房。

作業に集中しだしたコックたちに満足したのか、マルトーは犬を振り回しながら厨房を去った。

「はー、あの人やっぱり半端ない」

「あの犬どうやって捕まえたんだ？」

「知らね、マルトーさんなら仕方ないさ」

先ほどよりは静かに話しながら料理人たちは仕上げにかかる。

メイドははーっと感心したようにため息をついた。

「マルトーさん、ほんとすごいね」

「あの人コックやるような人じゃないんだよ」

若いコックがソースをつくりながらメイドに語りだした。

周りの料理人もそれに追隨してどんどん声が大きくなっていく。

「確かどっかの軍隊出だろ？」

「ああ、平民なのに教官してたって」

「なんか子爵ぶん殴ってやめたとか聞いたことある」

「マジで？」

「あ、それ俺も知ってる。んでオールド・オスマンが料理長として

雇ったんだって」

聞けば聞くほどありえない経歴にメイドはますます驚いた。

「でも、マルトーって確か料理の鉄人の称号名よね。本名なんて言うの？」

「確か……」

若いコックは虚空を睨んで思い出そうとがんばった。

そこに厨房で一番経験を積んだ老コックが口をはさんだ。

「ケイシー・ライバック、厨房じゃ負け知らずの、ただのコックさ」

\*\*\*\*\*

メアリー・スーは沈黙した

あ、ありえねえ。

マルトーさんって人のよさそうな固太りのおっさんだろ？



番外編 マルトーに沈黙を（後書き）

次回「ルイズ・フランソワーズに栄光を」  
もしくは「シエスタにお昼寝を」

## ルイズ・フランソワーズに栄光を

「ほんつとうにごめんなさい！ 今度からルイズに心配かけるようなことはしないから！！」

「……ほんと？」

「うん、絶対しない。約束する」

「……じゃあ今回だけは許してあげる」

泣いたルイズをなだめて笑わせようとして土下座して、才人はなんとかルイズの許しを得ることができた。  
彼女の頬には涙の筋がまだ残っており、じくじくと才人の良心を抉っていく。

——こんなちっちゃい子を泣かせるなんて。

才人はルイズの年齢を聞いていなかった。

彼は授業中のルイズに対する野次の子供っぱさから、ここトリスティン魔法学院を地球でいう中学校相当だと考えている。

当然ルイズの年齢も十三歳から十五歳くらいだろうと思ひ込んでいた。

一つしか変わらないなんて夢にも思っていない。

「ほら、可愛い顔が台無しだぞ」

ルイズから与えられたレースのハンカチで彼女の顔をやさしく拭いてやる。

彼女はベッドに腰掛けたまま不平不満を言うでもなく、されるがままになっている。

その様子は使い魔とご主人様というよりも、優しい兄と少し甘えた

がりの妹のように見えた。

「よし、少し目が腫れてるけど一晩寝れば大丈夫だろ」

うん、と才人は満足そうに頷く。

「……その、サイト」

ルイズは上目使いに才人を見つめる。

少し目元が腫れぼったかったが、その破壊力は才人のハートを打ち抜いた。

——こ、これが『萌え』というヤツか!!

ずきゅーん、なんて音がリアルに才人の脳内で響いた。  
一瞬固まって、コホンと居住まいを正す。

「なになかな?」

俺は紳士、英国紳士と頭の中で唱えながらできるだけ爽やかな笑みを浮かべてみる。

才人の思惑通りとはいかず若干ぎこちない笑顔だった。

「……ごめんなさい」

「へ?」

「あなたを召喚して、ごめんなさい」

ルイズはペコリと頭を下げた。

才人は戸惑うしかない。

なんでそんな話になるんだろうと頭をひねってみる。

よくわからなかった。

才人は現代日本の価値観ではかつていたが、これはとんでもないことだ。

公爵家のご令嬢が平民に頭を下げるなど本来あつてはならない。

まかり間違つて他の生徒に見られてしまえばその日からルイズに対するアタリはさらに厳しくなるだろう。

学院ならまだ笑い話で済むが、これが一般社会に出てからという話になれば彼女のみならず、ヴァリエール家の權威の失墜につながる。例えまだ一介の学生に過ぎないとはいえ、自室とはいえ、やっていいことではない。

勿論才人はそんな背景知ったこつちやない。

ただシンプルに、可愛い女の子が自分に謝っているだけだ。

「そんな気にしなくつてもいいよ」

「でも」

「いいから、確かにボコボコにされて痛かったけどもうへっちゃらだし」

実際三日間も眠りっぱなしだからどれほど痛かったか、すでに彼は忘れつつある。

これは平賀才人の適応能力か、それとも別の理由があるのか。

とりあえず心底申し訳なさそうな顔をしているルイズを慰めるため思いついたことを並べ立てる。

「それに帰る方法も探してくれてるんだろ？　だつたらルイズのためになんてとくらい体張るさ」

「……」

それに対してルイズは何も言わなかった。  
握り拳を膝の上に置いて、うなだれたままだ。

「ごめんなさい」

「だから！ 謝らなくったっていいんだよ」

才人はかがみこんでルイズと視線を合わせようとする。  
ルイズは俯いてその顔をのぞかせなかった。

「わたしには、サイトにあやまらなきゃ……いけな、い……う」  
「わー！ 泣かないで泣かないで!!」

とうとう彼女は泣き出してしまふ。  
握り拳の上にはぼたぼたと彼女の涙が滴り落ちた。

——泣いた子が泣き止んでまた泣いて、どうすりゃいいんだよ!?

才人は持てるだけの知識を漫画から引つ張り出してみる。

——あーもうどうとでもなれ！

彼の知る漫画の主人公はあまりそういうことに強くなかった。  
とりあえず、後で怒られることを承知でルイズを抱きしめた。

——怒るかな、怒るだろうな。でも今は泣き止んでくれたらそれでいいや。

ルイズは押しのけることもなく、ぐすぐすと才人の胸で泣き続けている。

なんとなく才人は彼女の髪を撫でてみる。

さらっさらで自分のものとは全然違う。

左手で彼女の背中をトン、トン、と叩いてみる。

きつとこうすれば安心する、と確証もない予感からの行為だ。

しばらく続けていると、ルイズのしゃくりあげるような泣き声がおさまってくる。

胸元は涙でぐっしり濡れていたけど才人は文句を言わない、言えるはずもない。

「落ち着いた？」

耳元で優しく囁く。

ルイズは小さく頷いた。

「……もうちょっと、こうしてて」

「ん」

才人はルイズの髪を撫でたまま、ルイズは才人の腰におずおずと手を伸ばしてかるく抱きつく。

二人の間に会話は無い。

そのまま、優しい時間は過ぎていく。

それを破ったのは無機質なノックの音だった。

二人は慌てて跳ねるように距離をとる。

「ど、どうぞ」

「失礼しますミス・ヴァリエール。いつもの梟便です」

部屋に入ってきたのは才人も知るシエスタだ。

彼女はルイズの顔を見て、次に才人を見た。

最初顔を見ていたのがすすすと視線が下がって胸あたりでとまる。

あ、と才人は思い当たった。

ぼんやりとした灯りの室内、黒い服ならまだ誤魔化せたかもしれない。

でも彼が着ていたのはハルケギニアにやってきたときと同じ青いパーカーだ。

濡れれば当然色が変わる。

そしてそれは薄暗くても容易にわかるほどだった。

シエスタはそのまま何も言わずルイズに封筒を手渡し、一礼してから部屋を出て行った。

——きゃー！ 御主人様と使用人の禁断の愛ですかアレ！？——

『…………』

二人は互いの瞳を交差させ、溜息をついた。

「シエスタに明日説明しとくよ」

「ええ、そうして」

ルイズは封筒の蜜蝋を、虫眼鏡まで使って確認してから開く。

「…………そう」

「どうしたんだ？」

「貴族の事情っていうヤツよ。あなたにも関係しているけど」

はしたなく寝巻の袖でぐしぐしと目元をこする。

そうして、ルイズは貴族の顔になった。

「サイト。わたしはあなたにとてつもなく重い責務を負わせるわ」  
「…………」

今度は才人が何も言えなかった。

それはルイズが口にした重い責務という言葉に対してか。  
それともこのハルケギニアで成し遂げなければならないことがある  
と感じていた自分に対してか。

「許してくれ、なんて言わない。言えないわ」  
「いいよ」

軽い一言。

「きっとサイトは事の重大さをわかってないからそんな風に言える  
の」

「いいんだよ」

まるで自分が喋っているわけではない。

自分の心がそのまま声になっているような奇妙さを才人は感じていた。

「……サイト」

「口にすると陳腐だけどさ、ルイズに召喚されたのも運命とか奇跡  
とか、そんなことだと思う」

その言葉は紛れもない自分の本心だ。

ただ彼自身が何よりも思っていたのは。

「だからさ、そんな自分を責めないでくれ」

「……ッ！」

この少女にこれ以上辛い思いをさせたくない、というだけだった。

ルイズの大きな眼から涙が零れ落ちる。

才人はやさしく彼女を抱きしめ、鎧で覆われたその心を包み込んだ。

\*\*\*\*\*

A・D・6104 ルイズ・フランソワーズ

いよいよ明日は使い魔召喚の儀式だ。

正直に書くと、わたしは怖い。

どのような使い魔が召喚されるのか、ひょっとしてシャルル殿下が召喚したような極めて異様なモノが来るかも。

だけど姫さまのご期待に応えるためにもがんばらなければ。

今日はもう寝よう。

\*\*\*

結論から書こう、わたしは成功した。

天候は最悪だったというのにわたしの気分は晴れ晴れとしていた。

けれど、今では暗澹たる思いで日記を書いている。

召喚されたのは奇妙な服装の平民だった。

見たこともない衣装からは出身地がつかめない。

ちょっとだけ警戒しながらコントラクト・サーヴァントを行う。

熱さにのた打ち回る彼の左手には“ガンダールヴ”のルーンが浮かんできたの！

思わず飛び跳ねそうになった。

これでわたしが虚無であるという第二の確証ができた。

来るべき日への備えができたともいえる。

ミスタ・コルベールに言って彼を鍛えてもらわないと。

でも浮かれていたのはそこまでだった。

彼の話を聞けば聞くほど落ち込むしかない。

わたしが召喚した平民、サイト・ヒラガは争いも何もないところから来たという。

それどころか魔法を見たこともないというのだ。

詳しく聞いてみると彼はそもそもハルケギニアではなく「チキユウ」という星に住んでいたらしい。

そこではカガクが発展していて魔法を使わずとも色々できる、とか。

半信半疑だったけどのーとばそこんとかいうキカイを見て確信した。

そして同時に後悔した。

この哀れな異星の平民を、サイトを恐るべき輩との戦いに投じなければならぬ。

本来ならハルケギニアに住む、もつと言えは始祖ブリミルの血をひく貴族の使命に彼を巻き込むなんて。

わたしは召喚の儀式を軽く考えていたのだ。

思わず涙がこぼれそうになった。

わたしが泣きそうになっているというのに彼はのんきな顔で「大変なことになったなあ」なんてばやいている。

何も知らない彼が可哀そうで、そんな彼に戦いを強いなければならぬ自分が情けなくて。

今思い返せば余計に辛くなってくる。

それでもサイトが“ガンダールヴ”として召喚された以上、わたしたちはその力を利用するしかない。

彼が気分を害さないよう最大限の、なおかつ周囲が不自然に思わぬ程度の配慮をしないと。

朝食は使用人と一緒に、寝床はソファアを自室に運び入れさせた。

とりあえずハルケギニアでの最低限のマナーを教えて今日は眠ろう。

＊＊

二日目にして我が使い魔は色々とやらかしてくれた。

理性的かと思いきや何も考えていないのか、彼が全然わからない。

ただ、少し彼の気遣いが嬉しくもあった。

看病するから今日はおしまい！

＊＊

サイトは目覚めない。

怪我自体は治っているから心配ないみたいだけど……。

心が拒否すれば戻ってこないこともありうる、なんてことを聞いたことがある。

彼からすれば当然かもしれない。

＊＊

今日もサイトは目覚めない。

本当に彼の心がハルケギニアを拒絶しているのかもしれない。

看病しながら目覚めを待つしかない。

＊＊

今日もダメ。

お願い、目覚めてよ。

もう利用するだなんて考えないから、おねがい……。

＊＊

サイトが目覚めました！

こっちがあれだけ心配していたのにけろっとした顔で「おはよう」なんて。

一瞬殴りたくなってしまった。

けれど、嬉しくて嬉しくて彼の目の前でわんわん子どもみたいに泣いちゃった。

そして彼の境遇を思っ、また泣いてしまった。

サイトは優しい。

その優しさにもう一回泣かされたほどだ。

そんな彼を残酷な戦いに導かなければならないなんて。

始祖ブリミル様、彼をお導きください。

願わくば、サイト・ヒラガに祝福を。

## シエスタにお昼寝を

シエスタにお昼寝を

A・D・6104 タルブ村のシエスタ

春になったから日記帳を新調しちゃいました！

今年は何かすごいことが起きそうな予感がするんです、しちゃうんです。

だから日記も気合入れて書きちゃうんだから。

でも今日は普段通りの一日でした。

明日は使い魔召喚の日だから搬入が忙しそうだなあ。

＊＊

今日はいつもの使い魔召喚と違いました。

なんと、魔法は使えないけど平民には優しいミス・ヴァリエールが平民の使い魔さんを召喚しちゃったんです！

使用人仲間ではそのことで持ち切り。

特にみんな不思議がっていたのが、ミス・ヴァリエールがむしろ嬉しそうにしていたこと。

普通の貴族様だったら「平民の使い魔なんてー!!」って怒るのに。やっぱりミス・ヴァリエールはどこか変わってらっしゃいます。

あとは、ミス・ロシュフォールがすごいのを召喚したとも聞きました。

すごいのはってなんだろう。

ドラゴンとかじゃないらしいですし、ひょっとして他の貴族様？

謎です。

＊＊

もうびつくりです。

ありえないです。

ふぁんたすていっくです。

ミス・ヴァリエールはなんて人を召喚したんでしょうか。

サイトさん（ミス・ヴァリエールの使い魔さんの名前）はなんというか、奥ゆかしい人でした。

どうにも一歩引いているところがあるような、笑顔でごまかすよう

な、不思議な人。

話を聞いていると魔法も知らなかったとか。

貴族様が周りにいなかったんですかね、よくわかりません。

少しひいおじいちゃんの話に似ているとは思いました。

で、ですね。

すごいんですよサイトさんは！

なんと、貴族様と決闘して勝っちゃったんです！！

え、ありえない。なにこれ。現実？

メイジ殺しなんていう物騒な人がいるのは知ってましたけど、サイトさんはそんな人には見えないし。

最初は見ているのが辛くなるくらい殴られていたのに、剣を握った瞬間動きががらりと変わっちゃいました。

あっという間に青銅のゴーレムを、これまた青銅の剣でずんばらりと切り倒しちゃいました。

終わったらがつくり倒れて今はミス・ヴァリエールが必死に看病しています。

ミス・ヴァリエールが嬉しそうにしていた理由が少しわかった気がしました。

そういえばミス・ロシュフォールも決闘の現場にいたんですけど、あの人もすごいですね。

魔性の美しさというのか、そんな感じ。

明日もがんばるぞー！

＊＊

サイトさんはまだ眠ったままです。

怪我自体は治っているらしいですけど、お寝坊さんなんですか？

それも気になるんですが、厨房で問題が起きちゃいました。

ミス・ロシュフォールの使い魔さんが牛の頭や豚の頭を盗んでいくんです。

新鮮なのを調達するのも大変なのに。

でもあの使い魔さんがすごい、っていうのはわかりました。

見たこともない生き物なんです。

そりゃハルケギニアは広いから知らない生き物だってたくさんいるんでしょうけど。

他の貴族様の使い魔とは一線を画するといつか、なんていえばいいのかわかりません。

不気味というか、奇怪というか。

貴族様の使い魔にこんなことを思うのは不敬かもしれませんが、おぞましい存在であるようにも感じました。

あと臭いです。

こっそり厨房に入ってきているつもりだろうけどバレバレです。

臭いが料理にうつるからやめてほしいなあ。

＊＊

サイトさんはまだ起きない。

丸二日も眠りっぱなしなんて、大丈夫なんでしょうか？

昨日あたりから、気のせいかもしれませんが不快な視線を感じるような気がします。

自意識過剰なのかな？

＊＊

ミス・ヴァリエールが懸命に看病してもサイトさんは目覚めません。

見ていたたまれない気分になってしまいます。

貴族様とかそういうのじゃなくて、ただの泣きそうな女の子に見え

ました。

あと視線の正体もわかりました。

ミス・ロシュフォールの使い魔さんです。

悪臭に気付かれないよう風下からわたしのことを見てました。

目があるのかわかんないですけど。

何か用があるのかしら？

＊＊

ようやくサイトさんが目覚めました！

もう何事もなかったかのようにけろっと目覚めて、ミス・ヴァリエールはかなりひきつつた顔をしてました。

ふふふ、そしてすごいを見ちゃいました。

いつも通りの鼻便が来たからミス・ヴァリエールの部屋にいったときです。

ミス・ヴァリエールの目元が腫れていました。

さらにサイトさんの胸元がぐっしり濡れてたんです、暗い室内だからってわたしは見逃したりしませんよ？

ミス・ヴァリエールはサイトさんの胸を借りて泣いていたに決まっ

てます。

ノックしたあとの間もいつもより不自然に長かったし、これは間違  
いありません。

普通貴族様はどんなことがあっても使用人相手にそんなことはしま  
せん。

ということは……ご主人様と使用人の禁断の恋です！

よくよく考えてみればサイトさんが強いだなんてミス・ヴァリエー  
ルも知らなかったみたいだし、きっと一目ぼれに違いありません。

すごい。こんなのを現実に見れるなんてもうワクワクが止まらない。

メイド仲間に話したいけどダメだろうな、ああでも話したい！

でもダメ、知られちゃうとミス・ヴァリエールにもサイトさんにも  
迷惑をかけちゃう。

しばらくニヤニヤしながら見守ることにしよう。

今夜は興奮して寝れないかも。

\*\*\*

恐ろしい光景を見てしまいました。

昨日のミス・ヴァリエールとサイトさんのやりとりが吹っ飛ぶくら  
い。

相変わらずミス・ロシュフォールの使い魔さんは厨房に忍び込んで  
は頭部を持っていきます。

ただ不思議なことに締め切っているはずの厨房にいつの間にか現れ  
ていつの間にか消えていくんです。

ああ、こんなことを書いても大丈夫なのかしら！

あの恐ろしい使い魔さんは、平民に思いもつかないような方法で厨  
房に忍び込んでいたんです。

お昼の忙しさも過ぎ去った頃、部屋の隅っこから青黒い煙というか、  
形容できない何かが噴き出してきました。

なんだろうと不思議に思いながら見てたら、どんどんあの使い魔さ  
んのかたちになっていった……。

あんな生き物がハルケギニアにいるはずがないわ！

怖い、厨房のみんなに言っているのかな。

＊＊

アレがなんで頭ばっかり盗んでいくのかわかった。

脳みそをじゅるじゅると、あの太くて鋭い舌で吸い取っていたので  
す。

見るもおぞましい、正直な話あんな光景見たくなかった。

わたしもじつと観察されてる。

たまらなく怖い。

＊＊

ひたひたと足音がする。

振り向けば全身から気味の悪い液体を滴らせながらアレがいる。

思わず学院の聖堂にかけこんだ。

これからは毎日始祖ブリミル様にお祈りしよう。

今まで不信心でごめんなさい。

心の底から祈りを捧げます。

＊＊

どうやら聖堂の中にまでアレは入れないようだ。

流石は始祖ブリミル様です。

でも仕事をサボるわけにもいかないし、どうすればいいんだろう。

同僚に聞いてもアレを頻繁に見ることはないらしい。

わたしだけがつけ狙われてる、なんで？

＊ ＊

ひよっとしてアレは、牛や豚みたいにわたしの脳みそをずるずる啜る気なんじゃ……。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

ミス・ロシュフォールに言っても平民の命なんてきつと気にもしないだろうし。

誰か助けてください。

お願い、サイトさん、始祖ブリミル様。

＊ ＊

思い切ってサイトさんに相談してみました。

彼ほど強い人ならなんとかしてくれるかもしれないって。

そしたら、できる限り一緒にいてくれるらしいです。

よかった。

安心して涙が出ちゃいました。

＊ ＊

サイトさんが一緒にいててもアレはわたしの傍にいます。

「追い払おうか？」なんてサイトさんが聞いてきましたけど貴族様の使い魔相手にそんなことすれば何が起きるかわかりません。

使用人仲間に聞いてみればミス・ロシユフォールは他の貴族様とはどこか違う、違いすぎるらしいですし。

伯爵家のご令嬢だから取り巻きの貴族様もいるらしいですけど、目つきがヤバいらしいです。

だけど一緒にいてくれる人がいるだけでこんな心強いなんて思いませんでした。

半端ない安心感です。

男の人というか、サイトさんはすごく頼もしいです。

＊＊

明日はフリッグの舞踏会だから大忙しでした。

食材の搬入とかで人の出入りが多かったせいか変な噂話も耳にしました。

アルビオンが大変らしいです。

「ニヤルらとホップを愛でる会」だか「ニヤル様とホップを崇める会」だか「ナイアルラトホテップ教団」だか知りませんが色々やっているらしいです。

どれが正式名称なんでしょう。

あとわたしは重大な思い違いをしているのかもしれない。

ミス・ヴァリエールはサイトさんにこれといった仕事を課していないらしく、色々お手伝ってくれました。

ただその時、ミス・ロシュフォールがふらつと現れたんです。

背筋が凍るかと思いました。

ミス・ロシュフォールはわたしたちを見ると、ぞっとするような笑顔浮かべたんです。

何と言えいいんでしょうか。

邪悪な期待を秘めたような、見るものに恐怖を与えるような、そんな笑み。

アレはわたしを食べようとしているんじゃないかって、ミス・ロシュフォールの下に連れ去ろうとしてたんじゃない……。

彼女がわたしに何をしようかなんて、思いもつかない。

想像するだけでも耐えがたい妖術の儀式の生贄にしようとしているんじゃないのか。

サイトさんがいてくれたおかげで忘れかけていた恐怖が心の奥底から染み出してきました。

その時、何を思ったのかサイトさんはミス・ロシュフォールの視線からわたしをかばうようにしてくれました。

大きな背中でした。

ミス・ロシュフォールは何をするでもなく立ち去ったんですけど、そのあとサイトさんが振り向いて「大丈夫？」なんて笑顔で聞いてくれて。

だめ、これ以上はだめ。

わたしは二人を応援しようと思ってたのに、サイトさんに惚れちゃいそう。

あ、あと最後に一つ。

ミスタ・コルベールの娘さん、アニエスさんが帰ってくるらしいです。

サイトさんとどっちが強いかなんて厨房内ではその話で持ち切り。きっとサイトさんの方が強いと思うけどなあ。

\*\*\*\*\*

メアリー・スーに恩恵を

おっはー、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュ  
フォール。

トリステイン王国のロシュフォール伯爵家長女だ。

神様の力で皆おなじみ「ゼロの使い魔」の世界に転生した元男、現  
女の子なんだ。

そっぴや今の俺、ルイズとかなり体型近いんだ、身長と胸囲的な意  
味で……。

ま、いいや。

たまには俺の主人公らしい魔法学院ライフの様子でも紹介しようか  
な。

え、んなもんいらないうて？

……いけ、ドン松！！

\*

朝、目覚ましやらメイドやらの助けを得ずに俺は目覚める。

ハルケギニアに来てから夜型になったのか、朝の日差しがちょっぴ  
り辛いぜ。

逆に月夜はすっげー調子がいい、犬みたいに遠吠えしたくなっちゃうくらいに。

これもワンちゃんが飼いたい、っていう深層心理があったせいかもしれない。

今の俺にはドンがいるからいいんだけどな！

\*

朝食を終えれば当然学生だから授業だ。

意外なことに魔法の授業は面白い。

なんかアレなんだよ、日本の授業みたいにかっちりしてないからかな。

結局のところ「考えるな、感じる」というところに落ち着くからかもしれない。

面白いんだがよく路線もずれるんだよな。

それがコルベール先生みたく面白い人もいれば自慢に終始する先生もいてさ。

あ、も一つ意外なことにギトー先生の雑談超面白い。

言いたいことは「風最強！」なんだけど擬音語使いまくりで。

「その時私はずしゃーっと敵を切り裂いて」とか「もりもり精神力

が湧き上がってぶるんぶるん杖を振るった」とか。

聞いててニヤニヤできるわ。

まあつまらん雑談の時はドンの視界共有で色々見て回ってる。

臭いって苦情が来たから教室に入れられんだよね……可愛いのに。

最近のマイブームはシエスタの観察。

メイドをじろじろ見てたら怪しまれる、と一年の時は自重してたんだが使い魔ならメイド見てもおかしくないよね！

あの「脱いだらスゴいんです」の下を想像しながら、やっぱりメイド服は萌えるなあ、なんて考えながらドンと視覚共有。

授業中だというのにハアハアしちゃうぜ。

たまに鼻血を抑えるために本気で顔面に力を入れるのはお約束さ。

\*

昼食が終わればティータイムだ。

魔法学院はゆとり教育の極みですごいゆったりしてる。

現代人感覚からすれば学校というより遊びで勉強してるようなものだ。

まあティータイムは固定メンバーとお喋りに興じてるね。

俺がいるチームは中々変わってるんだよ。

このくらいの歳の貴族連中は大体同性だったり、派閥みたいなので固まっているんだが、俺のそこだけ不思議とそんな垣根がない。

すごいバラバラで男も女も上級生も下級生も、実家の文献読む限り敵対してたんじゃない？ってヤツらまでいる。

十名くらいでのんびり他愛もない話に興じている。

月がどうたらこうたらとか星座がなんたらかんたらみたいな話とか、たまに政治的な話もするかな。

最近は降臨祭の話もしたなあ、クリスマスに友だちとバカ騒ぎとか懐かしいぜ。

こいつらは良いヤツみたいで、なんか目が純粹なんだよな。

他の貴族みたいに濁ってない感じ、キラキラしてておじさんには眩しいよ。

正直精神年齢は変わってないからおじさん言うには早い気がしなくもないけど。

\*

午後の授業が終わればあとは自由時間、何をしても許されるってものさ。

ごめん、ウソだ。さすがにそれはない。

ドンと遊んだりチームで遊んだり図書館にこもったりかな。

俺は普段クール系おらおら美少女（？）で通っている。

そのせいかドンとじゃれていると周りの視線が痛いような気がするんだ……。

いいじゃないか、こんな可愛いワンちゃんと遊んでたって。

チームの奴らは例のごとくキラキラと少女マンガみたいな瞳で俺たちを見守ってくれる。

触りたければ触っていいんだよ？

一度言ってみただけど他人の使い魔に触るのはよくないのかな、やっぱり断られちった。

きつとコイツらも実家に帰れば犬を飼いたくなるに違いない。

それまで精々羨ましそうに見ておくがいいさ！

\*

あつと、今日はそれと普段と違う光景を偶然この目で見た。

シエスタと才人が和気藹々としながらお仕事に励んでいたんだ。

もーなんか原作そのままな感じで思わず顔面崩壊しちまった。

でもシエスタに気付かれて、雑談を怒られるとでも思ったのかな、  
すごい怯えた顔になった。

そこからですよ更なるニヤニヤポイントは。

才人が一歩出てシエスタをかばったんですよ。

「悪いのは俺だ、怒ったり罰を与えるなら俺にしろ！」と言わんばかりの表情で。

すごい、カッコいい。

何この主人公っぷり、男なのに惚れちゃいそうだぜ。

あ、今の俺女だった。

ここだけの話、俺は才人をすごく高評価してる。

考えてみてくれよ、惚れた女のために、好きだって言葉一つのために七万の軍勢に単騎駆けだぜ？

そんな主人公ここ最近見かけねえよ、パネエよマジで。

とまあ熱血主人公の片鱗を見せてもらったから大満足。

そのまま何事もなく通り過ぎた。

その時耳に入った「大丈夫？」って声がすっげー優しくってさ。

こりゃ才人モテテも仕方ねえわ、って思った。

\*

夜は聖堂で形だけのお祈りをする。

なんつーか、昼間はちょこちよこ人がいるからあんま好きじゃないんだよね。

ドンは基本的に聖堂の外でお留守番。

あんまり雰囲気が好きじゃないのかな？

まあドンはいくら洗っても汗つかきなのかぼたぼた汁を垂らしてるから、掃除の人も大変だろうしいいんだけど。

それで俺の一日は大体おしまい。

たまにヴェストリの広場で双月を見ながらワインを楽しんだり、自室に差し込む月明かりを愛でたり風流なこともするけどね。

あーなんつちゅーかアレだよアレ。

忙しい現代社会に比べるとすごく時間がゆったりしてていいねハルケギニア。

君も一度転生してくればその良さがわかるよ。

神様も親切だし、検討してみてくださいな。

## アニエス・コルベールに静養を

アニエス・コルベールに静養を

A・D・6104 アニエス・シュヴァリエ・ド・コルベール・  
ド・ダンゲルテール

明後日で最後かと思えば一面の海にも感傷を覚えてしまう。

私の生まれ故郷も海辺の寒村だから、潮風に何か呼び起されるものがあるのかもしれない。

アディールでの三年間は確実に私を成長させてくれた。

この力で父と並び立ち戦うことができるか、それはまだ未知数だ。

学べば学ぶほどにおそるべき輩の強大さに慄き、鍛えれば鍛えるほどにその凄まじいまでの力量差を感じてしまう。

今はただ牙を研ぐのみ。

\*\*\*

最後の夜、ルクシャナとアリイー、そして偶然帰郷していたビダールが宴席を設けてくれた。

ルクシャナは文句を言いながらも何かと私に話しかけてくれた得がたき友人だ。

トリステインに戻っても手紙を書く約束した。

アリーと私の仲は、まさに切磋琢磨というのがふさわしいだろう。

お互い鍛錬を忘れぬよう誓い合った。

この二人は婚約者で、見ていると少し寂しくなってしまう。

だがいい。

祝福の子たる私の使命は重い。

家族に恵まれただけでも十分だ。

ビダーシャル殿はアディールでも上等な店で奢ってくれた。

「何があってもくじけぬよう」との助言を頂いた。

三年間、辛く苦しいときもあったがアディールに来てよかった。

\*\*\*

早朝にも係わらずルクシャナ、アリー、ビダーシャル殿が見送りに来てくれた。

若干涙ぐんでしまう。

しかし、いざ出立しようとしたとき一匹の鷹が降り立った。

見覚えがある、というよりも父の鷹だ。

脚にくくつりつけられた手紙に素早く目を通し、さっと体温が下がるのを感じた。

無言でビダーシャル殿に手渡す。

この特徴は間違いない、ティンダロスの獵犬だ。

まさか地獄の深淵で常に飢えているような獣を召喚するとは。

それどころか召喚者、ロシュフォールの娘は完全に支配下に置いているらしい。

ありえない。

手紙を読んだビダーシャル殿も顔を青ざめさせている。

とにかく牛や豚の頭部の発注数を密かに増やすほか、犠牲者を出さない手段はない。

取り急ぎその場で返事を書いた。

他の使用人には知らせてはならないということも、普通の平民がはつきりと認識してしまえば狂気に陥ることも。

鷹に託そうとして、もう一通の手紙に気付く。

こちらは朗報だった。

ミス・ヴァリエールが“ガンダールヴ”の召喚に成功したとのことだ。

足場が崩れるような絶望感から多少持ち直した。

例え獵犬が相手でも、多数のメイジと“ガンダールヴ”、それに父とオールド・オスマンがいれば撃退も可能だろう。

だが、これは異常事態だ。

今年確実に何かが起きる。

ビダーシャル殿どころかルクシャナもアリイも同じ意見で、早急に老評議会に報告するようだ。

シャイターン対策委員会副委員長としてやらねばならぬことがこの瞬間一気に増えたのだろう。

平素の表情が読みにくい顔ではなく、未来を案じる真剣な顔になっていた。

私も馬車で帰還するつもりだったが取りやめだ。

非常に高くつくが、竜籠で急ぎトリスティンに戻る。

今夜はリュティスで宿泊した。

\*\*\*

三年ぶりのトリスタニアだ、非常に懐かしい。

エルフ領との違いから逆にとまどうこともあるくらいだ。

一刻も早く学院に向かいたかったが、ここで万全の支度を整えることにした。

祝福を受けた剣、銀の銃弾、目の細かい頑丈なチェインベスト。

それらを装着したまま懐かしい場所を訪れた。

魅惑の妖精亭だ。

三年もたっていれば当然人も入れ替わる。

特にスカロンさんの一人娘、ジェシカはよく気の利く愛されるべき少女になっていた。

これはチップもとりたい放題だろう。

時折立ち止まっては私とお喋りするジェシカ、そんな彼女の肩を大きな手が掴んだ。

暴漢か、と思い剣を抜こうとした瞬間、顔を見て脱力した。

メンヌヴィルおじさんだったのだ。

この人は相変わらずだ。

二階の個室に通してもらってお互いの近況と魔法学院について話合う。

どうやら姫殿下が虚無の主従を召喚したがっており、明日の舞踏会に乗じてそれを行うつもりらしい。

明日の昼ごろ、鋭角をなくした丸い馬車で魔法学院へ向かう。

途中でメンヌヴィルさんが降りて別ルートから様子を伺う。

討てそうなら獵犬を討ち、無理ならばメンヌヴィルさんは即刻退避。

舞踏会ならアディールで仕立てたドレスを着れば私も自然に溶け込めるだろう。

……少し自分の年齢に悲しくなった。

明日に備えて寝る。

\*\*\*

トンでもない化け物だ、なんだアレは。

まず私は父の研究室に向かう。

再会の挨拶もそこそこに、耳や目がないことを確認してから手筈を話す。

問題がないことを確かめ、次に厨房へ向かった。

厨房の皆は三年間もトリステインを離れていた私を暖かく迎えてくれる。

正気を失ったものはいないようで一安心だ。

十五の頃から働いているシエスタも女らしくなったものだ。

そんな中キョトンとした見慣れない顔。

話を聞けばミス・ヴァリエールの召喚した使い魔だと。

なんとも頼りない顔の“ガンダールヴ”だ、とは思ったが何事も見た目で判断してはいけない。

青銅の剣で七体の青銅ゴーレムをぶった切ったと聞いたときはたまげた。

そんな芸当化け物じみた傭兵にもできない。

腐っても“ガンダールヴ”ということか。

厨房を離れて今度は猟犬を探す。

風向きに注意しながら臭いをかげばすぐにわかる。

見つけた。

過去に猛威を振るった個体と比べてかなり小さい、どうやら子犬だ。

だがその威圧感たるや並のものではない。

慎重に機会を狙っている内に夜が近づいてきた。

舞踏会も近いので仕方なくドレスに着替える。

そろそろミス・ヴァリエールたちも手筈通り馬車に乗っていることだろう、と窓の外を眺めた。

全身の血が流れ出て崩れ落ちるかのような感覚。

獵犬が今まさに彼らが乗り込もうとしている馬車を見ているのだ。

まるでお前たちの目論見など看過している、と言わんばかりに。

考えすぎかもしれないが、これは危険すぎる。今は無理だ。

メヌヌヴィルさんに連絡する手段はない、彼が先走らないことを祈るしかできない。

舞踏会が始まる。

私は壁の花に徹した。

生徒も私のような部外者になど注目しないだろう。

そう思っていたのだ。

視線を感じた。

ぞわり、と胸元を虫が這い回るような嫌悪感、気持ち悪さを感じた。

気取られないよう会場を観察すると、私を見ている生徒がわかった。

病的なほど透き通るような白さの肌に絹糸のような白い髪の毛、そして赤い瞳。

手紙で聞いていた生徒、悪臭をまき散らす不浄な狛犬の飼い主、ミス・ロシュフォールだ。

最初は部外者を見ているのかと思っていたが違う。

明らかに観察している。

私の心の奥底を見透かそうとする目が、体中をまさぐるうとする視線が例えようもなくおぞましい。

そして私は見てしまった、彼女の右目が青く染まる瞬間を。

息が詰まるかと思った。

竜のような細く黒い瞳孔に恐怖した。

その表情は名状しがたく、狂気じみた笑顔であるよう感じられた。

それに気づいた父が私をかばうかのように、彼女にダンスを申し出た。

この事態を予想していたのか、他の教員と違って父はタキシードを着ていたのだ。

父の気遣いがありがたかった。かなり鍛えたと思っていたが未だ未熟。

その父ですら長期間彼女と接することは難しいらしく、途中で極度の疲労感から崩れ落ちてしまった。

ミス・ロシュフォールが手を差し出すが、それが冥界からの誘いのように感じられた。

結局、父は手助けを得ることなく起き上がり私の下へ戻ってきた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、なんとか……しかし凄まじい」

父は汗でびっしょりだった。

ちらりとミス・ロシュフォールを見れば違う相手と踊っている。

彼女のダンス相手の瞳は遥か星海の彼方よりも昏く、なかば正気を失いつつあるように思えた。

しかし今の私たちには力が足りない、彼らを助けることはできない。  
歯を食いしばって、父に肩を貸しながらダンスホールを後にするし  
かなかった。

\*\*\*\*\*

メアリー・スーに幸せを

ちよりーっす、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロ  
シュフォール。

トリステイン王国のロシュフォール伯爵家長女だ。

神様の力で皆おなじみ「ゼロの使い魔」の世界に転生した元男、現  
女の子なんだ。

俺の今の体のチャームポイントはズバリ、脚だね、すらつとした脚。  
べ、別に貧しい体型とかそんなじゃないんだからっ！

ま、いいや。

前に忙しい現代社会に比べるとすごく時間がゆったりしてていいって言ったじゃない？

やっぱアレ撤回するわ。

貴族めんどくさい、なんか色々と事情があるんだねみんなの話を聞いていると。

いや、俺は父上が親バカでよかった。

\*

さて、本日はフリッグの舞踏会。

昨日フーケ来ると思ってたのに、どういことなんだ？

マチルダさん「ミス・ロングビルですから」なんて顔しちゃって！

どんな顔だって？

クール気味なドヤ顔だと思ってくれればいいよ。

人によっては微笑にとれるかもしれんが、俺は騙されんぞ！

「これだからお子様体型は」なんて心の中で嘲笑っているに違いない、そうに決まっている！

ドレス姿をじっくりねっとりなぶるように見つめてやるから覚悟しとけ！

いや別に貧乳でいいんだけどね。

だって男の感覚残ってるんだぜ？

走るたびにぶるんぶるん揺れたら気持ち悪いじゃないか。

今でも股間がスースーしてるのに慣れないというのに。

おっと女性読者が見てたら悪かったな。

ま、体は女、心は男ってことで許してくれ。

あといつの時代だって男子高校生はエロいことばっか考えてるってこともない！

それはさておきマチルダさんだよ。

ダメだ、マチルダさんだとなんか違うキャラみたいに聞こえてしまう。

やっぱりフリーケさんだな。

そう、フリーケさんなんで泥棒しないの？

あ、ああ！ そっか！！

ルイズの爆発でヒビいったからやろうと思ったんだっけ。

確かそんな気がする。

今の性格じゃルイズもやらかさないだろうしなあ、昨日なんて才人  
トリスタニアに行かずシエスタ手伝ってたし。

てかお前使い魔だろ。

ルイズは寂しがりだからもっとそばにいてやれよ！

そして俺をニヤニヤさせてくれよ！！

まったく、俺の親愛なる使い魔、ドン松五郎を見習ってほしいぜ。

一応魔法学院の宝物庫見に来たけど、こりゃ無理だね。

実はつい昨日スクウェアになった俺でも無理だ。

え？

スクウェアになれた理由？

……才人とシエスタのニヤニヤで感情が振り切れたせいかな。

レモンちゃんとかこの目で見たらペンタゴンやらヘキサゴンまでい  
けそうだぜ。

\*

るんたったーるんたー

るんたったーるんたー

なーんてリズムで踊ってみたり。

フリッグの舞踏会は新入生に配慮してか、少しお気楽なんだよね。

別に女同士が踊っていようと問題なしっつーか。

とりあえずこっちはいつも一緒にいるチームのヤツらと踊ったよ。

いつもキラキラしてる眼がダンスの時はもーヤバいくらいになって「大丈夫？」って思わず聞きそうになった。

なんか、俺にカリスマでも感じてるのか？

そんな素敵能力神様にお願いしてないんだがなあ。

ひょっとして転生で俺の隠された能力がッ！

……んなこたねーか。

意外なことは三つあったんだ。

一つはコルベール先生にダンスを申し込まれたこと。

いやびつくりした。

ふつー教師が生徒に申し込むはずないんだよ。

そんなこと許されたら毎年オスマン無双になっちまうぜ。

でもほかの先生方は何にも言わない、いいのかそれで？

俺伯爵家の長女だよ？

ていうかキュルケ誘えよ。

このころのキュルケはコルベール先生を臆病者ってバカにしてたか。

アレかな、俺が魅力的過ぎたのか？

いやー罪なオ・ン・ナ♪

その魅力にやられたのか、コルベール先生はダンス中ころんじやつただけだな。

よつぽど恥ずかしかったのか手を貸そうとしても断られたほどだ。

汗で後頭部まで侵食した地肌がてらてら輝いてたし、ホールが暑かったのかもしれない。

確かにあの人正装になれてなさそうだしなあ。

タキシード姿カッコよくて、思わず「誰!？」って叫びそうになったけど。

次の一つ。

お前ら絶対驚くと思うよ。

そつ、アニエスさんがいたんだ！

おいおいおい、原作どこ行ったよなんて思ったんだが、問題ない。

あの人のドレス姿、超やつばい。

鍛えてるからかスタイルも超絶いいし、背筋がしゃんとして凛々しい。

男装の麗人なんて言葉はよくあるさ、ツカって感じの。

いやドレス姿であそこまでカッコいい人見たことないわ。

さらに俺はつつましい、肌の露出があんまりない黒いドレスを着てたんだが、アニエスさんは違う。

もう肩とか丸出し、胸もがんばったら見えるんじゃない？ ってレベル。

久々に眼福ですよこれは。

思わず身を乗り出しちゃったね。

鼻血出そうでヤバかった、まあ俺の顔面筋肉さえあれば鼻血なんて抑えられるけどな。

てか平民ってこの舞踏会に参加していいのか？

まあいいか、アニエスさんその内シュヴァリエもらっし、カッコいいし。

三つ目、ルイズと才人いないの。

ちよおおおおおおお！！　って感じ。

舞踏会はじまる前にいないいないな、と思って探してドンの視界共有まで使ったら二人して馬車に乗り込んでるの。

え、駆け落ち？

愛の逃避行ですか、そうですか。

なんだよ才人め馬車に先に乗ってルイズに手を貸しちゃったりして。

英国紳士気取りですかア！？

ニヤニヤできたからいいんだけど。

まあ二人はその丸い馬車（シンデレラのかぼちゃの馬車みたいだった）に乗ってトリスタニアの方に行った。

どこ行く気だったんだろ、てか公爵家三女が学校行事サボっていいのかよおい。

まあ舞踏会はそんな感じで概ね楽しかったよ。

ただ気になったのは、そうだなあ。

去年食った子牛の脳みそ料理、ゲテモノだけど美味かったのに最近見ないの。

マルトーさんに言ったら用意してくれるかなあ。

## アニメス・コルベールに静養を（後書き）

次のフーケさん終わったら番外編挟んでアルビオン編ですかね。

## ミス・ロングビルに安全を

ミス・ロングビルに安全を

A・D・6104 マチルダ・オブ・サウスゴード

今年もまた新しい学生が入ってくる。

瞳は希望に輝きこれからの三年間何が起きるかわくわくしているに  
違いない。

彼ら彼女らを見るたび故郷アルビオンを、もつと言えばティファニア  
姫のことを思い出す。

あの心優しい少女は元気になっているだろうか。

トリステイン魔法学院でオールド・オスマン付きの秘書になってか  
ら三年、なかなかアルビオンに戻る機会は得られない。

学院の仕事はやり甲斐もあるが、非常に忙しい。

でもアルビオンの情勢もきな臭いから気を付けなければならない。

いざとなればトリステイン王室とオールド・オスマンに救援要請を  
行わなければ。

でも水キセルはダメです。

あとセクハラもダメです。

＊＊

昨年からだ、オールド・オスマンはどこか疲弊されているように見える。

私は現状一介の秘書に過ぎない。

彼がこぼさない限り何故かを知る権利はないのだ。

だが世の中が良くない方向に加速しているようにも思え、彼の疲労がいざというとき決定的なナニかを引き起こすのでは、という懸念もある。

イヤイヤだけど肩もみをしてあげましょう。

あとマルトー料理長に言つて軽めの料理に。

でもやっぱり水キセルとセクハラはダメです。

＊＊

いよいよアルビオンが危ない。

ナイアルラトホテップ教団はどこまであの美しい大陸を蝕めば気が済むのだろうか。

オールド・オスマンを通じて王室へ救援要請を出す。

近いうちに私自身もアルビオンへ向かう必要があるだろう。

仕事を済ませて、引き継ぎも行わねばならない。

＊＊

フリッグの舞踏会にあわせてミス・ヴァリエールが王城へ向かった。

おそらくアルビオンの件だろう。

そのくらい重要なことでなければ彼女の性格からして学校行事を欠席しないからだ。

さて、その舞踏会だが奇妙で気味の悪い出来事があった。

見られているのだ。

私はトリステインとアルビオンとの密約により、公的には貴族の籍を捨てたものとされている。

そんな女に目をやる物好きな貴族はあまりいない。

だが見られているのだ。

慎重に視線を探ると、いた。

真っ白な髪に黒いドレス、ロシュフォール伯爵家の長女、ミス・ロシュフォールだ。

彼女は不思議なことに私を見つめている。

次の瞬間、全身に鳥肌が立つかと思った。

視線の質が如実に変わった。

何でこいつが、という訝しげな視線から女体を舐め回すような、下卑た視線。

彼女以外に私を見ているものはいない。

何故？

なぶるようなその目つきに凄まじい悪寒が全身を襲い、座り込んでしまうかと思った。

女性ができる眼ではない、もっと違う何かが、彼女の内に何かが潜んでいるような、そんな感じがした。

そしてオールド・オスマンの険しい顔。

じつとミス・ロシュフォールを観察しているようにも見えた。

ミスタ・コルベールもあり得ないことに彼女にダンスを申し込んだのだ。

しばらく踊っていると足をもつれさせてこけていたが、傍目からは緊張するというよりも披露して、という印象を受けた。

＊＊

なんということだろうか！

信じたくない、信じられない情報が入った。

例のごとく虚無の曜日に城下で落ち合った人物から聞かされた。

教団によってモード大公領が落ちた。

さらにティファニアを除いて、モード大公の縁者は家臣も含めすべて討たれたということだ。

彼女は間一髪ニューカッスル城に落ちのびたらしい。

なんてことだ、ありえない。

父上、母上。

私がある場にいればどうにかできたかもしれないのに。

後悔しかできない。

＊＊

ミス・ヴァリエールから話が来た。

来週アルビオンに向かう。

旅支度と引き継ぎを終えねばならない。

三年間、魔法学院にはお世話になった。

最後の奉公と思いがんばろう。

\*\*\*\*\*

静謐な王宮にはほとんど人の気配が感じられない。

白亜の宮廷で働くメイドたちは物音一つたてず動くことができる、  
というのもあるが現実には人が少ないからだろう。

そして最も警戒を密にすべき場所、王女の私室に才人とルイズは  
呼び出されていた。

「ルイズ・フランソワーズ。貴女にトリステイン王国王女として命  
令を下します」

「はっ」

片膝をついたルイズの横で才人は混乱していた。

先ほどまでこの二人はじゃれあっていた、ただの幼馴染に見えた。  
だというのに空気が一変して、ここにあるのは王女とその家臣に  
なっている。

とりあえず彼はルイズのマネをして片膝をついた。

限界まで引き絞られた弓のように、場の雰囲気は張りつめていた。

「今から十日後、アルビオンに向かいティファニア公女、ウェール  
ズ皇太子を亡命させなさい」

「拝命いたします」

「情勢は逼迫していますが急いで事を起こすと敵に気取られます。

十日後の明朝、マザリーニとリツシュモンから信頼篤い衛士を護衛としてつけます。学院に潜伏しているロングビルと共に可能な限り早くアルビオンへ」

なんだが大変そうなことになった。

才人は誰に言つてもなく心の中でそう呟いた。

## ミス・ロングビルに安全を（後書き）

今回は短いです、次話は本日24時に予約されています。

## アルビオンに鎮魂を

メアリー・スーに讃美歌を

よお、俺の名前はメアリー・スー・コンスタンス・ド・ロシュフォール。

トリステイン王国のロシュフォール伯爵家長女だ。

神様の力で皆おなじみ「ゼロの使い魔」の世界に転生した元男、現女の子なんだ。

今の俺は見た目アルビノだから、黒い服を着るとキュツと引き締まるんだよ。

白いローブとか身に纏えばマジ雪ん子。

いや、その場合藁のかぶるヤツ、蓑だっけ？ アレの方がそれっぽいな。

日本の雪山に出てきそうな感じ。

ま、いいや。

最近“遍在”を習得したぜ。

だけでもうこれが難しくて、一体維持するのでいっぱいいいっぱい。

それ考えるとワルドパネエ、髭ロリコンのくせに。

カリン様なんてヤバすぎ、あの人たちホントは神様から能力もらってるんじゃない？

それにしても、なんか全く同じ顔の人間が存在するのは変な感じだな。

いや、しかしアレだ。

鏡なんかで見るより俺超絶美少女！

ルイズにも勝てるんじゃないコレ？

\*

みんな、大変だ。

すごい大変なんだ。

具体的に言うとアルビオン行きが決まった。

むしろ決められたというか。

そろそろ起きるかーって感じですよって意識が覚醒しそうな瞬間あるだろ？

丁度その時ノックの音でぴくっと目が覚めたんだよ。

誰だよこんな時間に、と思ったたら髭ロリコンことワルドさん。

え、姫さま来訪してないじゃん。

それに俺ナニかしたっけ？　と思ってたらとつと旅支度を整えろとのこと。

意味わかんないけど大急ぎで準備して外に出れば「いぎ、アルビオン！」だつて。

なんでさ！？

まあ原作に介入するかどうか悩んでたから丁度いいと言えればいいんだろっけど。

不思議なことにギーシュがいなくてフーケさんがいる。

そんなこんなで朝もやの中馬に乗って出発！

でもルイズと髭ロリはグリフォンでした。

くそう、見下しやがつて。

てか髭ロリだとロリっこに髭が生えてるみたいだな。

髭コンだ、ワルドのことはこれから髭コンと呼んでやる。

\*

もう何匹目の馬だよ、って感じ。

あんま俺動物に好かれないからそのたび大変なんだよね。

しばらく乗っていれば大人しくなるからいいんだけど。

で、がんばってラ・ロシエールまでやってきました。

もう一日でこんな遠乗りしないぞ、俺はインドア派なんだ。

ケツが痛くて痛くて。

……もう、お尻がいたくなっちゃったわ。

うん、やっぱり俺は精神的には完全に男だな。

無理無理。

でも弓矢部隊の襲撃はなかった。

楽だったからいいけど、対人戦の練習をしたかったんだけどなあ。

\*

才人カワイソス。

原作じゃギーシュがいたけどこの一行にはいないんだよ。

だから彼だけ一人部屋。

あれ、むしろ気楽で喜んでるのか？

でもワルドとルイズが同室になる時はすごい複雑そうな顔してた。

俺はフーケさんと同じ部屋さ。

その綺麗な身体を舐め回すように観察してやるぜ！

と思ったら早々に布団にくるまっちゃった。

……俺は今、泣いていい！

\*

うーん、ここにきて原作通りの流れになったな。

朝起きたらワルドvs才人のイベント。

勿論才人は負けちゃった。

くっそ、髭コンめ。俺にもっと力があればてめーなんざぎったぎたにしてやるのに……。

いや、これも更なるニヤニヤ展開のためだ。

今は歯を食いしばって耐えるんだ、俺。

この分だとワルドはレコン・キスタ？ まー良くわからん組織確定だなー。

やけに俺に優しくしてくるけど、珍しい風のスクウェアを引き込も

うとしてるっばいな。

逆上して殺されないよう気をつけねば。

フーケさんは一匹狼で探してもいませんでした。

あ、そういえばドンを学院に置いてきたまんまだった。

悪さしてないといいけど……。

\*

うむ、やっぱり原作通り。

道中の襲撃はなかったけど傭兵部隊による夜襲が来たぜ。

相手は人数が多い、しかし所詮平民。

さらにフーケさんもこちらにはいるんだ。

髭コンが陽動を提案する前に一人躍り出て魔法をお見舞いしまくってやったぜ。

なんていうの？

俺TUEEEEEEE!!

ここにきて転生チート大活躍。

まあ遍在は使わなかったけど、エア・ハンマー、ウィンド・ブレイ

クでぼっこぼこモグラたたきみたく近寄ってきた奴らをブツ飛ばす。  
あんまりうつつとうしいヤツにはエア・カッターで片腕とおさらばし  
てもらったぜ。

才人は時代補正のせいかな、顔青ざめさせながら必死についてきてた。  
あー俺もなんかハルケギニアに染まっちゃまったのかな？

首チョンパは無理でも腕くらいならふつーに切断できるわ。

ま、ちつとキツいんだがな。

途中現れた白仮面こと髭コンも四人の協力プレイで一蹴さ！

いかにスクウェアと言えどガンダとスクウェア二人、トライアング  
ル一人の前では雑魚その一に過ぎないぜ。

というわけで俺無双のおかげで無事に船到着。

髭コンが風石かわりしてめでたしめでたしさ。

\*

うん、やっぱり原作だ。

嬉しい限りだぜ。

空賊の茶番劇はニヤニヤできるぜ。

ルイズ強気だけど、若干涙目なのよ。

少し違うな、と思ったのはウェールズ皇太子がワリとすぐ変装を解いたところかな。

硫黄もちゃんとお金で買うつて。

そうだよな、滅びゆく王城に金あってもしゃーないしな。

商人は王族相手だからうへえゝつて土下座してた。

レコン・キスタじゃなくてアレ、なんだっけ？

そうそう、「ニヤル様とホップを愛でる会」だ、それになった影響かもしんないね。

まー拘束されることもなく優雅な空の旅としゃれ込みますか。

\*

最後の晚餐つてのは夕焼けに通じる寂しさがあるもんだな。

もう笑うしかない、みんな笑うしかないんだよ。

それがカラ元気なのがありありとわかつて、な。

ルイズは早々に泣き出して才人と一緒に出ていつちゃった。

俺も踊る気になんてなれないし、壁の花に徹する。

すると髭コンが話しかけてきたんだ。

明日の朝結婚式やるってさ。

あーもう、こいつ完全クロだな。

でもここで才人覚醒イベントをこなしておかないと後々ヤバい気がする。

ここはスルーして陰ながら才人を手助けするくらいだな。

とりあえず俺は朝一の船で脱出するから出ない、とは言っておいたさ。

こっそり城内に潜んで何とかいい方向にもっていこう。

その気になればフライでアルビオンから脱出！……できるかなあ？

\*\*\*\*\*

アルビオンに鎮魂を

——なんか変だな……身体が引き寄せられるっていうか、奇妙な感じだ。

城内に人の気配はほとんど感じられない。

僅かに耳へ届く金属音は歩哨のものばかりで、ニューカッスル城は深い眠りについていた。

そんな中メアリーは歩き続ける。

何かに引き寄せられるように、芳香に誘われるように。

「あれ、ドン？」

彼女を突き動かすのは得体のしれない勘だけではなかった。

どこからか染み出るように現れた使い魔も、いつの間にやら彼女を先導するように歩いている。

魔法学院に置いてきたはずなのに、という疑問はメアリーの脳裏によぎりもしなかった。

相変わらぬ悪臭、そしていつもより機嫌よさそうに揺れる尻尾。トコトコと微かな足音は地球の犬とほとんど変わらなかった。

——中庭か。

ドンは廊下を歩き続け、ついにはある中庭にやってきた。

メアリーは唐突に月を見上げたくなる。

昨日はスヴェルの月夜、今日から徐々に双子の月が離れていくだろう。

彼女は月見が好きだ。

ロシュフォール領にいたときは、よく寝室へ差し込む月明かりを見上げた月に映る影を、姿を変える夜の雲をワイン片手に楽しんだものだ。

——高いところだしさぞ月も大きく見えるだろうなあ。

月光がさらさらと花壇を照らしている。

どこか幻想的な中庭に、メアリーは足を踏み入れた。

「すい……」

大きさは期待したほど変わらなかった。

だが、明るさが違う。

地表に届くまでの距離が違うせい、夜だということのにかなりくつきりとした影が見える。

今この瞬間妖精がワルツを踊っていても何の違和感もない、不思議な空間。

メアリーはつい嬉しくなってその場でくるりと回ってみた。

——スカートの翻りまでばっちりだな。

この月明かりに魅せられたのか、彼女は実に楽しげに歩き出す。両手は後ろ手に組んで、月の祝福を受けた花々の香を時折嗅いで庭をゆつくりと歩いて回る。

月光を一身に浴びた白い少女を見守るのはおぞましい姿の忠実な使い魔だけ。

この光景を絵画に閉じ込めたなら如何ほどの値がつくかわからない。

ただこの世ならざる美しさと、儚さが混在した情景だった。

「あれ、い」

メアリーは足を止める。

目の前には大きな門、石造りの壁、やさしい夜の光に包まれてすらはつきりとわかる白い建物。

——ワルドが裏切る教会か。

原作と今はまったく状況が違いすぎる。

正直な話、メアリーはどうすればいいのかわからなかった。

今までは原作には触れないよう動いてきた。

しかし、自分の存在が大きく変化をもたらしているような気もして、積極的に介入したほうがいいのではないか、という疑問を抱くようになっていく。

今回のアルビオンだってワルドの行動に流されるまま従った結果に過ぎない。

才人の手助けをしよう、とは思ったもののそれが正しいのかどうかもわからない。

とりあえずの判断を彼女は下す。

——明日結婚式らしいし、一応下見しておくか。

ワルド自身が言っていたことだ。

ここはきつと原作通り戦場になるだろう。

地形を把握するなり仕掛けを施すなりしておいた方が生存率は高くなる。

——ぎぎいいいいいい——

古臭い教会の扉は、城内にまで響くほどの音を立てて開いた。

あまりの大きさに彼女は少し冷や汗をかいたほどだ。

「こりゃまた……」

ステンドグラスから差し込む月光がすべての祭具を柔らかく包んでいる。

入り口から祭壇へ向かう赤い絨毯は明日の結婚式のため敷かれた

ものだろうか。

教会のあちこちにかけている銀鏡がその光を反射し、天井までもがはつきりと見える。

夜のミサを行うとしても蠟燭一つ必要ないほどの、しかし昼間とは違う明るさだ。

その神秘的な雰囲気にはメアリーは息をのんだ。

一步一步、石の床を踏みしめるよう長椅子の間を進んでいく。

椅子の背を伝わらせている右手に埃が積もったような嫌な感触はないし、銀鏡の前で立ち止まってじつくりと眺めてみても曇りひとつ見当たらない。

管理人が律儀で信仰心の篤い人なんだろうな、とメアリーは感じた。

——ロシュフォールに戻ったら聖堂をもっときっちりしようかな。

現代日本の高校生らしい感覚が残っているため、敬虔なブリミル教徒とは言えない彼女ですらそう考えるほどだ。

ここが戦火に包まれてしまうことが無性に惜しかった。

——隅々まで観察してパクれるところはパクってしまおう。

トコトコとドンは祭壇に近づいていく。

使い魔は好きにさせて、こっちもこっちで自由にやろうとメアリーは教会のあちらこちらを観察し始めた。

ステンドグラスは最後に時間をかけて見よう、と決めてまずは壁画を眺める。

白くレンガには始祖ブリミルらしき人物、そして三人の騎士がそれを守るように構えている。

それぞれ額、右手、左手に輝きを示すかのような模様、さらに左手が輝く騎士は左胸にルーンらしきものが刻まれている。

近づいて目を細めても何が書いているかはわからない、壁に元々あった傷のようにも見える。

諦めて、少し距離をとって壁画を眺めると、三騎士の視線の先には黒く奇妙な模様があった。

——なんだこりゃ？

メアリーは目を凝らして再び顔を近づける。

瞬間、影が広がった。

「な!？」

彼女は咄嗟に壁から距離をとった。

すぐに懷からタクト状の杖を取り出す。

唱えるスペルはブレイド、室内で十分な距離はとれないと考え近接戦闘で挑む。

「ドン!」

己の使い魔にも呼びかける。

影は壁に張り付いたまま、白い紙に墨汁を垂らしたように広がっていく。

メアリーを直接襲う気配はない。

同時に、彼女の使い魔が動く気配もない。

「ドン松!!」

再び叫ぶ。

しかし動かない。

彼女が呼べばいつだって駆け寄ってきた使い魔は、この時に限って言えば何の反応も示さなかった。

「どういつ……!」

思わず祭壇の方に目をやった。

「は……」

メアリーは目を疑った。

次に自分の正気を疑った。

そこには人がたっていたのだ。

それがただの人ならば、時間帯がおかしいとはいえここまで混乱することはなかった。

「く、クロムウエル……」

「おや、聖母様は我が名をご存知でしたか。光栄の極みですな」

原作におけるレコン・キスタの盟主、この世界ではナイアルラトホテップ教団の大同祭、オリヴァー・クロムウエル。

この場にいるはずもない人物の登場に、メアリーは思わず一歩後ずさった。

思考がまったく追いつかない。

頭を埋め尽くすのは「なぜ?」という疑問ばかりだ。

「実に良い使い魔ですな、聖母様にふさわしい」

クロムウエルは片膝をついて猟犬の頭を撫でている。

襲い掛かることもなく、彼女の使い魔はされるがままになっていた。

むしろ尻尾さえ振って嬉しそうにしている。

メアリーにとって、これはまさに悪夢だった。

手からは力が抜けきり、音を立てて杖が石床に落ちた

「では、はじめましょうか」

クロムウエルが立ち上がり、何かを宣言する。

するとどこに潜んでいたのか、顔さえも見えない黒いローブを身にまとった者どもが教会の壁際に立ち並んだ。

大きな扉はすでに閉ざされており、そこにも妖しい人物が佇んでいる。

——う、嘘だ。ありえねえ、音なんて何もしなかった！！

風のスクウェアメイジであるメアリー・スーの聴覚をもってしても異変は感じ取れなかった。

一介の司祭に過ぎなかったはずのクロムウエルの接近。

五十人近い謎の黒衣の集団。

一切感知できなかったことが信じられない。

これらはすべて壁の黒い影から染み出してきた、それ以外彼女には思いつかなかった。

さらに信じられないのはすでに扉が閉じていること。

あれほどの軋みを立てて開いたものがどうして音もなく閉ざせようか。

クロムウェルが右手をかけたのと合図に、黒衣は一斉に声をあげた。

——彼の日こそが目覚めの日——

奈落の果てから響いてきたような歌声。

——永劫の闇へと帰せしめん——

およそ人間に出せるものではない、聞いているだけで正気が失われる。

——告げる神やがて来りまして——

だというのになぜだろう。

——あまねく生命は絶え果てん——

メアリーは狂気に落ちることもできない、むしろ心地よさすら感じている。

——死を経た全てのものの上に——

一歩一歩近づいてくるクロムウェルを前にようやく気付く。

——妙なるフルートの音色にて——

メアリーは、自分がとくに狂っていたということを。

——人みな暗黒へ落ち包まれん——

「祭壇の前へ、聖母様」

歌声は止み、メアリー・スーは歩き出す。

微かに残っている意志に反して祭壇へと近づいていく。

後ろを歩くクロムウェルを振り返ることもなく、待ち続ける使い魔にも目をくれず。

——いやだいやだいやだ、やめてくれ俺は近づきたくない！！

全力で足をとめようとしても動かない。

踵を返して駆けだそうとしても意味がない。

彼女の体は、今や彼女の物ではなくなっていた。

—— 歓びを ——

あれだけの合唱にも城内から兵が駆けつけてくる様子はない。  
この教会内は、現世との繋がりが閉ざされていた。

—— なんだって俺がこんな目に合わなきゃいけないんだよ！！？

ヴァージンロードを音も立てず歩いていく。

—— 寿ぎを ——

やがて祭壇の前に着き、ゆつくりと教会内へ振り返る。  
クロムウエルは片膝をついた。

—— 助けて！ 助けて神様！！ 誰でもいいから助けてくれ！！！

彼が懷から取り出したのは、金属製の小箱。  
なんとも表現し難い歪な形状のそれをメアリー・スーに差し出す。

「模造品にすぎませんが、輝くトラペゾヘドロンにございます」

—— やめてくれええええええええええ！！！！！！

——祝福を——

受け取った瞬間、世界が揺れた。

\*\*\*\*\*

——神様ああアアア！！！！　どうして、どうして！！

「え、むしろ人間の流儀に従ったんだけど」

——なん、なんだよ！　それ！！

「等価交換だっけ、そんなのはじめて聞いたからびっくりしたよ」

——やめて！　消えたくない！！

「人間の寿命の半分くらいあげたんだし、別にいいじゃん。そんな辛いことでもないし」

——死にた、くない……………なん……………で……………

「なんで、って、なんとなくかなあ」

——……………。

「あ、もう聞こえないか」

どこか神々しくも感じる、褐色の肌の子供はフルートを構え、一言。

「ていうかアレ誰だっけ」

\*\*\*\*\*

空中大陸アルビオンを襲った大地震。

あり得るはずもないその現象に、ニユーカッスル城は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

「何が起きたってんだ!？」

「わかりません!!」

かがり火が焚かれ城中を衛士が駆けまわる。

厨房はじめ燭台が倒れて起きた小火を消して回るもの。

上級士官や大使の無事を確認するもの。

城壁の損害箇所を月明かりを頼りに修復するもの。

上を下への大混乱だった。

やがて、物見の兵がある事実気付く。

「あれ、おかしくないですか」

「んだよこんな忙しいときに」

新兵が指さしたのは城門前の大平原。

ナイアルラトホテップ教団の軍勢が控えていた場所だ。

ただの暗闇が広がっている。

老兵はちらと眼をやり、すぐに顔を落として城壁の損害箇所を探す作業に戻る。

「夜だから暗いだけだろ、何言ってるんだ」

「……暗いからおかしいんじゃないですか。それにさっきまで聞こえてた歌みたいなのも聞こえません」

その言葉に老兵は一瞬考え、勢いよく顔をあげて目を見張った。

暗い。

暗闇しかそこにはない。

先ほどまではかがり火が燃えていたにも係わらず、城壁が見えるほどの月明かりがあるにも係わらずだ。

さらに耳を済ませても城内からの喧騒が聞こえるだけで虫の声一つ聞こえない。

焚火を囲んで何か歌い踊っていたヤツらもいたはずだったのに。

「こりゃ、何が起きたんだ……！？」

「殿下に知らせてきます！」

「急げ！ ヤバイ雰囲気やしやがる」

新兵は矢のように駆けて行った。

老兵が凝視しても一万の兵が野営していた場所には何も見えない。光のささない深淵を覗き込むような、あるいはアルビオンから大地を見下ろすような感覚だ。

じつと目を凝らしていると、闇がざわざわと蠢いているような気にもなってきた。

「違う！」

老兵は強い否定の言葉を自身に投げかけた。  
実際に闇が動いている。

冥闇の中心部、そこにある何かへと収束するようにその姿を縮めていく。

その時新兵がウェールズと衛兵を連れて戻ってきた。

「何があつたセント・ジョン」

「殿下、蠢く闇でございます。闇が集まっていくのです」

這いずりまわるように暗黒の絨毯はじわりじわりとまとまってくる。

見張り台に立つ五人の男は固唾をのんで見守るしかない。

月光すら吸い込みかねないその限りない黒さをもったナニかは時に盛り上がり、時に広がりながら中心部に収束していく。

その動きはハルケギニアに存在するどのような生物にも該当しない、していいはずがない。

全き光の届かぬ夜すらを超越した、人智の及ばぬ冥府からの使者のように彼らは感じた。

この世に地獄があるとするなら、まさにあの幽々たる実体化している暗闇がそうなのだろう。

五分ほど時間がたって、漆黒のあつた場所に人ほどの大きさの影がポツンと佇んでいた。

ウェールズは持参した望遠鏡に目を当てる。  
息をのんだ。

「なんてことだ……」

「殿下、いかなされたのですか」

老兵は目を細めて影を見つめ。

「ッ!? あああああああ!!」

絶叫した。

その表情は尋常のものではなく、底など計り知れぬ恐怖と狂気が混在している。

頭を抱えながら星空を仰ぎ、意味をなさない単語の羅列を口から吐き出す。

眼はぐるんと裏返り頭をかきむしるつま先には微かに赤黒い液体が付着していた。

「いかん!」

ウェールズは腰に下げていた杖を一瞬で抜き放ち。

「ブレイド!」

セント・ジョンの首をはねた。

「アレを見てはならん! 平民が見れば発狂するぞ! 鐘を鳴らしメイジのみ戦闘配置へ!」

「殿下!」

「セント・ジョンを焼いてやれ」

ウェールズは一人の火メイジを残して見張り台から降りた。

新兵は何も言わずに鐘を鳴らしに走り、残る三名はウェールズに詰め寄った。

「急げ、発狂したものは残らず首をはね死体を焼け」

「アレはなんだというのです!!」

ウェールズは一瞬足を止めた。

「ミス・ロシユフォールだ」

白かった髪を夜闇に染め上げメアリー・スーが一人、ニューカッスル城へと歩み出した。

\*\*\*\*\*

——カンカンカンカンカン! ——

『メイジは正門で迎撃しろ!!』

『平民は衛兵含めて避難船に乗せろ! 急げ!!』

急き立てるような鐘の音とともに飛び交う指令と怒声、静かだった城内はあつという間に緊張感あふれる戦場の最前線へと変わった。

「何があつたのかしら」

ルイズも叩き起こされ、身支度を整え終えたところだ。

詳しい状況は未だ知らされていない、すぐにでも出立の準備を行うようおさなりに伝えられたただけだ。

ただ情勢が変わって急を要する、ということだけが分かった。

「ミス・ヴァリエール!」

「殿下!？」

ノックもなしにウェールズが飛び込んできた。  
後ろには旅装のティファニアとマチルダを伴っている。  
城中を駆け回ってきたのか、息が上がっていた。

「私は極力時間を稼いだから、可能ならばグリフォンかドラゴンで  
ラ・ロシエールへ落ちのびる。テファを頼んだ!」  
「何が起きたのですか!？」

空賊姿の時も、最後の晩餐の時も、いつだって冷静さと優雅さを  
忘れなかったウェールズ。

これほど焦っている姿をルイズが見たのははじめてだった。

「敵が攻めてきた。それだけだ」

アルビオンの皇太子は踵を返して駆けて行った。

本当に余裕がないということが仕草だけでわかる。

ルイズは残されたマチルダとティファニアに目を向けた。

「避難船に向かいながら話すわ」

「わかったわ、サイトとワルド様は？」

「伝令が行っているはずよ」

マチルダの表情は硬く、ティファニアに至っては恐怖までその美  
しい顔に浮かんでいる。

——あれじゃ死ににいくと公言しているようなものだわ。

先ほどのウェールズの様子は尋常じゃなかった。

きっと彼女たちもそれを気にしているのだろう。

ティファニアはひどく怯えており、一方マチルダは唇を噛んで何か迸る激情をこらえているようにも見えた。

すぐにマチルダが歩きだし、ティファニアもそれに追隨する。

ルイズは一晩もお世話にならなかった寝室を振り返り、二人の後を追いかけた。

ハルケギニアにおいて、王族の血は貴く重い。

貴族には遥か光すら届かない星の海より来る邪悪な化け物からこの惑星を守る義務があるのだ。

当然その貴族を束ねる王はいついかなる時も生き残ることが優先される。

本来ならウェールズ皇太子が残るなど言語道断、拘束してでもトリスティンに連れて行かねばならない。

そう、ルイズには言うことができなかった。

彼が亡命している猶予などもはやないということだろう。

「敵が攻めてきた、ってどういうこと？ 関の声も何も聞こえなかったわ」

「わたくしも詳しくは知りません。夜襲の類ではない、ということしか」

——そもそもメイジだけを迎撃に回すって言うのがおかしいのよ。なんで平民を奥に引っ込めるような……。

ぐるぐると思考を巡らせながらルイズたちは早足で隠し港に向かう。

ぽつり、とティファニアが呟いた。

「……混沌よ」

「え？」

「這いよる混沌が来たの」

その言葉にルイズは思わず足を止めかけた。

「ティファニア様！ ミス・ヴァリエール！」

そこに老メイジのバリーが息せき切って現れる。

彼は軍装束の懷から古びた木箱と指輪を取り出しティファニアに手渡した。

「風のルビーと始祖のオルゴールでございます。お急ぎください！」

「これ、お兄様が持っていくはずじゃ……」

「……お急ぎください！」

血を吐くようにバリーは叫んだ。

「マチルダ、後を頼む」

「……バリー師匠、承りましたわ」

それだけ言うとマントを翻してバリーは城門の方に向かって行った。  
呆然としているティファニアを促しマチルダは歩き出す。

その目じりには涙が浮かんでいた。

\*\*\*

「……ここどこだよ」

才人は迷っていた。

途中何人も兵士とすれ違ったからその時に隠し港への道を聞けばよかったのだが、皆鬼気迫る表情だったので声をかけづらかったのだ。

なんとなく自分の勘を信じて、廊下を突き進んだり階段を上ったり下りたりした結果、ようやく自分が迷子であることを認めざるをえない状況にまで追い込まれた。

「しかもここ外じゃねーか」

彼がたどり着いたのはメアリーが月見をしていた中庭だった。

城中で月明かりを打ち消すほど多量のかがり火が焚かれているため、先ほどのような美しさは残っていない。

才人は自分の方向音痴さにため息をついた。

——隠し港ってどこだよ……って、あれ？

ずっと中庭の教会へ入っていったのは見知った顔だった気がする。出会ってからずっと才人の心を悩ませるワルド子爵だ。

——迷子になった、なんて知られたらまたバカにされそうだな。

才人のワルドに対するイメージはよろしくない、むしろ悪い。

エリート特有の「俺偉いんだぜ？」オーラがぶんぶん出ている、と勝手に決めつけていた。

——あいつも港行くはずだから、こっそり着いていきゃいいか。

抜き足差し足忍び足、と心の中で唱えながらこそこそ教会に近づいていく。

さつと扉近くの壁に背中をつけて気分はスニーキングミッション。扉は開け放たれていて、中から微かな話声が聞こえた。

一人は勿論ワルド、しかしもう一人は知らない声だった。

声から受ける印象は少し年のいった男性、しかし底知れない何かをその平坦な調子の話し方から感じることが出来る。

「聖母様は降臨されたようですね、クロムウエル閣下」

「無事トラペゾヘドロンを捧げるといいう大役を果たすことができたよ」

クロムウエル。

その名前を才人は知っている。

かの邪神を信仰するナイアルラトホテップ教団、その大司祭にあたる人物だ。

間違いなくアルビオン王国の敵であり、もっと言えばハルケギニア全体の敵。

それがどうしてワルドと話しているのか、ワルドがなぜ彼を閣下と呼ぶのか、トラペゾヘドロンとはなんなのか。

才人の疑問は尽きない。

が、例の“許せない気持ち”と“ここにおいてはマズいという気持ち”が彼の思考力を奪うかのようにせめぎ合う。

——よ、よくわかんねえけどルイズに相談だ。

色んな考えを一度破棄して行動指針を決定する。

ずっと身がかがめて壁から離れ城の中へと足を進めていく。

無論足音をたてるようなヘマはしていない。

していないはずだった。

「その前に、目障りな輩を始末させてもらいましょう」

「っ!？」

ワルドの声とともに突然目の前に白仮面が降ってくる。  
才人にはそういう風にしか知覚できなかった。

突如姿を現した男はゆっくりとその顔を覆う仮面に手をかけ、外した。

「し、子爵さん……?」

仮面の下にあったのは、ワルドの顔だった。

思わず逃げ出そうと振り向けばそこにもまたワルドと見知らぬ聖職者風の黒衣を身にまとった初老の男性。

「ど、どういうことだよ……それにクロムウェルって敵なんじゃ」

「つまり、そういうことさ。ガンダールヴ」

答えたのは初老の男の隣にいたワルド。

才人にはもう何が何だかわからない。

ただ後ずさるしかできない。

「せめてもの情けだ。始祖ブリミルの雷で逝くがいい」

バチンと空気の爆ぜる音がする。

その刹那才人の視界は白光に閉ざされた。

「ツアアアアアア!……!……!」

——痛い、なんで、俺、るいず……。

とりとめもない思考を最後に、彼の意識は途絶えた。

膝をつき、前のめりに倒れ込み、それきりピクリとも動かなかった。

それを見ていたのは無機質な瞳のワルドとクロムウェル、それに中庭を照らす双月だけ。

ワルドは何事もなかったかのようにクロムウェルへ一礼し、話を切り出す。

「では閣下、我らが聖母様の下へ参りましょう」

「とどめは？」

「風メイジたる我が身にとって心音の有無程度たやすく聞き分けられます」

「そうかね、では君を聖母様に引き合わせよう」

ただそれだけの会話。

彼らは無言のまま城門へと向かう。

後には物言わぬ才人が残されるのみだった。

## アルピオンに鎮魂を（後書き）

次回「メアリー・スーに祝福を」

## メアリー・スーに祝福を

「避難船出港しました！」

「急げ、門に到達するぞ！」

「配置に着け！」

一歩一歩、ゆっくりと大地を犯すかのように踏みしめ、黒髪のメアリーはニューカッスル城を目指す。

彼女の傍には誰もいない。

つい十分ほど前、城門前の大平原には一万にもなる黒衣の兵士が勝利を目前とした宴を行っていたはずだ。

それが今では誰もいない、何もいない。

人影どころか、野営用のテント、おざなりな馬守柵、糧食、一切合財存在しない。

さらにはところどころに植わっていた樹木や、大地を覆う草までが消え、荒涼たる平原がそこには広がっていた。

それらがどこにいったのか、ニューカッスル城にいる兵士たちは誰も知らない。

考えることすらできない。

彼らに残された時間はすべて、ただひたすらに城の防備を固めることにあてられた。

ジェームズ一世は一人玉座の間に残っている。

万一城門が破られ敵が入り込んだなら、仕掛けられた大量の火の秘薬をもって差し違える覚悟だ。

「火はすべて城壁から火炮に徹せよ！ 土は城門内からゴーレムで平民とともに門を抑えろ！」

「水と風は城門内で待機、城門が破られたのち魔法の斉射を行え！ 間違っても視線をあわせるな！」

平民に退避令を出したが、一部の平民兵士は城内に残っていた。この命を費やしてもアルビオンという国を守りたい、と申し出たのだ。

ウェールズは確実に死ぬであろう城門の抑えに彼らを配置した。平民兵は笑ってそれを受け入れた。

——相手がどんなものか、まったく得体がしれない。

ウェールズは唇を噛む。

姿形はトリステイン王国から来たメアリー・スーそのものだ。純白の髪は月の出ない夜闇よりもなお昏くなっていたが、王族という仕事柄彼は人の顔を見間違えるということを滅多にしない。

——たかがスクウェアメイジャー人、だといいいのだが。

ウェールズはワルドからメアリーの実力を聞いている。

スクウェアではあるものの戦闘には慣れていないようだ。

しかし、城外の始祖の所業とは思えぬおぞましい魔法のようなナニ力を見てもは樂觀はできない。

下手をすれば彼女は、一万の兵よりも強大なのかもしれない。

とにかく城壁からの集中砲火で片が付けばそれでよし。

いかに風のスクウェアと言えどトライアングルを五名、スクウェアを一名擁しているアルビオン王党軍の集中砲火には耐えられないだろう。

「距離五十！ 詠唱開始！」

「フレイム・ボール放て！！」

そう、ウェールズは見誤っていた。

「ば、バカな……」

「ありえん！ もう一度だ！！」

敵の強大さを。

二十名の火メイジ集団のフレイム・ボール斉射は月明かりよりもかがり火よりも輝き、あたりは昼間のような明るさに包まれた。

それを単一の目標に向けてぶつける。

戦場でも攻城ゴーレムなどを破壊するときくらいしか行わない戦術だ。

当然、得体の知れない相手だとしてもこれで終わりだ、と大半のメイジは確信していたのだ。

「距離三十、斉射！」

再びフレイム・ボールが放たれる。

轟音をあげて迫る炎を前にしてもメアリーは眉ひとつ動かさない。ただゆつくりと、着実に歩を進めるだけ。

火メイジたちの魔法は城門前の平原を赤に染め上げ、彼女はどのような生き物であれ生存できない劫火に包まれた。

特にスクウェアの炎球は大地すら融かし、ニューカッスル城前は火竜山脈のような溶岩地帯へと様変わりした。

どろりと流れる大地だったものは、見るものによつては神聖さを感じさせるような強い光を放つ。

あまりに眩い光源で常人ならば目が焼け失明するに違いない。だが、それでも。

「距離十、まだ近づいてきます！」

それはもはや報告ではなく悲鳴だった。

例え火竜であろうとも一撃で倒せるレベルの砲撃だ。  
しかも相手は、内実はどうあれ見た目は弱い女性に過ぎない。  
城壁の火メイジたちは恐慌状態に陥りかけた。

「静まれ！ 城壁から退避、門を破ったところで前メイジによる斉射だ！」

それをウエールズの叱咤が抑えた。

火メイジ隊は次々に城壁から飛び降り城門から十メートル、百名近くの全メイジが控える場所に陣取った。

城門と城との距離は三十メートルほど、ここを抜かれれば後がない。ごく、と誰かが生唾を飲む。

見えていたものが見えなくなるといふのは不安を伴う。

ましてや敵はその強大さの片鱗を見せつけている。

緊張しないはずがなかった。

城外からはまだ溶岩が冷えて固まっていく音しかない。

「来ます、近づいています」

聴覚に優れた風メイジにしか敵の接近は感知できない。

彼は敵の城門からの距離を指で示す。

五、四、三、二、一。

二秒ごとに折られていく指に皆杖を強く握る。

城門は分厚く、攻城ゴーレムを使えない少女が突破するのに骨が折れるに違いない。

スクウェアがブレイドを使おうと貫くことすらできない代物だ。

風のスクウェアということだから、ウィンド・ブレイクとエア・ハンマーの併用で打ち抜こうとするだろう。

だが内側から抑えられている城門をそう易々とは突破できない。

カッター・トルネードを使うにも詠唱には時間がかかる。

フライやレビテーションで突破しようものならその瞬間撃ち落とせばいい。

きつとあの環境下で生き延びれたのも未知の魔法によるものに違いない。

だから魔法の併用が困難な飛行中ならば仕留められる。そう、大多数のメイジは勘違いしていた。

とうとう風メイジの開かれていた掌が握り拳になる。

一秒、二秒、三秒、嫌な緊張感を孕んだまま進む時間に誰かの汗が地面に落ちた。

「案外もう帰ったとか」

「はは、ガキだったしな」

十秒ほどたつて軽口をたたくメイジもいる。

耳に全神経を集中させている風メイジがしつと指を立てた。

それから三十秒ほどたつても何も無い。

全兵士の力が少し抜けた。

ウェールズも相手の動いていない以上、次の手を打つべきかと考えを巡らせ始めた。

「……え？」

「どうした？」

「いや、あれ、少し待ってください」

二十歳と若いながらもトライアングルに達しているメイジはそういつて再び集中する。

五秒ほどたつて、さっと顔が青ざめた。

「いません、風の吹き抜け方が変わりました、城門前には敵がいま  
せん！」

「バカな!？」

この若い貴族、ロバート・ハートはウェールズが信頼する親衛隊  
の一人だ。

彼が全神経を集中させれば虫の足音すら聞き分ける、と誇張気味  
の噂が立つほどの男。

それが敵を見失うはずがない。

ざわ、と周囲のメイジたちも落ち着きを失う。

「落ち着け。ロバート、もう一度探れ」  
「はっ」

ウェールズにはカリスマがあつた。

彼さえいれば何とかなるという不思議な確信をもたせる、王にな  
るべくして生まれた男だ。

さらに頭も回る。

ここで必要なことは何か、ということを瞬時に判断できる。

しかし、それも相手のことを良く知っていてこそはじめて生きる。

「な」

ぞぶりと、心臓が貫かれたかのような悪寒に襲われた。

そして彼は見た。

城門を抑えるゴーレムの間に立つ、全き暗黒を凝集した少女を。

「総員詠唱ー!ー!」

ウェールズの叫びに、まずバリーが反応した。

彼の生涯最高速度の詠唱、最強の魔法。

烈風カリンの出現までは風メイジ最強とまで言われた彼は平民もゴーレムにも、自分たちにもかまわずその力を解き放つ。

「カッター・トルネード！」

風のスクウェア・スペル、竜巻は城壁を巻き込みながら天を貫くほどに巨大化し、周囲の物までも切り裂く。

城門を抑えていた平民は血煙となって天に昇り、ゴーレムを形作っていた岩石や城壁は轟く風の激流に巻き込まれ凄まじい破壊をもたらす。

被害を裂けて城門から大きく距離をとったメイジたちは、全員各々の魔法を詠唱しはじめた。

個人に対する攻撃力ではない、完全なオーバー・キルだ。

真空を巻き込むそれすら時間稼ぎにもならないと判断した土のスクウェアメイジが巨大な鋼のゴーレムを生み出す。

火のスクウェアは己の全精神力を込めた人の頭ほどの白炎を生み出し、カッター・トルネードが切れるのを待つ。

水のトライアングルもいつでもアイス・ストームを発動できるよう詠唱を終えた。

彼らに及ばないまでもライン、ドットなりに己が扱える最強の魔法を、生涯最高の集中力で詠唱する。

ウェールズも杖が折れそうなほど強く握りしめながら、ライトニング・クラウドを詠唱した。

始祖ブリミルの血を引くメイジとして、必ずここでコレを倒す。全員が断固たる決意に満ちていた。

やがて竜巻は勢いを弱め、完全に途切れた。

城壁は荒廃した城を思わせるほど崩れ、城門もどこかへ飛んで行

ったのか、しばらくすれば地に響くような音が数回響いた。  
だがしかし。

メアリー・スーはそこにいた。

傷一つ負わず、髪を黒く染めた姿でそこにいた。

ぼんやりとした無気力そうな表情で、すべての人類に絶望を与えるために。

彼女は再び歩き出す。

「放てッ！」

炎、氷、雷、風、土、水。

すべての魔法がこの世ならざる少女を絶命させんと襲い掛かる。  
連続した弾着で凄まじい土煙があがり、視界は完全に奪われた。

そこにとどめと言わんばかりに二十メートルもの鋼のゴーレムが巨大な拳を叩きつける。

一撃では物足りぬ、と続けざまに拳の乱打を見えない敵にあびせまくる。

ニューカッスル城を揺るがすほどの勢いでアルビオンの怒りを喰らわせた。

五十発も振り下ろしただろうか、土のスクウェアはようやくゴーレムの動きを止める。

土煙が濃すぎて何も見えない。

温度変化に敏感な火メイジにすらなにもわからなかった。

みなじりじりと城の方へと後ずさる。

「……音、ありません」

ロバートの報告におお、とメイジたちはどよめいた。

ウェールズは恐怖を振り払うようにウィンドを詠唱する。

これで仕留められなければどうすればいいのか、彼には見当もつ

かない。

「ウィンド！」

ざあつと天空大陸らしい爽やかな風が吹く。

土煙が晴れた先には果たして、メアリーはいなかった。  
途轍もない安心感が貴族たちを包んだ。

「まだ油断するな！」

だがウェールズは鋭く言い放つ。

彼女が立っていた大地は原型をとどめていない。

空から大岩が何発も落ちてきたかのようにボコボコだ。

炎の魔法のせいで周囲は熱く、アルビオンに似つかわしくないほど皆汗をかいている。

白炎の影響か、ガラス化している大地もあった。

月明かりとかがり火を頼りに注意深く観察しても、闇の残滓は見当たらなかった。

ふう、とため息をつく。

強敵との対戦はありえないほどに精神力を削る。

ましてや邪神に連なるであろうものの相手だ。

ウェールズのため息とともに、皆張りつめていた肩を楽にした。

「アルビオン万歳！」

『アルビオン万歳！ 始祖ブリミル万歳』

バリー老の掛け声に皆歡喜の声をあげた。

事の経緯は不明だが一万の敵兵も片付いたのだ。  
これから戦後処理がはじまる。

今までナイアルラトホテップ教団に洗脳されていた貴族もこれでは正気を取り戻すだろう。

ウェールズの頭の中で様々な事柄が駆け巡る。

――まずは休もう、だがクロムウェルを捕らえるまでは油断ならんな。

先走ったロバートが城の蔵から上等な白ワイン樽を持ち出してきた。

だがウェールズに咎める気はない。

あれらの相手は正気を削る。

今はただこの安心感と勝利に酔っていたかった。

「ロバート、私にも頼む」

「はっ、殿下」

「陛下に知らせてきましょう」

バリーは玉座の間に向かって飛んでいく。

ナイアルラトホテップ教団の手にかかったものは少くない。

今夜だってバリーの渾身の力ター・トルネードで罪なき平民を巻き込んでしまった。

だが勝利だ。

勝ったことを祝わねば先に進めない、彼らに顔向けできない。

彼らの献身には今後の治世をもってこたえる。

それが王族の務めだ。

ウェールズは錬金で造られた青銅のワイングラス片手に、地上を冴え冴えと照らす双月に誓った。

\*\*\*

「陛下！」

バリーは玉座の間に繋がる扉を勢いよく開いた。

普段ならば衛兵もあり、格式通りにこの扉を通ったであろうが今は違う。

アルビオンを襲っていた脅威は去ったのだ。

これほどの慶びはない。

一秒も早く己の主に伝えたかった。

ジェームズ一世は玉座に最後にバリーが入ってきたとき同様に腰を下ろしたままだ。

飛び込んできたバリーを見ても杖は下ろさない。

「殿下が勝利をおさめましたぞ！」

「知っておる。関の声がここまで聞こえたわ」

ニヤリと親しい者にしか見せない笑みをジェームズはこぼした。

「だが気を緩めすぎではないか、バリーよ」

「ですが、凄まじい戦いでした。すぐ緩めねば兵に影響を与えるでしょう」

「そうであったか。凄まじい魔法の応酬だったように聞こえたが、如何な敵であった？」

「この世のものとは思えぬ敵、としか説明できません」

バリーは先ほどの少女を思い出す。

最後の晩餐を楽しんでいた時は、幽玄なる雰囲気醸し出していたものの、ただの少女にしか見えなかった。

彼女に何が起きたのか、まったく予想もつかない。

「ただトリステイン大使に紛れていたミス・ロシュフォール、彼女でした」

「……一人に対してあのような大規模魔法をたたみかけたのか？」

「いえ、彼女は既に人ではありませんでした。もっと、名状し難い何かでしょうな」

少なくとも、彼女はアルビオンの処女雪よりも白い髪の女性だった。

それがどのような光をも吸い込む漆黒に染まろうとは、神でなくては不可能なようにも思えた。

「しかしニューカッスル城の前に駐屯していた不浄な輩はすべて消え去りました」

「おお、まことか」

「ええ、まるでミス・ロシュフォールがすべての邪悪の中心であったかのように」

「それはめでたい。明日は一日かけて勝利を祝わねばな」

ふと、バリーは自分の言葉が気にかかった。

——すべての邪悪の中心——

なにか心がざわめく。

いや、徐々にスクウェアスperlを行使したせいだろう、と思い込んだ。

そうしたかった。

「おや、そんなめでたい話なら我々も加えていただきたいですな」

物音ひとつしなかった。

今宵は風メイジの耳を誤魔化すような事態が多すぎる、とバリーは内心舌打ちした。

ついさっき彼が潜り抜けた扉の傍に、まるで影から染み出たように佇む二人の男。

腰に下げた杖をバリーは瞬時に抜いた。

すでに大技を使っているため精神力は心もとない。

「何奴！」

「ナイアルラトホテップ教団大司祭、オリヴァー・クロムウェルですよ」

「同じく、『閃光』のワルド」

——伝声を使うべきか。

だが相手はその隙を与えてくれないだろう。

クロムウェルはおぞましい装飾品を多数身に着けているが、メイジではないただの人間であるようにも見える。

一歩後ろに控える青年は違う。

『閃光』のワルド。

オールド・オスマン、『烈風』カリンなど強力なメイジを多数抱えるトリステイン王国でも五本の指に入る使い手。

若い世代ではカリスマ性もあり、将来を熱望されていたメイジだった。

——洗脳されていたか。

ワルドの瞳は昏い。

思えば戦場で結婚式を、と言い出すあたり違和感を覚えてはいたのだ。

バリーは決定的な確信をもてなかった自分を恥じた。

ワルドが一步前に出て、軍杖をすらりと抜き放った。

その姿は堂々たるもので一分の隙も見当たらぬ。

単純な魔法合戦ならバリーにも勝機は見いだせただろう。

しかしワルドは体術にも秀でる麒麟児とも呼ぶべき逸材だ。

後ろにジェームズ一世を庇った老メイジでは万に一つも勝ち目はない。

——どうすればいいのだ。

バリーの苦悩をよそにクロムウエルは朗々と語りだす。

「あなたたちは聖母様を倒し、一安心と思っっているでしょう」

両手を広げて一歩踏み出す。

ワルドもクロムウエルを人質に取られぬよう背中に庇いながら一歩踏み出す。

城内の燭台は十分な灯りと言えなかったが、クロムウエルの嬉々とした表情がわかる程度には明るい。

「しかし、非常に残念です。私がいる限り教団は何度でも蘇ります」

『閃光』が奔った。

「その一言が聴きたかった」

ぼとりと、クロムウエルの首が落ちた。

その眼は開き切り、自分の死を理解していないようだった。音もなく彼の背後から現れた白い仮面の男は変装を解く。

「ワルド子爵」

「陛下、無礼をお許してください」

片膝をついた青年の瞳は、狂気になど染められていない。  
立ち振る舞いは洗練されており、貴族として如何に彼が努力を重ねてきたかが伺える。

クロムウエルがこの上ないほど油断したところで遍在による暗殺。その早業はまさに『閃光』の二つ名に恥じないものだった。

「玉座の間を汚したことで陛下を欺いていたことを我が罪をお許してください。彼奴めが教団の核であることを確信するまで動くわけにはいかなかったのです」

「いいとも子爵、アルビオン国王として許そう」

ジェームズは鷹揚に頷いたが、杖からは手を離さなかった。

視線は猛禽類のように鋭くワルドを貫く。

心中をはかることができたのか、ようやく玉座から腰を上げた。  
バリーも杖を構えながらクロムウエルの首に近づく。

不思議なことに、胴体からも首からも赤黒い液体は流れ出ない。  
これはいよいよ人ではなかったか、とバリーは更に近づこうとした。

—— はははははははははは ——

玉座の間に冒瀉めいた嘲笑が響き渡る。

瞬時に三人は動いた。

ワルドはクロムウエルの体へ、バリーはワルドへ、ジェームズはクロムウエルの首へ杖を向ける。

そのままじりじりと互いの間を詰める。

ワルドから殺気を感じられないことからバリーはクロムウエルの首に注視する。

先ほどは開き切っていた瞳が穏やかなものになっている。

あつと叫び声をあげそうになった。

「子爵、君は重大な勘違いをしている。そもそも私は君の裏切りに気づいていたのだよ」

「……っ」

身体から分かれたはずのクロムウエルの口が動いている。  
どのような手段をもってかはわからないが、確かに彼は喋っている。

ワルドは喉元が詰まるような、言い知れないおぞましさを覚えていた。

クロムウエルはなおも続ける。

「様々な証拠があつた。特に決定的なのは君が正気を保っていたことだ」

「なぜ見逃した」

「意味がないからだよ。たとえ手心加えたライティング・クラウドで“ガンダールヴ”を生き延びさせようとね」

「ごくりと男三人は生唾を飲む。」

首だけで無様にも生き続ける男を前に具体的行動にうつれない。

「確かに教団は私がいなければ終わりだ、皆解散してしまうだろう」

「……ならば、我々始祖の血統が勝利したということだな」

ジェームズ一世はクロムウエルの目を睨んだ。

「ええ、そうでしょうね。ナイアルラトホテップ教団には勝利しました」

背筋が凍るような、ぞわりと気味の悪い感触が三人を襲った。

途轍もなく巨大な存在に、深淵から覗き込まれているような感覚。

「聖母様は別ですが」

「何を言うか！」

「母のペンダントは確かに貴様から最も強い邪神の気配を感じていた。ミス・ロシュフォールなど小娘にすぎん」

くつくつと不気味な笑いをクロムウエルはこぼす。

「それは模造品の輝くトラペゾヘドロンのせいでしょうね。我らの望みは聖母様の降臨、その一点に尽きる」

だがそのメアリーはすでに倒されたはずだ。

バリーの耳は確かに魔法斉射が直撃したことを聞き取っていた。

如何な魔物であろうともあれほどの攻撃を前に生き延びることは不可能。

さらに土煙が晴れた後、あの大地に一かけらの闇も存在しないことを確認した。

あの状態ではどうあっても……。

「偏在か!？」

メアリーは元々風のスクウェアだ。

始祖ブリミルの加護を受けているとは思えない相手が、まさか偏在という高位の風スペルを扱うとは予想もなかった。

だが、クロムウエルは首だけの姿でため息をついた。

「莫迦にしてくれるな」

瞳には怒り。

地獄の底で燃え盛るような黒々とした憤怒が浮かんでいる。

その迫力に三人は一步後ろにたじろいた。

「あの程度で我らが聖母様を討ち果たしたとは、獵犬に頭の中身を  
啜り取られたとしか思えませんな」

城門から叫び声が聞こえる。

それはさつきから変わらなかったが、違う。

さつきまでは確かに笑い声が、歌声が聞こえていたのだ。  
それが明らかに悲鳴に変わっている。

圧倒的な絶望と魂からの恐怖の絶叫に変質している。

「バリー殿！」

「陛下、この身は殿下の杖へ」

「うむ、この城が朕の墓標じゃ」

バリーとジェームズ一世は視線で長い付き合いをの別れを惜しんだ。

「陛下、お達者で」

「ウェールズを頼む」

「陛下、失礼します」

バリーとワルドは一礼すると窓から飛び降りて行った。

「さて……」

亡国の王は玉座に腰掛ける。

王杖を強く握りしめた。

クロムウエルの首はそれを見てただ嘲り笑っていた。

\*\*\*

目覚めは決して心地よいものではなかった。

「つぁ……」

才人は城を揺るがすような轟音で無理やり意識を覚醒させられる。  
続く地響きで起き抜けの頭は何が何やらわからなかった。

ともあれ固い地面の上、お月様が見下ろす中庭で才人は目を覚ました。

「つうく、なにが……」

その瞬間思い出した。

得体のしれない聖職者風の男を、裏切ったルイズの婚約者を。

そして自分を貫いたであろう雷撃の白い光を。

「あの髭野郎ッ！」

同時に考える。

——あれ、俺なんで生きてるんだ？

ワルドが本当に裏切り者なら才人を生かしておく理由はない。  
むしろ百害あって一利なしだ。

熟達した風メイジは離れた相手の心音をも聞き取る、とはルイズの付き添いで出たギトー先生の魔法の授業で学んでいる。

才人の主観で、ワルド子爵はいけすかない髭だったが風のスクウエアと言っていた。

——なら俺が生きていたことに気付いてたんじゃ？

ぶるんぶるんと頭を振る。

——いや、あの髭のことだから慢心してたに違いない。アイツはきつと敵だ。

とりあえず才人は先入観でそう決めつけた。

ひどい損傷もないパーカーについた草を払ってから立ち上がる。  
さてどうするんだっけ、と悩んだときワツと関の声が上がった。

『アルビオン万歳！ 始祖ブリミル万歳！』

——なんだかよくわかんないけどめでたそうだ。

この時ようやく才人は避難港を目指す、という目標を思い出した。  
ワルドの裏切りに続き雷撃を受けて気絶と精神的ショックを受けることが多すぎてつい忘れてしまったのだ。

「とりあえず行けばいいか」

——歓声があがっているなら人もたくさんいるに違いない。

それに喜んでそうだから危なくもないだろうし、誰かに髭野郎の裏切りを伝えないと。

詳しい道順は解らないが、才人は歩き出した。

未だニューカッスル城では多くのかかり火が灯されていたが、それが逆に強い陰影を生み出し不気味な印象を与える。

月明かりだけならばいつそ神々しく感じられただろう。

才人は柱の陰から幽霊でも出るのではないかと若干身構えながら笑い声の方へ向かう。

ここで剣の一本でもあればもう少し彼も堂々と歩けたかもしれない。

ルイズは才人に武器を買い与えなかった。

彼はアニメスやコルベールと理由も知らされず修行に励んでいるが、すべて木剣で行っている。

『その内あなたにしか扱えないものを授けるわ』

なんてルイズの言葉に、それなら仕方ない、と深く考えずに頷いた。

自分専用、なんと心に響く単語だろうか。

どんな漫画だって専用というのは大体強い。

才人はすごい装飾がついていて、一振りすれば風やら炎が飛び散るような剣を想像してみたが、ありえないかと否定した。

何より使いにくそうだ。

そんな彼女とのやり取りを思い返しながら心は明るく、実際には暗い城内をひたひたと歩く。

才人は気づいていない。

いくら笑い声を頼りにしているとはいえニューカッスル城は複雑

だ。

まっすぐ城門に出ることは、客人には難しい。

だというのに迷うことなくぐんぐん城門へ近づいている。

避難港を探して中庭に出てしまった時と同じように、自分の感覚を信じてひたすら足を進めていく。

角を曲がると長いトンネルの出口のように、外への通路が視界に入ってきた。

笑い声はそこから聞こえる。

やっとマトモな人に会えると安心感から先ほどまでの様子とは一転、スキップさえしそうなくらい上機嫌で才人は歩き出した。

城内の燭台なんかよりもかなり強い光が外から差し込んでいる。踊るように外へ出た才人が見たのは、大きな焚火だった。

「おや、君はラ・ヴァリエール嬢の」

「何があつたんですか？」

最後の晚餐の時に見た悲壮感是谁の顔にも浮かんでいない。

むしろ場末の居酒屋で喜んでいるようなおっさんばかりのようだと才人は感じた。

それもそのはず、城の前にいた敵は軒並み消え失せて、新たにやってきた有り得ないほど強大な敵を仕留めることに成功した。

一瞬でも気を抜けば正気を失いかねないほどの戦いを終え、今は生き延びた歓びを分かち合っていたのだ。

そこかしこで笑い声が飛び、アルビオンを讃える歌声が聞こえる。

「来た、見た、勝ったというヤツさ異国の客人よ！」

来たのは向こうからだったがな、と酒で顔を真っ赤にしたメイジは笑う。

——この人、確か晩飯の時今にも死にそうな顔してたよな。

普段は気弱なロバート・ハートも白ワインをがぶがぶ飲んでひたすらに喚いている。

現代日本でもこれほどたちの悪い酔っ払いは見たことがない。なるべくならお近づきになりたくない部類の人だ。

そんな才人の顔色を悟ったのか、金属製のワイングラスを片手に持つウェールズが部下のフォローを入れた。

「彼は限界まで集中していたのだ、許してやってくれ」

「そんな、とんでもないです」

慌てたように右手を顔の前で振ると、ウェールズはふつと笑った。サマになる笑顔だ。

顔を見合わせているのも変だと思い才人は周囲に目をやった。

焚火を中心に手をもによもよさせて踊っているものを筆頭に、みんなに笑顔が溢れている。

「アルビオンの危機は去ったということさ」

才人が目を留めたのは、袂れに挟れた地面だった。

何をすればこんな風になるのか、彼には分らない。

一部の地面が焚火の灯りと月明かりでキラキラと光を反射し、土中のケイ素が溶融したことを示していた。

そのすぐ傍には大きな大きなゴーレム。

光沢と色合いから青銅ではなく鉄、もしくは鋼のようで、ギーシユの戦乙女とは桁が違う。

高さだって二十メートル近くはありそうだ。

「すごい戦いだっ たんですね」

「ああ、だがこれからが本当の戦いだよ」

ウェールズははあ、とわざとらしくため息をついて見せたが表情は嬉しそうだ。

心底安堵しているに違いない。

ふと、ゴーレムを見上げていた才人の視界の端に何か映った。

——あれ？

黒髪の少女だ。

隕石が連続して落ちたかのようなクレーター地帯にいつのまにか佇んでいた。

後ろを向いていてその表情はわからず、また身にまとっている真っ黒なローブも見たことがないものだ。

身長はルイズと同じくらい、櫛を通して抵抗一つなさそうな漆黒の髪は長く腰まである。

服装と髪の色こそ違うが、才人は旅に同行した少女に似ていると思った。

ぞわぞわと背筋がざわめく。

例の“許せない気持ち”が湧き上がる。

「どうしたんだい？」

ウェールズが才人の視線を追う。

「は……」

爽やかな笑顔が凍った。

持っていた杯は重力に従い、ワインは空の地へ還った。

そこまで大きな音はしなかったが、宴に興じていたメイジはすべてウェールズに目を向けた。

そしてその視線をたどり理解した。

アレがいることを。

才人は震えが止まらない。

それは恐怖の震えだ。

人間である以上アレを打倒することはできない。

雲の上よりなお高い場所から見下ろす窮極にして最悪の存在、その片鱗だ。

それは激怒の震えだ。

これ以上アレをハルケギニアに存在させてはならない。

自らの命を投げ打つてでも倒さねばならない最悪にして窮極の存在、その片鱗だ。

矛盾を抱えた心は、才人から瞬き以外の一切の行動を奪った。

少女はゆっくりと振り返る。

「ロシュフォールさん……」

力ない才人の無意識下での呟き。

そこに込められていたのは絶望か、憐みか。

振り向いた顔は間違いなく彼女のものだっただった。

祝福を受けたかのように白い髪を、唾棄すべき常闇に染めた乙女だった。

右目は奇怪な毒薬のように青く、左目は人体に流れる血のように赤い。

誰も一言も発せない。

アルビオンの空気が変わった。

冷たさを伴いながらもどこか包み込むような優しさに溢れた風は、いまや体から熱を奪うためまわりつき命を締めようとしている。

今まさに始まるのだ。

滅びの宴が。

不意に闇の少女が微笑んだ。

才人にはそう認識できた。

「がつ！」

「ば、げふっ！」

それだけで百名もいたメイジの三割が膝をつき、あるいは血を吐き倒れ伏した。

白目を剥き痙攣するもの、口から泡を吹き気を失うものまでいる。尋常の事態ではない。

尋常の相手ではない。

ここでウェールズははじめて自分の体が硬直していたことに気付いた。

頭がくらくらする。

それでも薄く息を吸い、生きるために強靱な意志を乗せて叫ぶ。

「総員退避！！」

その声で咄嗟に動けた者はいなかった。

一拍置いてようやく動けた者も才人を含め三十名いなかった。

さらに五秒ほど立って残る者が四十名ほどが動き出そうとした。だが、遅すぎた。

黒の聖母は腕を振る。

蚊柱を払うように、力など一切込めた様子もなく右腕を振った。それだけで出遅れたすべての貴族が五十メートル近く離れた石造りの城に叩きつけられた。

「なんだと！」

「ありえんッ」

杖も持たず、詠唱もなく七十名もの人間を吹き飛ばす。

先住魔法を使っても優秀なエルフであろうとも不可能な業だ。

邪神の所業というに相応しい。

叩きつけられた人間は、全身から赤黒い液体をこぼし、城にめり込んだまま身動きひとつしない。

派手な音はしなかった。大半の者は、信じられぬと眼を見開いていた。

絶命しているのは傍目にも明らかだ。

冥闇を纏う少女から一定の距離をとることに成功していたものは、幸いにして無傷だった。

腕を振った瞬間感じたのは強い風、時折アルビオンを襲う嵐のよう荒々しい風だ。

対処する術などない。

「退避退避退避！　生き延びることだけを考えろ！」

ウェールズが必死に飛ばした号令に、貴族は背を向けず退避をはじめ。

そこに逆走する影があった。

才人だ。

「おおッ！」

彼は転がっていた杖剣を握り、左手のルーンを輝かせながら暗闇を従えた少女に突撃した。

右腕に切りかかるも刃がその肌を傷つけることはない。

一切の衝撃が吸収された、奇妙な感触。

漆黒を凝縮したような衣が蠢いていた。

「ちいっ！」

全力で後ろに跳ぶ。

ガンダールヴのルーンは身体能力向上をもたらす。

才人は素早く十メートル近くの距離をとった。

「逃げる！」

「無理です」

「なぜだ！」

ウェールズの叱責にも才人は冷静に、短く答える。

視線はメアリーから離さない。

それだけでも並みのメイジには不可能な、虚無の使い魔である証左だ。

才人がここに立っているのは完全な自分の意志ではない。

ガンダールヴのルーンが間違いなく影響している。

「ここで何とかしなきゃ、この星が」

彼女を包む漆黒の衣が内部で卵が産まれているかのように膨れ上がった。

「危ないじゃないですか！」

間をおかず放たれた幾条もの闇を才人は杖剣で払いのける。

物質面での干渉はできるようだ。

黒の触手は数が多い、海底で蠢くグロテスクな魔物のように才人を捕らえんとする。

小刻みに足を動かしながら、触れれば命を奪われるであろう漆黒の間を縫うように回避していく。

平賀才人は深く考えない。

ここで退いたら自分に良くてくれた気高くあろうとした少女や、優しかった厨房の人たち、少しだけ話した避難船の人々がどうなるか。

ただそれだけを考える。

自分が逃げれば彼らがどうなるかだけを考える。

退避命令が出ているにもかかわらず、すべての貴族はその姿から目を離すこともできず立ち尽くす。

父王と同じく、ウェールズは杖が鳴るほど強く握りしめた。

\*\*\*

平賀才人は剣を振る。

——なにやってんだ俺。

触手の動きは素早く、時にかわしきれないものもある。常人ならかすめただけでも狂気に触れかねないほどの瘴気を孕んでいる。

——異世界来て、ボコられて。

だが才人は正気を保っていた。思考はこれ以上ないほどクリアだ。

——女の子泣かせて、厨房手伝って。

鈍重な意識が研ぎ澄まされていく。

——城に呼ばれて、邪神のこと聞かされて。

身体が軽く、不思議な力に溢れてくる。

——髭にボコられて、変な空飛ぶ大陸に来て。

“ガンダールヴ”の力は今まさに羽化の時を迎えていた。

——一緒に旅した女の子と戦ってさ！

『ロシュフォール家の長女はかの邪神に連なる可能性が高いです。  
お気をつけて』

才人はメアリーのことをほとんど知らない。

だが彼は人の評価を、アンリエッタの言葉を鵜呑みにするような人間ではない。

確かに自分の心が叫ぶ“許せない気持ち”はあった。

『彼女は風のスクウェアと聞く。その力は必ず役に立つ、是非同行  
してもらうべきだ』

実際不気味な笑みを見せたときはシエスタを背にかばったこともある。

ワールドが連れてきて「大丈夫か？」と疑いもした。

でもこの旅路で少しだけ話をして、変人だけど悪人であるとは思えなかった。

少なくとも、人の運命で遊ぶような輩に弄ばれる筋合いはないと感じた。

「ふざけんなああああ!!」

その怒りは誰に向けたものか。

始祖か、ルイズか、不条理な現実か。

どれでもない。

理由もなくハルケギニアを蹂躪しようとする、ただ一人の女の子を玩んだ邪神に対してだ。

才人とガンダールヴの咆哮だ。

左手のルーンがいよいよ輝きを増す。

軌道を逸らすしかできなかったはずの杖剣は、光閉ざされた夜を煮詰めても及ばぬほどの闇を切り裂いた。

暴れ狂う狂気の鞭に、一步も引かぬと瞳をギラギラ輝かせて才人は杖剣を振るう。

それどころかじりじりと歩を進め恐るべき存在を倒そうと近づいていく。

彼我の距離はおおよそ五メートル、達人ならば一息に詰められる間合いだ。

ウェールズは英雄譚となるべき戦闘をこの目にしていると感じた。しかし才人が鬼神の如き強さを発揮しても手数が違いすぎる。

このままではいずれ斃れてしまっただろう。

「エア・カッター!」

その時、一閃の風が闇を切り裂いた。  
ロバートが顔を青ざめさせながら、才人を狙う黒闇を狙い打ったのだ。

「アルビオン万歳！」

若い貴族は叫ぶ。

先ほどの歓びに満ちたものではない。  
それでも、その場にいたすべてのものに希望を、今なすべきことを思い起こさせる決定的な声だった。

「彼を援護しろ！ あの怪物をアルビオンから出してはならん！」  
「アイ・サー！ アルビオン万歳！！」

ウェールズの命令にすべての兵が声を張り上げる。

それから城門での焼き直しになった。

炎、氷、雷、風、土、水。

密度は比べ物にならないほど薄かったが、今の彼らには圧倒的な恐怖ではなく、微かな希望が見えていた。

一人の英雄がこの世を闇に閉ざそうとする邪神を打倒せんとしている。

彼らはその補助に過ぎない。

だが、ともに英雄譚を築き上げようとしているのだ。

鼠の一步のように小さく、亀の歩みのように遅く。

それでも才人はメアリーに迫っていた。

すでにその距離は三マイル程になっている。

「ッづあー！」

才人の隙を突き一本の太もを傷つける。  
それは均衡を崩す一撃であり、才人の退路を塞ぐ一撃でもあった。  
動きが鈍る。  
触手が殺到する。

——くそッ！

口にする間もなく漆黒は才人を貫くだろう。  
ぐつと歯を食いしばって目をつぶる。  
予想していた痛みは来なかった。

「やれやれ、間一髪か」

「殿下、お待たせしました」

マントを翻して伊達男が才人の前に立つ。

『閃光』の二つ名を持つ風スクウェア、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ。

「てめー！」

「早く立てー！」

ワルドはブレイドで迫る暗黒を払っていく。  
才人のように切断とまでではない。

「ふっ」

が、軽く息を吐いて集中すると邪悪の権化が切り落とされる。  
体勢を立て直した才人も痛みを忘れたように獅子奮迅の働きを見せる。

傷つく前よりもその剣技は冴え、左手のルーンはより強く輝いていた。

その光景をウェールズは信じられぬ思いで見つめていた。

——英雄が二人、勝てぬはずもない。

「たたみかけよ！」

『アルビオン万歳！』

ウェールズ自身もあとのことを考えず、ありったけの精神力を注ぎ込む。

民の怒りを、大地の怒りを、始祖の怒りを受けよと全力で魔法を放つ。

才人は不思議な高揚感を覚えていた。

相変わらず歩みは遅い。

だというのに何も心配いらぬ。

隣に立つこの嫌味ったらしい子爵がこの上なく頼もしい。

二人揃えば何者にも負けない、そんな自信を得られるほどに。

一方のワルドも心地よいリズムに酔っていた。

ガンダールヴはラ・ロシエールで試したときなんかよりもよっぽど強くなっている。

クロムウェルと対峙していたときの不気味さなぞなんのその。

殿下を連れて逃走することも、一秒も早い退避も必要ない。

雨のように降り注ぐ攻撃に一步も引かず、すべて斬り捌いていく。二人揃えば恐れるものはない、そんな確信を得られるほどに。

そして演武は終わりを告げる。

間合いを一メールにおさめた才人の杖剣はメアリーの右腕を切り

飛ばし、ワルドのブレイドは彼女の心臓を貫いた。

「あ……」

か細い少女の声に、才人の胸は痛んだ。

ワルドは心臓に突き立てた杖を右に振り切る。

羽が落ちるように音もなく、黒髪の少女は大地に倒れた。

熱狂に満ち満ちていた空間に、しんと静寂が落ちる。

聞こえるのは英雄たちの激しい呼吸音だけ。

一陣の風が吹き抜けた。

「は、はは」

ロバートが笑う。

生き残った皆は顔を見合わせた。

ワルドはまだブレイドを解かない。

じっと倒れた聖母を見つめている。

才人は自分の手に残った、人の腕を斬った感触に震えていた。

ウェールズが右手を夜空に突き上げた。

「アルビオン万歳！ 始祖ブリミル万歳！！」

誰もが答える。

『アルビオン万歳！ 始祖ブリミル万歳！！』

ようやくワルドも杖をしまう。

才人はふらふらと歩き、ぱったりと背中から倒れ込んだ。  
月明かりがヤケに眩しかった。

——右腕とは言え人斬っちまった。てか殺したも同然か……。

自分がもう何か違う存在になってしまったのではないか。  
そんな思いが才人の涙腺を刺激した。

仰向けに倒れた才人の隣にどかっとうルドが片膝を立てて座った。

「ライトニング・クラウドの件はすまないね」

「痛かったよ、ぜってーゆるさねえ」

「杖を並べて戦った戦友だろう？ 笑って許すのが礼儀さ」

ははは、とうルドは笑う。

ウェールズもそうだがどうしてこうハルケギニア貴族は軽い笑いが似合うのか、才人は考える。

自分がそんな笑いをしても全然似合わないということしかわからなかった。

「死体を焼け、今度こそ影の一欠けらも残すな」  
「はっ」

三名のメイジが倒れた彼女に近づいた。  
人が火葬される。

そんな光景を見たくなくて才人は隣のルドを見た。

「あんた、裏切ってなかったんだな」

「密偵というヤツさ。それにアレらは母の仇だ」

それも終わったが、と寂しげに呟く。

新たに生まれた炎がその横顔を照らした。  
パチンと火が爆ぜる。

それは唐突な出来事だった。  
身体を一刀両断にされたかのような、凄まじい悪寒が才人を襲った。

「逃げるッ！」

何故、どこに、どうやって。

そんな疑問お構いなしに才人は叫びながら杖剣を構える。  
新たに生まれた焚火、メアリーの体に向かってだ。  
ワルドも咄嗟に立ち上がり杖を構える。

彼女を焼いていた三名は反応できなかった。  
悲鳴ひとつあげず、突如現れた浄化の炎すらかき消す冥闇に飲み込まれた。

「あ……」

降臨したのは、三メートル程度の不可思議な獣だった。

馬をはじめとし、地上に存在する尋常の生物は偶数本の足を持っている。

幻獣や、虫の類であつてもそれは例外ではない。

だというのにそれは三本脚だった。

二本の脚に肥大化した尻尾というわけではなく、直線でつなげば三角錐となるような真実三本脚だった。

いずれの脚にも蹄らしきものがついている。

大地をあまねく照らす始祖の恩恵をも犯さんとする名状し難い色の体。

均質でなく、ありとあらゆる背徳がその肌にひしめいている。

長い腕に指は三本、顔と思しきところは杳として知れず計り知れぬおぞましさのみが立つ。

頭にはメアリーの長髪が固まったような、長い奇妙な生物の触手めいたものを一本ぶら下げていた。

「つ、月に……」

ウェールズは端正な顔を真っ青にした。

彼は知っている。

この姿はかの邪神がとる姿だ。

思えばあの少女は一度たりとも積極的攻勢には出なかった。迎撃に徹していた。

つまり、この瞬間まで、彼らは遊ばれていたことになる。

筆舌に尽くせぬ、この世ならざる雄叫びがアルビオンを揺るがした。

\*\*\*

「おーがんばるなー」

名もなき魂が消えた空間、褐色の肌を持つ少年は感心したようなため息をついた。

「影の影の影くらいだから、千那由多分の一くらい？ もっと低い  
か」

視線には歪んだ空間の先、そこからは激戦を終えたニューカッスル城が見える。

「でもなんであの程度で倒したなんて思えるんだろ」

三本脚の獣が城のそばで生まれた。

「しかし、元人間のくせにブリミルとやらもがんばるなあ。意味ないのに」

あ、もともと意味なんていらなくと呟いて、再び少年はフルートを吹きはじめる。

\*\*\*

「ミス・ヴァリエール。いかがなされました？」

「三人がいないの」

避難船が出発してしばらくのこと、ピンクブロンドの髪をなびかせてルイズは早足で隅々まで見て回った。

厨房から倉庫まで、何度も同じところを探しまわった。

それでも彼女の求める人たちはいない。

才人、ワルド、メアリーの三名だ。

「私は見ていません」

「わ、わたしも知りません」

表面上はいつも通りの顔をしたミス・ロングビルも、うつすらと恐怖しているようなティファニアも彼らを見かけていなかった。

——サイトどこ行つたのよ、まさか乗り遅れて今もニューカッスル城なんてことは……。

グリフォンがいるワルドはまだしも、ガンダールヴとはいえ平民の彼には脱出手段がない。

それにそのワルドも様子がどこかおかしかった。

さらに言えば、メアリー・スー。

彼女の存在が重く影を落としている。

『ロシユフォール家の長女はかの邪神に連なる可能性が高いです。お氣をつけて』

どの深度までかかわっているか、という重要な情報がない以上判断しにくい。

だが虚無の担い手見習いとして、ルイズは嫌な予感に包まれていた。

「ティファニア様！ “伝声”によるとアルビオン軍が二度にわたリ敵を撃破！ ウェールズ殿下ジエームズ陛下御健在とのことです！」

「え、よかった……」

駆け寄ってきた伝令の報告にティファニアは安堵の涙をぼろぼろこぼしてしまう。

マチルダはティファニアの肩を抱いて背中をさすってやる。

喜ぶべき勝利の報告だ。

だというのにルイズの不安感は消えない。

むしろ大きくなっている。

不意にルイズの視界が滲んだ。

涙などではなく、左目の視界がぼやけている。

「あれ」

「ミス・ヴァリエール？」

ルイズはハンカチで瞼をこすった。

何度が瞬きしてみるも変わらない、だんだんはつきりとした視界になっていく。

ワルドの姿が目に入った。

ここにいないはずの姿に、ルイズはある意味納得した。  
感覚共有だ。

同時に浮かぶ疑問、なぜ今なのか。

その時だった。

この世全ての生物を呪わんとする絶叫が轟いたのは、  
ばたばたと避難船の人々が倒れていく。

意識を保っているのはメイジだけだ。

さらにルイズは、信じられない光景を目にした。

「月に吼えるもの……」

無理だ。

勝てっこない。

今の彼らではどうあがいてもアレを打破できない。

「“伝声”で伝えて、殿下たちに逃げてって伝えて！」

ルイズの泣き叫ぶような声に兵たちは反応できない。  
何が起きたのかもわからないのだ。

「はやくして！」

「はっ！」

船の上とはいえトリステイン大使、ましてや公爵家の三女だ。  
一瞬悩んだ兵はすぐに詠唱する。

「ダメです、通じません！」

今度の悲鳴じみた声はその兵からだった。

「魔法は発動してます、まるで世界から切り離されたみたいに通じません！」

「なんてこと……」

ぐらりと倒れかけたティファニアをマチルダが支える。

——どうすればいい。どうすればいいのよ！

ルイズは必死に考える。

勝機がない、それこそアリがマンティコアに挑むようなものだ。  
ウェールズ、才人、この二人はなんとしてでも救い出さなければ  
ならない。

王家の血を色濃く継いだウェールズは、これからのハルケギニア  
を覆う闇に抗するためなくてはならない存在だ。

それに、才人はルイズが無理やり異なる星から引っ張ってきた客  
人だ。

ガンダールヴに選ばれたけど、ただの男の子だ。

巻き込んだ自分が死ぬのはいい。  
けれど彼が、涙すら包み込んで優しく抱きしめてくれた少年が死ぬのは、ルイズには耐えられない。

——始祖ブリミルよ、天啓を！

果たして、祈りは届いた。  
唯一の解法をルイズは得る。

「ミス・モード、サモン・サーヴァントをお願いします」

「……え？」

「召喚のゲートなら、うまくすれば生き残りを脱出させられます！」

黒髪の少年、平賀才人はガンダールヴだ。

ならばその前に最後のゲートが現れるのは必然。

一か八かの賭けになる。

始祖が祈りに応えてくれることを願うしかない。

「早く！ あなたが殿下を救うのです！」

「！」

ティファニアの長い耳が揺れた。

マチルダは何も言わない、ただ姉のような眼差しで彼女を見守る。

ハーフェルフの少女は一度目を閉じ、深呼吸した。

「わかりました、やります」

開かれた瞳に、もはや怯えはなかった。

\*\*\*

「なんだよコイツは！」

「僕に、聞くなッ」

双月への咆哮は、ギリギリのところでもちこたえていた人間の正気を軒並み刈り取った。

死ねた者はまだマシで、今も地面の上を無様に悶えている者も多い。

その瞳はもう何も映さない。昏い狂気しかない。

「これで、最後とッ！ 願いたいね！」

人知の及ばぬ狂敵と三連戦、すでにウェールズ精神力は限界だった。

立ち上がり、相手に対峙しているのはもう十名しかない。

三本脚の生き物はメアリーと違い直接的な攻撃しか行わない。

その長い腕を振り回すか、脚で踏み砕くか、はたまた蹴り飛ばすか。

先ほどの常識はずれな手数多さはなく、回避もまだ容易かった。にもかかわらず状況は絶望的だった。

「これ、効いてんのか！？」

「本人に、聞いてくれッ」

幾度となく魔法を浴びせても反応ひとつ返さないのだ。

それどころか才人とワールドが斬りかかって也容易く貫通する、だが切断はされない。

相手の攻撃は確かに大地を砕いているのにこちらからは一切干渉できない。

幽霊よりも底知れない相手だ。

——これは、勝てないな。逃がしてもくれなさそうだが。

この場にいるものは、大体がそう考えていた。

才人とワルドは接近戦から十メートル近く距離を取る。

相手は何を思っているのか、顔らしき部分で月を見上げている。

「あのさ、顔っぱいの、あやしいよな」

「そこしか、あるまい」

肩で息をしている二人の勇者はお互いの顔を見ることなく不敵に笑う。

いざ、と踏み出して斬りかかるも手ごたえはない。

この剣舞の中、隙を見つけねばならない。

高さ三メートルの的を攻撃できるくらいの刹那を。

だが才人も疲労がたまっている。

攻撃の余波で袂れ飛ぶ岩石にあたり、ごろごろと壁際まで転がってしまふ。

そして致命的な隙を、敵に背中を晒してしまふ。

——ヤバい！

その時のことだ。

「へ」

音もなく銀のゲートが才人の前に現れた。  
表情もわからぬ獣が嘲笑った気がした。

この鏡のような物体が何なのか、わからない程愚鈍なものはこの場に生きていない。

誰かが使い魔を召喚しようとしている、それもガンダールヴを。  
今ハルケギニアでガンダールヴを召喚できるのは一人しかいない。  
最後の虚無、ティファニア・モードだ。

「ゲートを守れええええ！！！」

ウェールズは絶叫した。

それに呼応するかのように獣は進撃を開始する。

銀のゲートを目指して、虚無の担い手を始末するために。

次々と生き残りの貴族がブレイドを唱えて獣に斬りかかった。  
あるものは薙ぎ払われ、またあるものは踏みつぶされた。

数合持ちこたえるものもいれば瞬時に蹂躪されるものもいた。  
だが誰もが奮い立ち挑みかかっていく。

このゲートはまさにハルケギニアだ。

これをくぐらせれば、世界は闇に包まれる。

才人も向き直り杖剣を大上段に構える。

彼は剣術に詳しくない。

ただ大きな相手だからと剣を上にも構えたただけだ。

「君はそつちだ」

「え……」

トン、と軽く腹を蹴られた。

才人には見せたことのない優しげなワルドの微笑み。

「この星を頼む」

「そんな！」

才人の体はずぶずぶとゲートに吸い込まれていく。

ワルドは素早くペンダントを引きちぎり、ゲートに投げ込んだ。

「御無礼！」

「げはっ！？」

ロバートも追隨してウェールズにエア・ハンマーをぶつける。  
そして二人を飲み込み、銀のゲートは宙に溶けた。

場に残されたのはロバートとバリー老、そしてワルド。  
いずれ劣らぬ風のメイジ、アルビオンの最期を飾るにはふさわしい。  
い。

「未来は殿下と少年に託した。逃げる精神力もない」

「往きましようか」

「ええ、始祖ブリミル万歳！」

三人は笑ってブレイドを唱える。

敵に背を見せない、真の貴族の姿がそこにあった。

\*\*\*

「さて、終わりが来たようですな」

「ああ、だがアルビオンは滅びぬ。ティファニアがまだいる」

「愚かな。聖母様がおられる限りハルケギニアに未来はない」

「そうでもないさ」

クロムウェルに対して、ジェームズ一世は穏やかに笑う。

「六千年も我らが祖先は凌いできたのだ。これからもできる」

「……希望的観測はとめませんがね」

「では、お別れだ」

「我らが神のみもとで歓迎しましょう」

「断る、朕が向かうのは始祖ブリミルの下よ」

杖を一振り、唱えるは「発火」。

ニューカッスル城は白光に包まれ、轟音と共にこの世界から姿を消した。

\*\*\*

才人とウェールズは避難船の甲板に重なって倒れ込んだ。

素早く立ち上がるうとしたが二人とも満身創痍で体が言うことを聞かない。

特に才人は武器を手放しており、ガンダールヴのルーンが働いていない。

激烈な痛みに絶叫しそうになった。

「お兄様！」

「殿下、ご無事で何よりです」

「ここは」

「避難船の上でございます」

ティファニアがウェールズを助け起こし、ルイズは才人を壁にもたれさせた。

「サイト、ワルド様とメアリーは？」

その言葉に才人は何も返せない。  
自分が倒れこんだ場所にあったペンダントが目に入る。

その時爆音が轟いた。

ニューカッスル城を赤々と炎が包んでいた。

「父上……」

ウェールズの眩きが風にとけた。

ティファニアは従兄弟の胸に飛び込み嗚咽を漏らした。  
すべてを察したのか、ルイズは唇を強く噛む。

「くっそ、ちくしょう……」

怒りと悲しみと悔しさの入り混じった涙が、少年の頬を濡らした。

この日より、ハルケギニアに月亡き夜よりも昏い時代が訪れる。

## メアリー・スーに祝福を（後書き）

というわけで第一部「メアリー・スーに祝福を」終了です。

最後の二話が読んで非常にきつかったと思います、お疲れ様です。ブラックとして書いたものを Arcadia 様のチラ裏に投稿して、自分で読み返して「後味悪すぎだろコレ」と思って前後逆転。すると一転コメディ調に、反響が大きくて驚きました。そして一発ネタのつもりを急遽続きものにしました。

この第一部エンディングを思いついたのもサイト・ヒラガに祝福をあたり、いきあたりばったりです。

少し期間をおいて第二部「始祖ブリミルの祝福を」をはじめます。ラスボス化したメアリーとハルケギニアとの大戦です。

今までのラブコメディが好きだった人は、残念ですが全く作風が変わります。

救いようがないほど絶望的シリアスです。またダーレス的にもなります。

また世界観融合でオリ設定の大安売り、そういうのが無理な人は読まない方がいいかと思います。

最終話で疲れたーという人は各種一発ネタや「空に挑む」「トリス・タニア納涼祭」で心を休めてください。

このままではあまりに救いがないので、If 短編をあげておきます。触りだけですが、もしメアリーが邪神に弄ばれなければどうなったかという短編です。

## Ⅰf 編 ジョン・フェルトンに幸福を

ジョン・フェルトンに幸福を

A・D・6088

この日記帳には我が娘のことのみを記す。

今日は非常にめでたい日だ。

我がロシュフォール家に初めての子供が生まれたのだ。

可愛らしい女の子だ。

名前はメアリー・スー。

口元は私に似ており、目元が妻に似ている。

妻も意識ははっきりしており、経過は順調だ。

それに昨夜夢の中で始祖ブリミルが現れた。

この子は間違いなく素晴らしい子どもに成長する！

＊＊

メアリーに髪が生えはじめた。

アルビオンに連なる峰々、その頂上にかかる雪のように白い。

ハルケギニアでは非常に珍しい髪の色だ。

すでに目も開いており順調に育っている。

ただ、青い瞳と白い髪、そして異常とを感じるまでの肌の白さ。

親としては少し不安だ。

それにメアリーは普通の赤子と比べてあまり泣かないようだ。

手がかからないのは良いことだ、と妻は言っているが元気に育ってくれるか。

定期的に医者に見せた方が良いかもしれない。

＊＊

メアリーが寝返りをうつた。

もうしばらくすればハイハイもできるようになる、とは乳母の言葉だ。

それ自体はめでたいことだ。

しかし私は奇妙なことに気付いた。

寝返りをうつたとき、メアリーの左目が赤くなったような気がしたのだ。

ひよっとしたらメアリーは月目なのかもしれない。

少し注意して様子を見よう。

＊＊

間違いない、やはりメアリーは月目だ。

ハイハイをした記念すべき日なのだが素直に喜ぶことはできない。

メアリーは激しい動きをするとき左目が赤くなるようだ。

通常の月目は常に色が違うと聞く。

これは異常なことではないだろうか。

アカデミーの連中やロマリアの坊主どもに見つかってしまったのは危険だ。

後で妻に相談しなければならぬ。

＊＊

記念すべき日だ！

メアリーがはじめて喋った！！

たどたどしい言葉ではあったが確かに「パパ」「ママ」といった。

この歡びは文章にあらわせない。

使用人たちには特別に上等なワインを振舞ってやろう。

メアリーがあまり泣かないものだから言葉に障害があるのかも、と一人悩んでいたのだ。

今日はよく眠れそうだ。

＊＊

メアリーの声は天使のようだ。

素晴らしい、あの声を一日中だって聞いていたい。

まだ意味の通ることはあまりしゃべらない。

この時期の言葉はそういうものだ、と乳母は言うので心配ないだろう。

私が笑いかければあの子は愛らしい笑顔を返してくれる。

月目に関しては個人的によくしている司祭に相談した方が良くかもしれない。

＊＊

メアリーが生まれて一年と少しがたった。

すでに屋敷の中を歩き回れるようになり、運動面では問題ないようだ。

メアリーはよく喋る。

人がいるところでも、いないところでもおかまいなしに喋っている。意味が通っていることも時折喋るようになってきた。

司祭に相談すると「祝福の子」かもしれないという助言をくれた。

ふとした拍子に月目と変じるのはその証左だというのだ。

一度ロマリアに連れて行った方がいいかもしれない。

＊＊

メアリーがマトモに喋れるようになった。

喜ばしいことだ、と諸手をあげて喜んでしまう。

メイドに見られた、誰にも言わないよう念押ししておく。

私たち夫婦は始祖ブリミルの恩恵を一身に受けているに違いない。

メアリーの誕生以来の子供を妻は授かった。

きつと一年後にはこの日記もさらに歓びに満ちるだろう。

＊＊

あれから一年がたった。

長男はゲイリー・スーと名付けた。

姉弟で似た名をつけたのは仲良くあつてほしいという願いからだ。

メアリーは流暢に喋るようにはなった。

女の子らしい控えめな言葉で、見ているだけで微笑んでしまう。

メアリーは始祖が遣わした子に違いない。

読書が好きな彼女のために大きな聖堂付きの図書室を建てよう。

始祖ブリミル様、どうか我が娘をメアリーをお見守りください。

妻と二人で日々祈っています、繁栄を賜るようお願いします。

\*\*\*

来るものが来たか、という思いだった。

五歳の誕生日、メアリーが魔法の練習を願い出てきたのだ。

予想をしていなかったわけではない。

しかし、こういつてはなんだがまだ早いような気がするのだ。

メアリーは確かに賢い子だが、魔法というのは危険な一面もある。

言い含めると意外なまでに素直な様子だった。

図書館も完成した。

聖像も枢機卿が祝福を施した聖なる銀を元に素晴らしいものを用意した。

メアリーは大喜びだった。

妻もその姿を嬉しそうに見守っていた。

その内家族でロマリア旅行もいいかもしれない。

＊＊

メアリーは図書館にこもりつきりだ。

これではいかん、と私も妻も積極的に遠乗りに入れて行っている。

あまりに室内にこもりすぎるとよくない、と昔の本に書いてあったのだ。

六歳の誕生日、メアリーは再び魔法練習を願い出た。

正直な話、まだ教えたくはない。

だがこの前妻に「貴方が過保護なだけです」と叱られたので今日から魔法を教えた。

メアリーはその愛らしい瞳をキラキラ輝かせて楽しそうに学んでいる。

妻の方が正しかったようだ。

白すぎる肌、白い髪、赤い瞳と神秘的な外見は今でも始祖が遣わされたようにしか見えない。

来月知り合いの司祭のツテを訪ねると同時にロマリア観光にいく。

＊＊

七歳の誕生日、メアリーはなんとラインに到達した。

素晴らしい、まさに祝福の子だ。

ロマリアでも「この子はまさに祝福を授かっている」と枢機卿のお墨付きを頂いた。

ゲイリーも健やかに育っている。

メアリーの代でロシュフォール家はこれ以上ない発展を遂げるだろう。

＊＊

気が付けばメアリーが生まれて十四年がたつ。

本来ならば魔法学院にいれなければならない。

だが私は入れたくない。

メアリーはあつという間に親である私を抜いてトライアングルになったのだ。

魔法学院の生徒は良くてライン、トライアングルなど数えるほどもない。

やつかみからイジメの対象にならないかと不安なのだ。

するとまた妻が「貴方は過保護すぎます」と言ってきた。

これくらい普通だと思っただが。

妻は嫁入り相手も探さねば、というがそんなことはできない。

あんな可愛い娘を嫁になどやるものか！

今私はオールド・オスマンに手紙を書いている。

今までにあったことをすべて余さず記した。

もしメアリーが虐められるようなことがあればどうなるか覚えておけ、という内容だ。

いざとなれば学院まで怒鳴り込んでやろう。

始祖ブリミル様、なにとぞメアリーのことをお願い申し上げます。

我が娘、メアリー・スーに祝福を。



## 動乱のはじまりを

アルビオンの激戦から避難船、イーグル号は無事脱出してラ・ロシエールに漂着した。

異形の咆哮は凄まじく、一人残らず平民の意識を刈り取っていた。メイジが全力で仕事に取り掛からなければ墜落していたに違いない。

到着後すぐにルイズは竜籠を呼び寄せ、トリスタニアに直行した。乗せるのはウェールズ、ティファニア、才人と彼女の四人だけ。マチルダは残って平民の介抱やアルビオン亡命政府として何をすべきか、という方針をあらかじめウェールズに同行させる予定だった若き家臣団とたてている。

馬車が確保できればすぐ王宮に向かうとだけ告げて彼女はフネに戻っていった。

竜籠に乗って、才人にはそこから先の記憶がない。

疲れ果てて深い眠りに落ちてしまったのだ。

ルイズもウェールズもそんな彼を無理に起こそうとはしなかった。ウェールズは彼の活躍を目にしていたため、ルイズもティファニアも直接見たわけではないが、彼が人智を超えた戦いに身を置いていたことをわかっている。

今はただ英雄に休息を、という思いで子どものように眠る彼を見守っていた。

次に才人が気づいたのは魔法学院に着いてから。

やわらかな日差し、近づく夏の薫を運ぶ風、楽しげな喧騒、のどかな日常の光景に才人はそれだけで涙がこぼれた。

しかし、同時に激しい動揺にも襲われる。

メアリーが、一人の女子生徒が行方知れずとなっているにもかかわらず、変わらない同級生たち。

あたかも彼女が最初からいなかったように振舞っているそれほどこか作り物めいていて、彼がいなくなつた高校のことを連想させ、とてもではないが平静を保てなくなつた。

それから、才人は鍛錬に励むでもなく、厨房を手伝うでもなく、ぼんやりと抜け殻のように時を過ごした。

彼とよく喋っていたシエスタはじめ、誰が話しかけてもどこか気のない返事をかえすだけ。

ルイズは彼にニューカッスル城で何があつたかを決して聴こうとはしなかった。

ウェールズからすべてを聴いていたこともあるし、目の前で戦友を失つた彼の悲しみを慮ることがかなわないということもある。

たまに小さな勇気をかき集めてルイズが話しかけても上の空で口くな返事もしない。

ルイズもルイズで亡くした婚約者のことで整理がついていない。

ワルドに対して抱いていたこの気持ちが憧れだったのか、恋心だったのか。

それも今ではわからない。

握りしめたワルドのペンダントは何も教えてくれない。

死者に向けるべき心が、幼い彼女には想像できなかった。

アルビオンに行く前は、二人で夜の会話をゆつたりと楽しむこともできていた。

それが今やほとんど沈黙を保つた関係。

そんな、同室にありながら他人のような距離感で、才人とルイズは時の流れに身をゆだねていた。

互いに時間を必要としていた。

――動乱のはじまりを――

「諸国会議？」

「ええ、サイトにも出てもらわないといけないの。むしろあなたが来ないとはじまらないわ」

三日間、才人がようやくマトモに動けるようになったのはそれからだ。

疲労や肉体的な損傷のせいもあったが、精神的にやられていたせいで回復に時間がかかっていたのだ。

「それってトリスタニアで？」

「違う」

彼の復活を待っていたように飛び込んできた会議の知らせは、入り口でじっと待っている青髪の少女、タバサがもってきたものだ。人形めいた、どこか無機質な瞳に射抜かれて才人はたじろいた。

「は、はじめまして」

「……はじめまして」

ペコリと才人が一礼すればタバサも軽く頭を下げる。

「なにやってんのよ」

「いや、なにってあいさつかな？」

「挨拶」

ルイズに視線をうつさずタバサは答える。

すぐに沈んでしまったが、その眼に小さな好奇心と期待感、極々わずかな敵意が浮かんでいたのにルイズは気づいた。

「サイトに何か用？」

「別に」

素っ気ない返事だが、視線はしっかり固定されている。

ルイズからすれば何か用があるようにしか見えない。

才人はなんとなくひらひらと手を振った。

タバサも無表情のまま、杖を抱えていない左手でぱたぱた返した。ルイズは常の彼女をちよっとだけ知っている。

こんな誰かの仕草を真似ることはしなかったはずだ。ためにルイズも手を振ってみる。

「……」

「どうしたんだルイズ？」

タバサは何も反応しない。

じっと才人を見つめている。

その視線に気づいた才人が人差し指で頬をかけば、彼女もそれにならった。

まるで親の行動をなぞる子どもみたいだ、とルイズは思う。

「仲いいわねあんたら……」

「そ、そんなことないぞ？」  
「そんなことない」

才人が返せばタバサもすぐそれに追随する。  
ピクリとルイズの心がうずく。

「へえ、そうなの、ふうん、そう」

「ホントどうしたんだよルイズ」

「別に、ご主人さまそっちのけですいぶんと仲が良いなあって思っただけよ」

「やきもちやき」

「違うわよ！」

ルイズは反論したが、タバサの指摘は正しかった。

この三日間ほとんど会話をしていない使い魔と、初対面の少女が仲良さそうに見えたのが気に入らなかったただけだ。

ほんのささやかな、才人を召喚したのは自分だという幼い独占心のあらわれにすぎない。

「サイトが変なことから話がこじれたじゃない」  
「俺かよ！？」

ちくつと使い魔に文句を言う。

才人から帰ってきた言葉がアルビオンに行く前のような生き生きとしたもので、ルイズはそれに少し安心した。

「それよりもその諸国会議だっけ、どこでやるの？」

「そうだわ、リュティスまでどうやって行くのよ。竜籠でも呼んでるの？」

「わたしの使い魔に乗っていく」

タバサが窓を指させば、遠くで青い竜が気持ちよさそうに空を舞っている。

イルカのような鳴き声が聞こえた。

「キュルケを連れてくるからそれまでに支度して」  
「ツエルプストーを？」

実家がお隣の、お世辞にも仲が良いとは言えない女子生徒の名前にルイズは眉をひそめた。

「なんでツエルプストーが諸国会議に出るのよ」  
「諸国会議は関係ない」  
「じゃあなんでよ」

部屋から出て行こうとしたタバサはくるとルイズに向きなおり、言った。

「ここは、彼女にとって危ない」  
「なにそれ？」

答えることなく、青髪の少女は退室する。

「つえ、ツエルなんとかって？」  
「ゲルマニアの留学生よ。派手でイヤな奴」  
「はあ」

あれ、と才人は首をかしげた。  
ルイズは良い子だ、理由もなく他人を貶めるようなことは言わない。

「平民貴族は平時に効率的なのは認めるけど、ゲルマニアは先のことと考えてないわ。始祖ブリミルを軽んじるにもほどがある……！」

ギリギリと歯ぎしりしてルイズはすごい形相だ。

なにか事情があるのかしら、と考えていると当の本人がやってきた。

「ハアイ、邪魔するわよ」

褐色の肌が健康的な長身の美女だ。

胸元なんてルイズや隣に立つタバサとは比べ物にならない。

——確かに派手な感じはするけど。

ルイズの同級生が放つバカにするような、嫌味な雰囲気は一切感じない。

「邪魔だから帰って」

「つれないわね、ヴァリエール」

それどころか気安そうにルイズにしなだれかかってみたり。

「そんなツンケンしないの、部屋も領地もお隣じゃない」

「部屋がお隣だからこの程度ですませてやってるっていうのに！」

ぎゃーぎゃーわーわーと騒ぎ出す始末だ。

才人はこっそりタバサの傍に近寄って聞いてみる。

「……なんか、仲いいな」

「お互い照れ屋だから」

なるほどと合点した瞬間、二人がぱつと振り向いた。

『違うわよ!』

重なった声にお互い顔を見合わせて、悔しいやら腹立ちやらごちやごちやとした感情を顔に浮かべた。

「なかよし」

タバサは一人満足げ。

——この子は将来大物になりそうだ。

見た目幼い彼女は二人の横を通り抜け、窓を開け放つ。

甲高い口笛の音が響き渡り、遠くで遊ぶように飛んでいた風竜がやってきた。

「乗って」

少し強制力を込めたその言葉に三人は大人しく従う。

才人は手ぶら、大きな荷物は何もない。

ルイズもキュルケも少し大きな革力バンにおさまるくらいしか持つてこなかった。

「荷物それだけ？」

「ええ、何日も向こうにはいないし、風竜で移動ってことは急ぐんでしょ？」

タバサは振り返らずコクリと頷いた。

「ところで、なんであたしを呼んだのよ」

「友達だから、危険なところにはおいていけないわ」

キュルケの問いかけに、彼女は少しだけ長めに返す。

微熱の二つ名を持つ少女はきょとんとして、タバサの言葉が何を意味するのかまったく理解できない。

「シルフィード」

使い魔に声をかけ、空の旅がはじまった。

青い竜はすごい速度で空を進む。

——ジェットコースターみたいだ。

流れていく景色に目をうばわれながら才人はそんなことを考えた。手はしっかりとシルフィードの背にある出っ張りをつかんだまま、ルイズとキュルケは比較的リラックスしているが彼にはマネできそうにない。

シートベルトが欲しい、と思いながら無理やりあぐらをかいだ。

タバサの使い魔は才人が想像していたよりもずっと安定した飛行を見せ、馬車の方がよっぽど揺れを感じるほどだった。

それに移動するときには必ず起きるはずの風は、かなりの速度と裏腹にあまり感じない。

風防みたいな魔法があるのかな、と才人は一人考えた。

しばらく飛ばば遠くに輝く大きな湖が見えた。

そんな中、キュルケはずりずりと膝立ちになって才人に近づく。

「あなた確かルイズの使い魔よね、名前は？」

「平賀才人。こっち風でいうとサイト・ヒラガなのかな。好きに呼んでくれ」

「へえ。見ない髪の色と顔立ちだと思ったたらハルケギニア出身じゃないのね。サイトって呼ばせてもらっわ。あたしはゲルマニアのキユルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。特別にキユルケって呼んでもいいわよ」

大体の貴族がそうであるような、平民を見下した喋り方ではなかった。

才人を観察する目も陰湿なものを感じない。

三角座りをしたルイズがじとつと横目で釘を刺す。

「サイト、そんなヤツと喋っちゃダメよ」

「あら、心の狭い主人を持つと大変ね」

口元に手をあててキユルケはころころと笑った。

「あんた男漁りはやめたんじゃないの？」

「自己紹介しただけで男漁り扱い？ ヴァリエールはホントお高くとまってるわね」

「淑女は紹介されるまで待つものよ」

「そんなだからヴァリエールからは男が逃げていくのよ」

「あんたらが奪っていつてるんでしょ！」

「奪った覚えはないわ、向こうから勝手に来るんだから」

——なんで俺を挟んで口論しだすんだ。

才人は視線でタバサの背中に救助信号を送ってみた。

彼女は背中に目がついているわけではないのでまったく気づく様子がない。

黙々とページをめくっている。

「そもそも初対面の男に名前呼びを許すなんて、信じられないわ」

「実力を認めた殿方だもの、いいじゃないそれくらい」

「なによそれ」

「サイト、確かギーシュを倒したでしょ？」

ルイズはようやくキュルケにまっすぐ顔を向けた。

「それがどうしたの」

「それがどうしたの、ですって！ 平民でしょ？ 平民がメイジを倒すってすごさをわからないっていうの！？」

あ、とルイズは盲点を突かれた気がした。

才人がガンダールヴである、と知る人物は少ない。

魔法学院ではコルベール、アニエス、オスマン、タバサの四人だけだ。

トリステイン中という話になっても両手の指で数えられる。

ルイズの父親であるヴァリエール公爵すら知らない秘中の秘だ。

それ以外はただの平民だとは思っていない。

「サイト、こんなご主人様よりあたしに仕えない？ 今なら恋人としてでもかまわないわよ」

——ああ、腕に！ 腕に！

右腕がキュルケのやわらかい二つの物体に挟まれている。  
思わず突起にしがみつく力がゆるんでしまう。

「あててるのよ」

続いてふつと耳元に囁きかけられ、才人は耳まで赤くなった。

「ちょっと!」

流石にルイズもこれ以上は黙ってられない。

左腕を自分のほうに抱き寄せようとし、ついとキュルケと見比べてしまった。

「……」

「な、なによ」

「……いいわよ、まだ成長の余地があるに違いないんだから!」

彼女はおつとりとした姉の姿を思い描いた。

自分もあなるはず、という根拠のない自信に満ち溢れている。ルイズが胸に手をあてた瞬間、ワルドのペンダントが微かに震えているのに気づいた。

「来た」

一行は湖の直上に差し掛かる。

パタンと本を閉じ、タバサが硬さを感じさせる呟きを放ったのはその時だった。

シルフィードがその声に合わせて大きく右に傾いだ。

「なッ」

その動作に、三人は慌てて竜の背に抱き着く。

続けざまの急降下で喋る余裕はない。

視界の端を炎が過ぎ去っていくのが才人には見えた。

必死にしがみつながら後ろを見れば黒っぽい竜と、黒いロープで全身を包んだ二人が見えた。  
距離はおおよそ三十メートルほど。

——どこから沸いて出たんだ！

「魔法は！？」

「無理！」

ラインスペルやドットスペルであろうと、魔法というものは直撃すれば大けがを負う。

連続した魔法に大きな体のシルフィードは回避する他ない。

純粹なスピード勝負なら青い風竜が圧勝しただろうが、荷物の量が違う。

振り切るのも曲芸飛行で後ろを取るのも難しい。

「キュルケ！？」

「ムリ！」

使い魔に指示を下しているタバサも、その背中に焦燥をまとうりつかせているように見える。

上昇と下降を繰り返しながら徐々につめられるのが才人にもわかった。

彼我の距離は十メートルほどに狭まっていた。

間断なく放たれる魔法はいよいよ激しさを増していく。

——どうすりゃいいんだよ！

才人の内心を意に介さず、敵は交互に炎と氷を放つ。

「来た」

耳に入ったタバサの呟きは歓びに溢れていた。

「……鳥？」

ぽつぽつと空を染めるのは黒い点、才人はそれを鳥の群れだと最初は思った。

だがジグザグ飛行をやつてのけるシルフィードの上で目を凝らしているとも違うように感じる。

翼を広げても大きすぎる、人間の大人くらいはありそうだ。

先行した一体が急ターンして青い風竜と並行する。

『シャルロット様。虫を払います』

「よろしく」

果たして、それは翼をもつ石人形だった。

続いて何十体もの黒い影がすれ違っていく。

ここで不安定な飛び方をやめ、シルフィードはまっすぐに姿勢を戻した。

「ガーゴイル？」

「そう、もう大丈夫」

後方についていた黒い竜はガーゴイルにたかれ、すっかり速度を落としている。

才人が振り返ったとき、丁度湖の上に墜落していくのが見えた。

「ああもう、聴きたいことが多すぎて頭がこんがらがっちゃいそう」

キュルケは首を一振りして言った。

タバサは振り向いて彼女の瞳をじっと見ながら答えた。

「リュティスについたら全部説明する」

\*

それから襲撃もなく、一行は無事リュティスに着いた。  
途中で幾度か休憩をはさんだせいで夕焼けの美しい時間になって  
いた。

石造りの建物が立ち並ぶ街の様子は、トリスタニアとさして違わ  
ないように才人は感じる。

強いて言うなら道幅が広く少し古びているくらいだった。

タバサは一言も喋らず人の流れをぬって進む。

小さな彼女を目印にするのは普通ならばしんどかったに違いない。  
だが特徴的な青い髪がちらちら人ごみの合間に見えるので道に迷  
う心配はなかった。

——— ということからしね。

キュルケは一人考える。

タバサは、彼女の友だちはそもそも名前からしておかしい。  
人形やペットの類につけるような、ありふれすぎた名前なのだ。

そして目印になるほど目立つ鮮やかな青髪。

あれほどの髪色が出るのは、彼女がガリア王家に近い存在だか  
らではないかとキュルケは考察している。

——もう少し待ってあげる。

友人の内心を知ってか知らずか、タバサは歩調をゆるめることなく街を歩く。

やがて貴族街にさしかかり、それでもずんずん進んでいく。長い影を踏みながら振り返れば、才人の目に眩い夕日が突き刺さった。

「どこに行くんだ？」

「宿泊場所、会議は明日の朝から」

才人の質問にもそっけなく答えた。

ふむ、となんとなく彼は呟いて、考えても仕方ないから黙々と歩くことにした。

ルイズもキュルケも喋る気配はない。

周りの景色が建物一色から緑地や庭園が混じりだしてからしばらくたち、タバサは立ち止まった。

目の前には威圧的な城壁と堀にかかった跳ね橋、門番をつとめる全身鎧を身に着けた衛士が四名長鉾を交差させている。

タバサはゆうゆうと彼らに近づき、一言声をかけた。

「戻った」

それだけで四人の衛士は微塵のぶれもなく鉾を引いた。その間をタバサは何事もなかったように歩き、三人もそれに続いた。

——え、ナニコレ。

才人は信じられないものを見た気分だった。

——もしかして、タバサってめっちゃ偉い人？

気安く接してきたのを軽く後悔してしまう。

だが彼のご主人さまも地位が高いということに気づいていない。

城壁の内部はここが都市であると信じられないほど美しい庭園だった。

芝生は綺麗に刈り込まれ、見事な花をつけた植え込みが等間隔に並んでいる。

近くを歩けば香りが鼻に届いてなんともいえない穏やかな気分にさせてくれた。

——ま、それもあとちょっとで話してくれるだろ。

十分も歩いただろうか、薄桃色の建物が目に入る。

一流の建築家が設計したであろう嫌味のない華美さをもつ小宮殿で、いわゆる「屋敷」のようなもつと質実なものを想像していた才人はまたも驚いた。

「従姉妹のイザベラが、王女が待ってる」

振り返ったタバサの平坦な瞳は才人だけを見つめていた。

\*

「おまえがガンダールヴか」

——意地悪姫さま。

才人の脳裏に浮かんだのはそんな単語だ。

大国ガリアの王女、イザベラは確かに美しい少女だ。

だが目つきがとんでもなく悪い、胸も薄ければデコも広いと才人の評価は散々だった。

「何考えてるのさ？」

その上言葉づかいまで悪かった。

タバサと全く同じ色あいの髪と冠、青いドレスがなければ街の居酒屋で働いていても違和感がない。

——いや、居酒屋の店員さんだってもっと愛想いいだろ。

とにかく才人のイザベラに対する第一印象は最悪に近かった。

なんせ彼女は攻撃的な態度を隠そうとしていない。

隙あらばぶん殴ってやりたいという気持ちだが、少し鈍いところのある才人にもわかるくらいだ。

タバサからこの部屋の前に案内され、他の三人はどこかへ行ってしまった。

残された才人は渋々ドアをノックし入るしかない。

入った瞬間そんな敵意をぶつけられれば誰だって不機嫌になる。

「俺はガンダールヴなんて名前じゃない。平賀才人だ」

「平民の名前なんてどうだっていいさ」

嘲るような言葉がさらにイライラを募らせる。

「それで、俺に何の用なんだ」

「王女相手にその言葉づかい、まったくこれだから平民は……」  
「いい加減にしろよ」

流石に力チンときた。

「呼んだのはそっちのくせになんだよ」

「わたしは王族よ。平民は呼ばれたら尻尾振って駆け寄ってくるもんでしょうが」

「それが王族らしい人ならそれらしい扱いしてやるさ」  
「ハア？」

才人が思い出したのはトリスタニアの王宮と、風の国での一幕。

「ウェールズ皇太子や姫さまを見習えよ」

思わず口に出た才人の言葉でイザベラはさっと表情を変えた。  
獰猛な笑みが消えてどこか冷めた目で才人を見ている。

「は、アルビオン王族を救ったからって英雄気取りか」

これ以上ここにとどまる意味を才人は見いだせなかった。

「待ちな」

無言でドアに向かう才人をイザベラは制止した。  
だが彼はそれを無視してドアノブに手をかける。

「待ちなさい」

びくつと肩が震えた。

それは先ほどまでの声とは全く違う、威厳に満ちたものだった。

「話はまだ終わってないわ」

才人がゆっくり振り返ると、イザベラは幾分か穏やかな、しかしどこか自嘲するような笑みを浮かべていた。

そのとき、彼は初めてこの少女の姿を直視したように感じた。

仮面をかぶっているのだ、それが誰に対してのものかはわからないが。

「あんだよ」

ドアから少し離れ、話を聞く気があることを示す。

イザベラは無言で背が低いテーブル前のソファを指さして才人に座ることを促し、彼はそれに従った。

彼女もその対面にある一人用の豪勢なソファに腰掛ける。

「アンから聞いたけど、おまえ違う星から来たって本当？」

「ああ、俺がいた星じゃ月が二つもなかったし、大陸も空を飛ばない。そもそも魔法なんて空想上のお話だから間違いない」

「そう……星の名前は」

「地球」

イザベラは五秒ほど口を閉ざした。

「ユゴスという星に聞き覚えはない？」

「ねーな」

「ちゃんと思い出せ、本当にないのか？」

「……やっぱりない」

「じゃあコレに見覚えは」

イザベラがそういつて机の下から持ち出したのは、金属製の円筒だった。

高さは三十センチ程度、直径はそれよりも少し小さい。つるんとした外観に三つの妙な穴が開いていた。

「缶詰？」

「知ってるのか！」

机越しに身を乗り出したイザベラは、年相応の少女の顔をしている。

必死な表情だった。

才人はその心に応えようと、円筒を持ち上げ観察した。

「ごめん、やっぱり違う。大きすぎるし缶詰ならこんな穴いらない」  
「……そうか」

イザベラは力なくソファーに体を落とした。

三角形をつくるよう配置された穴は、パソコンなど電子機器のソケットみたいだと才人は考える。

しかし、これはそういったありふれたものではなく、もっと恐ろしい秘密を秘めているように感じられる。

「それは模造品よ。本物があればわかったかもしれないね」

「いや、多分無理だ。さっき言った缶詰と似てるけど違う。コレ何に使われてるんだ？」

「……わからないわ」

唯一の希望が潰えたような落ち込んだ声だった。

「最後にこれを見て」

再び机の下から取り出した一枚の羊皮紙には、奇妙なモノが描かれていた。

「なんだこれ」

「それを知りたいのよ」

それを何と表現すればいいのか、才人にはわからなかった。

ザリガニのような、あるいは他の水棲甲殻類じみた胴体とそこから生えている鉤爪のついた脚は三対、それも昆虫のようなものだ。

背中と思しきところからは数対の広い背びれか、見る人によっては飛膜と判断する物体。

既存の生命体ならば頭が存在するであろう場所には渦巻形の楕円体がのつていて、そこから多数の短い角か毛のようなモノが突き出ている。

地球人ならば「アンテナのようだ」と感じる人もいるだろう。

直立したその絵姿はなんとも名状しがたく、才人の心に気持ち悪い感触を残した。

「シャルロットとジョゼットの父、オルレアン公の使い魔で彼が失踪、いえ、死亡ね。その原因よ。手がかりはその絵とユゴスという星、そして模造品の円筒しかないの」

公的には病死となっているけどね、とイザベラは言った。

その声はこの場にいない少女たちを心底案じたものだった。

「なんで、俺に直接聴こうとしたんだ？」

思考が口からそのまま漏れてしまう。  
そこが才人にはわからなかった。

王女ということは目の前の少女は偉いはずだ。  
自分とは比べ物にならないくらい忙しいはずだ。  
こんな問答なんて誰かに押し付ければそれで情報は手に入る。  
それこそもつと聞き上手な人が王宮にはたくさんいるだろうし、  
そういった人物を使うこともできただろう。

「機密だからに決まってるじゃない」

呆れたようなイザベラの声、しかしその表情に若干の恥じらいが  
混じっているのに才人は気づいた。

「そっか」

——コイツ、本当は優しいヤツなんだ。

才人にはぼんやりとイザベラの内心がわかった。  
従姉妹のために、自分で何かせずにはいられないのだ。  
強気で傲慢でいけずなくて、でも少しだけ彼女のことを好きに  
なれそうな気がした。

「お前、いいヤツだな」

「ハア？ 当たり前でしょ」

気のせいだった。

——ホントに優しいのかコイツ？

わかったと思っていた内心はひょっとしたら全然違うのかもしれない。

ただ自分をいじめたかっただけかも、と才人は考え直した。

「まあ、聴きたいことは聴けたから一応お礼を言っておいてあげる」

「……全然感謝されてるような気がしない」

「気のせいよ、それと」

イザベラは一拍ためて。

「アルビオンの件は感謝しておくわ」

ツンとそっぽを向いて言った。

視線だけがちらちら才人をうかがっている。

——やっぱりいいヤツだ。

最初は何故あれほど攻撃的だったのか、よくわからないがそれもどうでもよくなった。

「だから忠告しておいてあげる」

だが、向き直ったイザベラの表情は最初感じた意地悪姫さまそのものだった。

「父上と叔母上は、ガリア王家はおまえのことを評価しているけど嫌っているわ。せいぜい明日は気をつけなさい」

——俺、嫌われるようなことしたっけ？

才人は明日に不安を覚えた。

## 誓約の口づけを

「ふ、ふつつかものですけどよろしくお願いしますっ！」

——え、マジでいいの？

才人はそんな思いを口には出せなかった。

目の前のちよっぴり耳のとんがった女の子はとんでもなく可愛い。彼のご主人様であるルイズ・フランソワーズとタメをはるか、人によつては彼女を勝者とみなすだろう。

腰くらいまであるさらっさらの金髪にうるると濡れる瞳、艶やかな唇に才人は目をうばわれた。

上目遣いの威力に彼は血反吐をはきそうなダメージを受ける。

胸中では緊張しているに違いないのに、王族だからと少しがんばっている様子なんてもうたまらない。

そしてなによりも、その胸。

『それは胸というにはあまりにも大きすぎた』

そんなフリーズが才人の脳裏をよぎる。

服で隠していてもわかるそのサイズ、圧倒的質量。

ルイズが美少女であることは疑いの余地がない、しかし胸という評価を加えれば大差がついてしまう。

世の中特殊な趣味の人もあるらしいが才人は巨乳派だ。

知らず生唾を飲んでしまう。

——マジで、マジでいいんだよね？ これはご褒美に違いない、きつとそうだ。

ありがとう神様、なんて信じてもない妄想上の人物に感謝してから、自然に手が伸びてしまっていることに気付いた。

——な、なんて魔力だ……！

才人は戦慄した。

色々と張りつめていたものがガラガラと崩壊して彼を一人の高校生に戻す。

いつものパーカーとジーンズではなく、着慣れないハルケギニアのカッターシャツとスラックス姿だが関係ない。

今の彼は、ただの男だった。

おっぱいによつて、平賀才人はありとあらゆる葛藤を薙ぎ払われ、一介の男児に戻るのだ。

一方彼のことを良く知らないハーフエルフの少女、ティファニアは「んっ」と唇を突き出した。

彼女はただ一途に自分の使命を果たそうとしている。

才人にキスをする、もつと言えばコントラクト・サーヴァントを完遂すること。

それしか考えていないので彼の邪念を察知することは、残念ながらできなかった。

しかし、彼女に感じ取れなくても他に人がいれば話は別だ。

知らず手をわきわきさせていた才人は強大な威圧感に包まれた。思わず違う意味で生唾を飲んでしまう。

——だ、誰だ俺の野望を邪魔するのはっ！

ばつと才人は部屋の中を見回す。

まずティファニア越しに目についたのは、中性的な顔立ちをしていて最上位の法衣に身を包んだ男性、ブリミル教の頂点に立つ教皇、聖エイジス32世。

彼は円卓についたままたおやかに微笑むばかりで、むしろ才人とティファニアの口づけを待ち望んでいるようにも見えた。

その傍らに佇んでいる鮮やかな金髪に鳶色と碧色の月目、才人に言わせれば「イケメン」の一言で済むジュリオ・チェザーレも同じだ。

彼は教皇ほど純粋な微笑みではなく、野次馬的なニヤリとした笑みを浮かべている。

いかにも下町っ子といったその表情はキザったらしい笑顔を崩さないジュリオには意外なものだと才人は思った。

——違うな。

視線を左にずらす。

腕組みしながらむっつりと黙り込んでいるのは、青色の髪と髭がタバサそっくりな若々しく見える大国ガリアの王様だ。

ふわふわの白いファーがド派手な武農王ジョゼフ一世は静寂、とかく才人をじつと観察している。

だが害意を発しているわけではない、彼はシロだ。

彼のそばを離れない黒いピッチリした服装の秘書風黒髪美女、シエフィールドもクールな素振りで感情の揺らぎを見せない。

さらに左にはタバサを成長させればこうなるだろうという貴婦人、青いドレスのオルレアン公夫人が控えている。

彼女は目を閉じて静かに座っていた。

さらにはエルフと呼ばれる種族の、ビダーシャルという男も同様に腕組みをしていた。

——こっちも違う。

才人はそれ以上視線を動かしたくなかった。  
でも見ないわけにはいかない。

右へギギと顔を向ければ視界に入ったひくひく震えている唇、  
多分色々な感情のせいだ。

そのひきつった顔を戻せるのなら値千金の価値がある、と熱狂的  
なファンがつきそうな顔立ち。

右眉は怒り、左眉は困り、と器用に顔面の左右で表情を使い分けて  
いる、外見どころか中身まで立派な皇太子、ウェールズ・テュー  
ダー。

「彼は英雄だが、しかし従姉妹であるティファニアを、だが第四  
のルーンは……うぬぬ」なんてことを考えている。

その感情は至極真つ当なもので威圧感を伴うはずがない。

——残るのは……。

無意識下でスルーしたいと願っていたトリスティン勢とゲルマニア  
代表。

アンリエッタ王女は瞳をキラキラ輝かせて見入っている。

こちらはむしろ「早く早く！」と急ぎ立てそうなほどだ。

かなり老け込んで見えるマザリーニ枢機卿は無関心に近い、どち  
らかと言えば祝福しているのではないか。

マリアンヌ太后は娘に任せるとし、今回の諸国会議には来ていな  
い。

いかにも面白くなさそうな顔で腕組みしながら指をトントン動か  
しているのは帝政ゲルマニアを統べるアルブレヒト三世だ。

そして、彼のご主人であるルイズは……。

——笑ってる。

綺麗な笑顔だった。

彼女は笑わない、日常的に笑みを浮かべるタイプではない。だというのに才人とティファニアを見守りながら穏やかな笑顔を咲かせている。

それがたまらなく奇妙で、才人の恐怖心をあおる。そんな平常でない彼女から放たれる威圧感が才人の手を止めた。

――動いたらやられる。

何を、とかはわからない。

とにかくヤバイ、それだけが大事だ。

才人はそろそろと手を下ろしてティファニアに向き直った。瑞々しい果実のような唇に再び目をうばわれる。

――合意も理由もあるから問題ない、よな？

ゆつくりと顔を近づけていく。

――まつ毛長いんだな。

どうでもいいことを考えながら唇を寄せていく。。

ティファニアは動かない、ただ静かに才人の口づけを待っている。互いの吐息がかかりそうなくらいの距離、威圧感が大きくなった。

――またかよ！？

今度は見なくてもわかる、ルイズだ。

それでも密かに視線を向けて確認すると、笑顔のまま、額に青筋が走っているような気がした。

うつすらと開かれた瞳は冷たい。

——笑ってるけど、わ、笑ってない。

いわゆる『目が笑っていない』というヤツだ。

思わずキスまで五サントというところがかたまってしまう。

「どうした、早くしないかガンダールヴ」

それまで沈黙を保っていたジョゼフが平坦な声をかける。  
彼はルイズを見て。

「主人が見ていてはやりにくいと言っなら退室してもらっが」

唇の端を釣り上げて挑発した。

——お、おっさん余計なコト言っな！

「サイトさん？」

ゴホン、と才人は咳払いをしてティファニアに向き直った。

できるだけ安心させるように彼より背の低い少女の肩に手を置く。  
威圧感は、今度は来なかった。

不安げな瞳の少女はそれで察したのか再び目を閉じて、少しだけ  
おとがいをあげた。

「スペルを忘れていますよ」

欠片の嫌味も感じないヴィットーリオの涼やかな声に、二人はハ  
ッと距離をあけた。

「そ、そのすいません!」

「いえそんな」

お互い頭を下げてしまう。

アルブレヒト三世は忌々しげに舌打ちした。

「我が名はティファニア・モード、五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

そうして、二人は若い恋人たちがファーストキスをするように、触れるだけの口づけを交わす。

かすかな接触だが、触れ合っている時間は長かった。

ルイズは胸の奥の小さな痛みを自覚し、これも使命のためだと蓋をした。

ティファニアはそっと才人から離れる。

才人は左胸に、彼の心臓に手を当てて。

「っ!」

激しい痛みを意識を手放した。

彼は暗闇で夢を見る。

今日一日の夢を。

——誓約の口づけを——

昨夜、イザベラの部屋から去った才人は、またしても迷った。はじめての場所で、知り合いもない状況、さして方向音痴でなくとも仕方のないことだろう。

さらに間の悪いことに夕食も近いので周囲にはメイドの一人もいなかったのだ。

イザベラの部屋に戻って道を訊くのもはばかられたので、そのままうろろして、結局使用人に声をかけて連れて行ってもらった。その際、怪訝な顔をされたのは言うまでもない。

タバサの部屋についたのは、プチ・トロワについてから実に二時間近くがたっていた。

当然彼女の話は終わっていて、遅れたからもう一回とも言えず、才人はタバサの謎を知ることなく夜を迎える。

賓客用の広く豪華な部屋をあてがわれ、久々の一人部屋は寂しさすら覚えた。

——少し、怖いな。

ニューカッスル城の夜以降、この時間帯になると色々な考えが才人の頭に浮かんでは消える。

それは故郷のことであつたり、ガンダールヴの秘密であつたり、共に戦い今はもう会えぬ人々のことであつたり。

以前は寝つきの良かった彼が、眠りに落ちるのに少くない時間を必要とする。

孤独な暗闇は確実に才人の精神を蝕んでいく。  
才人にとって、朝の光は一日のはじまりだけでなく、深みに落ちていく心の救済を思わせるものになっていた。

\*

「それで、諸国会議って何を話すんだ？」

朝食後、若干の暇があったので才人はルイズの客室を訪れていた。

「そうね……」

ルイズはじつと才人の顔を見る。  
そして大きなため息をついた。

「なんとなく釈然としないけど、仕方ないわよね……」  
「？」

才人には何のことやらわからない。

「議題のうち、二つは予想がつくわ」  
「なにそれ？」

渋い顔をしながらルイズは紅茶に口をつけた。  
その仕草は洗練されていて、彼女が大貴族のお嬢さまであることを才人に思い出させた。

「一つはサイトの処遇についてよ」

「俺の処遇……どうするかってことか」

「そう、良くも悪くもあなたは活躍しすぎたの」

「どうということ？」

音もなくティーカップをソーサーの上に置いた。

「アルビオン王家を救うため、各国はできる限りの努力をしたわ」

外交、密偵、武力介入、始祖の血統を絶やさぬため合法非合法を問わずあらゆる手段がとられた。

しかし、それらの行動は一切実を結ばなかった。

アルビオンに跋扈するナイアルラトホテップ教団は、規模こそさして大きくなかったが、あやしげな術を使った。

彼らの邪魔をする者は消され、あるいは内部にとりこまれたのだ。トリスティンが秘密裏に送った小隊も、ガリアが公的に送った両用艦隊の一部ですら消息を絶った。

さらにその異常なまでの侵攻速度が、教団の名が表面化してから二ヶ月もたたないうちにアルビオン王家を窮地へ追い込んだ。

影のようにあらわれた五千の軍勢で、三万の兵を擁したモード大公軍を、陣を整える間もなく殲滅したのは記憶に新しい。

他にも王家の血が濃く、裏切るはずもない侯爵をはじめ、諸侯の唐突な寝返りも多かった。

そこまで話して、ルイズは肩を落とした。

「そのナイアルラトホテップってすげーやばいって皆知ってたんだろ？」

「ここ数百年比較的大人しかたから、その間にわたしたちも強くなったと思いがついていたから、そして相手は人間だったから。この三つで油断していたのが敗因ね。最初から全力で潰していれば……」

……」

ルイズは少し悔しそうに言う。

彼女の脳裏には燃え盛るニューカッスル城が映っていた。

「とにかく」

その一言で彼女は落ち込んでいた気分を振り払う。

「サイトは滅びに瀕した王家を救った、いわば英雄なの。きっとあなたがいなかったらウェールズ皇太子は」

「やめてくれ」

才人はルイズの口を遮った。

その眼に浮かぶのは後悔の念。

「俺は英雄なんかじゃない」

それは悲劇に酔った男の自嘲ではなく全くの本心だった。

——俺が英雄だったら。

誰も死なせなかった。死なせなくなかった。

その言葉は才人の心の中でだけ、静かにこだまする。

——アニエスさんやコルベール先生との鍛錬をもっと真面目にやっておけば。

眠れぬ夜、いつも思い返したことまで浮かんでは沈む。

少年らしい傲慢さと、才人がもつある程度の責任感が自身を締め付けた。

「……話を続けるわ」

ルイズはその思いの一端を垣間見たが、やはり何も言えなかった。

「処遇に関してだけど、三つの予測がつくわ」

「……」

「一つ、ガリアでわたしごと受け入れる。トリステインは決して弱国ではない。とはいえ、このガリアには層の厚さで劣るわ。ここでわたしもサイトも保護という名の軟禁状態におきながら決戦までひたすら鍛え続ける」

トリステインには強力なメイジが多い。

しかし、その一方で弱いメイジが大半をしめる。

そのためどうしても広範囲の警備網に穴が開いてしまう。

それだけでなく、トリステインはアルビオンに近い。

教団の残党がはびこる今、虚無の主従を護るには適していない国なのだ。

「二つ、現状維持。強い戦力で魔法学院の警備をひたすら固めて、わたしたちを囷に邪教を叩く」

昨日の一件でもわかったが、ナイアルラトホテップ教団は完全には壊滅していない。

どこに狂信者が潜んでいるのか今はまったくわからない状況である。

虚無の主従を、特にアルビオンで一騎当千の活躍を見せた才人を餌にした消極的攻勢の策。

相手が才人のことを知っているかは不鮮明だが、理解の外にある術を使う集団だ。

なんらかの手段でその事実をつかんでいる可能性は高い。

「三つ……」

ルイズは唐突に口をつぐんだ。

「なんだよ」

「想像はつくの。けど言いたくない」

才人を見ると、ルイズの顔色は悪い。

肩もかすかに震えていて、何か良くない予想がついているようだ。

「言ってくれ。その方が心の準備ができる」

強く、こぶしを握りしめた。

「……サイトの処刑」

ずっと顔の血が引いたような感覚、才人は息をのんだ。

「なんで」

「あなたが違う星から来た、それが問題になるの。タバサの、シャルロットの父、オルレアン公のことはイザベラ殿下から聞いたかしら？」

才人は無言で頷く。

「わたしたちにとって、この惑星以外のことはほとんどわからないわ。だからあの一件で異なる星から来た者はすべて排斥すべきだ、という意見もロマリアの一部からは出ているの」

「だからって」

言い募ろうとしたが、ルイズの顔色を見て止まった。  
才人が見てすぐにわかるほど彼女の顔は青くなっていた。

——ルイズに言っても仕方ないだろ、落ち着けよ俺。

ルイズがもし強気な少女だったら才人は噛みついただろう。  
だがここにいる桃髪の少女は、普通の女の子だ。  
虚無なんてものに選ばれてしまったから、その使命感に押しつぶ  
されそうになっている女の子だ。

「ごめん」

素っ気ない一言をかけて才人は自己に埋没する。

——なんで違う星から来ただけで処刑になるんだ。

才人にはその思考がわからない。  
人の評価を鵜呑みにしない、己の見たままを信じる彼には理解で  
きない。

ゲルマニアはハルケギニアにおいて成り上がりの国とされている。  
それは事実だ、だがすべてではない。  
それでも詳細を知らない者が聞けばゲルマニアすべての印象が悪  
くなる。

一部には貴族主義者もいれば、古くからの血統も存在することに  
気づかず。

地球でも『日本人はこういう性格だ』と偏見を持たれている部分  
がある。

つまり、才人が直面しているのはそういうことだった。  
悪しき存在が異なる星から来たものだから。

きつと他の星に住むものはすべて危ないに違いない。  
そんなどこか硬直しているが、民衆を護るため少しでも危険を減らすという観点からは正しくもある、極一部の枢機卿たちの、しかし声の大きい意見だった。

才人は答えを見つけないことなく考えを打ち切った。

「それでもう一つの議題っていうのは？」

その言葉は同時にルイズの震えを止めた。

青かった顔色は、回復するどころか少し赤くなっているように見える。

それも羞恥ではない、怒りのせいだ。

「知らないわよ」

「へ？」

泣いた子が笑った、ではなく震えていた子が怒った。

「な、なんで怒ってるのか知らないけど教えてくれよ」

「やだ」

「そんなこと言わずにさ……」

「だって、やだもん」

——なんで唐突にまた。

才人にはその思考がわからない。

「悪いこと、じゃないよな……」

ルイズの様子から自分の命にかかわることはなさそうだと才人は判断した。

「むしろサイトは喜びそうね」

ぶすつとむくれながら、そして彼を心配しながらルイズは言う。彼女は知っている。才人の処遇で三つ目の選択が消えれば、この会議は契約を行うことが主になることを。

今後の対アルビオン、対邪神の方針検討はオマケに過ぎないことを。

そしてその『コントラクト・サーヴァント』にはキスを伴うことも重々承知している。

しかし彼女にも知らないことがある。最後のルーン、リーヴスラシルの効果だ。

ロマリアが完全に秘匿しているため、彼女にもどのような効果があるか、想像できない。

それが才人を心配する理由の一つにもなる。

彼女は才人に恋心を抱いているわけではない。

だが彼をこの星に呼んだのは自分だというかすかな誇りと、多大な罪悪感を覚えていた。

ほのかな慕情とも呼べない、子どもじみた感情をルイズ自身もてあましている。

「喜びそうなことか……」

なんだろう、と腕組みしたはいいものの全く思い当たらない。

そうこうしている内に時間になり、才人は疑問をもちながら会議に挑むしかなかった。

\*

教皇ヴィットーリオが議長を務める会議は、まず『コントラクト・サーヴァント』について言及した。

とかく、この場で契約を結べという満場一致の意見。  
ルイズの想像とは逆に、才人の処遇については一切話し合われなかった。

———どういうことかしら。

考えを巡らすものの、彼女は沈黙を保っているジョゼフと、こやかなヴィットーリオの胸裏をのぞくことはできない。  
当の才人は慌てふためいた。

「なんでしなきゃいけないんですか!？」

彼にしてみれば嬉しい、嬉しいが恥ずかしがっているハーフェルフの少女と、彼のご主人を前に露骨な態度を出したくなかった。  
言葉だけの反論にヴィットーリオは穏やかに微笑んで返した。

「ガンダールヴ、いえ、サイト殿と呼ばせてもらっても？」

「あ、はい」

「ではサイト殿、あなたの星に始祖の教えはないのですね」

「ないです」

「わたくしからサイト殿に始祖の偉大さを説く時間を頂いてもよろ

しいでしょうか？」

ヴィットーリオは涼やかな声で会議に集まった面々に問いかけた。  
反対の声はあがらなかった。

「ティファニア殿」

「は、はい！」

「エイジス聖歌、四の僕の章を覚えていますか」

「もちろんです」

「ここで披露してください」

ティファニアは少し緊張した顔で立ち上がり、朗々と歌いはじめた。

—— 神の左手ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。左に握った大剣と、右に拵んだ長槍で、導きし我を守りきる——

—— 神の右手がヴィンダールヴ。心優しき神の笛。あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空——

—— 神の頭脳はミョズニトニルン。知恵のかたまり神の本。あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に助言を呈す——

—— そして最後にもう一つ。記すことさえはばかれる——

—— 三人の僕を従えて、我はこの地にやってきた——

美しく、感動すら誘う歌声だった。

歌い終えたティファニアはほつと息を吐いて、腰を下ろした。

「素晴らしい」

ガリア代表以外は心底から聞き入っていたようで、みな口々にため息をついた。

「どうでした？」

「いや、すごい綺麗でしたけど……」

——なんでいきなり歌？

才人にはハルケギニアの感覚がわからない。

ティファニアは、彼の率直な褒め言葉に顔を赤らめた。

「四の僕の章には重大な秘密が隠され、またある真実が伏せられています」

皆の目を見ながら、どこかもったいぶるようなヴィットーリオの言葉に、才人の表情は硬くなる。

「始祖が創られた使い魔の順序が示され、四つ目のルーンについて記されていないのです」

——四つ目のルーン。

きつとこれがキモになる、と才人は唾を飲み込む。

「神の心臓リーヴスラシル。心臓とはすなわち、勇気の象徴。そのルーンが持つ効果は……」

ヴィットーリオは左胸に手を当て、才人の瞳を見据えた。

「周囲五リーグの狂気緩和。平民であろうと、正気を失うことなく邪神の眷属を直視できるでしょう」

心臓が高鳴るのを感じた。

「そ、それは真か!？」

アルブレヒトが信じられぬという形相で立ち上がった。

ガリア勢は相変わらず黙り込んでいたが、それ以外の諸国代表は、マザリーニを除いて驚きに目を見開いていた。

リーヴスラシルの効果を知らなかったルイズも例外ではない。

これはロマリアが口を閉ざしていた秘中の秘だ。枢機卿にのみ口伝で教えられ、例えばどれほどの金銀を積もうとこれを話す者はいなかった。

このルーンはそれほど規格外で、この事実が外に知られれば人同士の醜い争いがはじまることを予期していたからだ。

邪神は、直接相対していなくとも人の正気を削り取る。

それは抵抗する術を持たない平民に限った話ではない。

始祖の血をひくメイジも例外ではないのだ。

ただの発狂ならばまだマシで、染められてしまえば家、領地、国の内部崩壊は避けられない。

いつ闇が侵食するか、余人にははかりしれず、ことを知るものにとつてその恐怖は耐えがたいものがある。

たった一人の人間を配置するだけでそれが回避できるとなれば、戦争を起こしても欲しがる貴族は多い。

邪神との戦いが終われば、この記憶を消すためだけにロマリアの

虚無は各国を訪問するのだ。

皇帝の言葉が耳に入らなかったかのように、ヴィットーリオは謳うように語る。

「まず始祖は一のルーン、ガンダールヴを創られました。初代ガンダールヴは聖者アヌビスとしても伝わっています。

はじめ始祖は聖者アヌビスを連れて邪神に挑みました。しかし、いかに始祖の魔法が強力であろうと、邪神になんら痛苦を与えることができませんでした」

ヴィットーリオは遠く、遙か過去に思いをはせながら言葉を紡ぐ。

「次に始祖は二のルーン、ヴィンダールヴを創られました。動物が邪神に対して有効であることを見つけられたのです。

そして始祖は二人を連れて邪神に挑みました。しかし、ここでもまた邪神に対抗できなかったのです」

その時の光景を想像しているのか、視線は虚空に定められている。ジュリオが右手のルーンを抑えた。

「さらに始祖は三のルーン、ミヨズニトニルンを創られました。魔道具ならば狂気に犯されることがないと気づかれたのです。

そして始祖は三人を連れて邪神に挑みました。それでも、始祖は邪神を打倒できなかったのです」

ちらと才人はジョゼフの傍らに控える人物、シェフィールドを見た。

彼女の額のルーンこそミヨズニトニルンの証、昨日襲撃から救ってくれた人だとタバサから聞いている。

微かに頭を下げると、彼女は薄い笑みで返した。

「最後に始祖は四のルーン、リーヴスラシルを創られました。狂気緩和によって人々をも戦えるようにしたのです。

始祖はこのルーンを聖者アヌビスに刻みました。最前線に出る彼女にこそ必要だと考えられたのです。

そして始祖は四人とたくさんの兵を連れて邪神に挑みました。とうとう邪神を破ることができたのです」

——え、じゃあそれでハッピーエンドなんじゃ。

才人の疑問をあらかじめ知っていたかのようにヴィットーリオは言葉を連ねる。

「しかし、それは“はじまり”でしかなかったのです」

若き教皇は、その中性的な顔立ちを歪めながらも語ることをやめない。

「始祖が死力を尽くして打ち破った邪神は、その一端にすぎなかったのです。

それが打倒されたことで逆にこの星は目をつけられてしまった。

本体が乗り込んでくることこそなかったものの、同じような一端を度々送り込むようになりました」

「ちよつといいですか」

たまらず才人は口をはさんだ。

理解できないことが多すぎる。

「その、邪神の一端っていうのはなんのためにハルケギニアに来る

んですか？」

「ガンダールヴ」

それまで一言も喋らなかったジョゼフが才人に声をかけた。

「お前は子どもの頃、アリの巣を潰したことがあるか？」

「……何度かはあります」

「明確な目的や意味をもって行っただけか？」

「いえ、確かなんとなくやっただけで」

「それと同じことだ」

——そんな。

「アリと人間とじゃ違いすぎる！」

「おれに怒鳴るな、では聞こう」

ジョゼフは天井を、天上を指さし言った。

「お前に太陽が斬れるか？」

——何ほざいてんだこのおっさん。

「無理に決まってるじゃないですか」

「邪神には、ナイアルラトホテップには斬れる。それどころか消し飛ばすことすら可能だろう」

「は？」

「そんな存在規模からすれば、おれたちなど塵芥にすぎんだろっな」

この世全てを嘲るような笑みに、才人は真実を感じた。

——そんなの神様にしか……。

そこまで考えてからハッと気がついた。

邪神とは、まさに邪悪な神なのだ。

才人が日本にいたころ、ゲームに出てきたような倒せるボスじゃない。

多神教における、時に英雄が打ち破る神でもない。

一神教の絶対神、宇宙の創造を司るようなそれを相手にしているのだ。

しかし、それは正しくもあり、間違ってもいる。

邪悪な神とはあくまで人間からの視点であって、彼らはそのように定義づけられる存在ではないのだ。

その事実が才人をはじめこの場にいる者は誰も知らない、知る由もない。

「よく御存じですね、ジョゼフ殿」

「隠しごとの得意なロマリアにはかなわんよ」

ジョゼフ以外が気づかないほどの一瞬、ヴィットーリオの表情が凍りついた。

「とにかく、リーヴスラシルは我々の切り札となりうるのです」

彼は刹那の硬直を感じさせず話を続けた。

そして。

「このルーンさえあれば、アルビオンでの悲劇を防げたかもしれないね」

——え……。

「それは我らアルビオン王家の対応を侮辱しているのか」  
「いえ、もしもの話をしただけです」

ヴィットーリオの刃は、才人の心臓を貫いた。  
ウェールズの言葉が、才人にはどこか遠くで話されているように  
感じられた。

「やります」

「リーヴスラシルのルーンが刻まれた瞬間から、あなたは国家を超越した人物に、ハルケギニアの存亡を担う存在になります。それでもかまわないですか？」

「いいです。正直大げさなことはよくわからないけど、あんなことが防げるなら」

ガンダールヴのルーンがほのかに輝いていたことに気づく者はいない。

才人は心中で誓いを立てる。この星のため命を賭けるという誓約を。

どこまでが彼の本心なのか、知る者はこの場にいなかった。

そうして、彼は口づけを交わす。

疼くような胸の痛みが気持ち悪かった。

\*\*\*

倒れた才人の胸元をあらため、教皇はリーヴスラシルのルーンが刻まれたことを確認した。

この瞬間をもって、平賀才人はハルケギニアの存亡を左右する男になった。

「ティファニア殿。彼をベッドに運んできてくれませんか？ おそらく目が覚めるまで半日近くを要するでしょうから」

それに、とヴィットーリオは続ける。

「ここからは少々、退屈な時間になるので」

会議場の空気が小さな軋みを訴えた。

ここまでは、必要であつたものの予定調和だ。

ここからが国主として最も気を引き締めねばならない時間になる。

「わかりました」

ティファニアはうつ伏せに倒れた才人を持ち上げようとして、失敗した。

虚無の担い手である彼女に風系統のフライやレビテーションは使えない。

王族ということもあり、普段力仕事を行わない彼女にとって、才人を運ぶのは荷が重い。

ルイズはそわそわと落ち着かない気持ちでそれを見ていた。

「ルイズ殿。できればあなたにもお願いします」

「わ、わかりました」

教皇に言われたからには仕方ない、と大義名分を得てルイズは才人の左側に立つ。

彼の今後に関して、処刑されないという確信が得られた以上彼女がここにいる意味も薄れた。

『せーのっ』

脇の下から腕を差し込んで、二人で息を合わせて才人を持ち上げる。

そのまま足をずるずると引きずりながら会議室を後にした。

「やれやれ、力を保つたためとはいえ虚無の担い手を追い出してよいのか？」

「今は仕方ありません。もう少し状況が進行してから語れば良いでしょう」

「虚無の魔法とは不便なものだな」

アルブレヒトが呆れたように言った。

「か弱い少女たちも離れたので本番と参りましょうか」

「あら、それではわたくしもこの部屋から出ないと」

「ご冗談を。あなたには女傑という言葉こそふさわしい」

ころころ笑うアンリエッタは、確かに王者の風格を備えている。

軽いやり取りを終え、部屋の空気が大きく軋んだ。

「改めてウェールズ皇太子から詳細を伺いましょう。あの日、何があつたかを」

「承知した」

ウェールズは、己の知る限りを語る。

手紙では情報伝達量に限度があったので、新たにもたらされた情報にアルブレヒトやヴィットーリオは頷き、また唸った。

「しかし、その一万の兵はどこへ消えたのだ」

アルブレヒトの疑問に、誰も答えられるはずがない。  
神のみぞ知る、邪神のみが知ることだった。

「影がある限り教団を潰すことはできない、か」  
「一網打尽にする必要があるでしょうね」

腕組みしながら呟くビダーシャルにヴィットーリオは返す。  
そこでアンリエッタが凜とした声をあげた。

「教団に関しては手を打っています」  
「ほう」

「いかような？」  
「巫女の父、ロシュフォール伯を旗印に。家の存続を条件に彼は引き受けてくれましたわ」

アンリエッタの笑顔は社交用のにやかなものではなく、男性陣の背筋を凍らせるような壮絶な笑みだった。

「それはまた……」

アルブレヒトなど言葉も出ない、一時は王家の血を入れるためアンリエッタを迎えようと目論んでいたが、この瞬間その気持ちは完全に消し飛んだ。

「彼が向こう側に着く可能性は？」

「それでもかまいません。まとめて叩き潰しましょう」

「影に対する対処法など確立できていないが」

「トリステインの虚無に土地ごと薙ぎ払わせます」

会議室がしんと静まり返った。

トリステイン王女、幼いころからアンリエッタをよく知るウェー  
ルズは彼女の変わり用に驚いた。

例え世界がかかっていようと、犠牲を顧みないような苛烈な性格  
をしていなかったはずだ。

——これがトリステインに伝わる王家の秘術か。

邪神に対抗するため、各王家には狂気緩和の秘術が伝わっている。  
だがそれはすべて違う術式が記録されていた。  
異なる魔法を用いることで、一挙に潰される危険を減らすためだ。  
アルビオンに伝わるものはウェールズに大きな変化をもたらしは  
しなかった。

トリステインの秘奥はどのような、と彼は一瞬考えるがすぐにや  
めた。

今この場に必要なことではない。

「くつくつく」

ガリア王、ジョゼフがおかしそうに笑っている。

誰もそれには触れず、続いてアルビオンの現状について各国の仕  
入れた情報をすり合わせる。

状況は控えめに言っても、絶望的だった。

「あの巫女はアルビオンを散歩しているようだな。まったく気楽で

羨ましくなる」

「散歩、ですか。我々からすればたまったものではありませんね」

「歩くだけで死をもたらす存在か、ゲルマニアには来ないだろうな」

ニユーカッスル城を吹き飛ばすほど強力な火の秘薬もメアリーには効果がなかった。

彼女は魔法学院の生徒が見慣れた姿に戻り、そのままアルビオンをふらふらと歩き回って街々に恐怖と破壊をもたらしている。

日が沈めば影から生まれ落ちたようにあらわれ、日が昇ると同時に影の中に溶け落ちる。

彼女が歩いた跡は、草木一本存在しない。

彼女が訪れた街は、ネズミの一匹も見当たらない。

各国の密偵が見たアルビオンはこの世の地獄だった。

ウェールズは強く唇を噛んだ。

「問題は」

ここまでむっつりと黙り込んでいたオルレアン公夫人が円卓の面々を睨みつけた。

「どうすればあの巫女を倒せるか、いつ巫女が降りてくるかということでしょう」

その瞳には劫火のような憎悪が燃えていた。

——この女傑たちは……。

怖い、あとで愛人に癒してもらおうとアルブレヒトは思った。

「巫女が降りてくるのは、断言はできぬがスヴェルの月夜だろう。」

目的地はシャイターンの門」

ビダーシャルの言葉に諸国代表の視線が集まる。

双月が重なるスヴェルの月夜の翌朝は、アルビオンとトリステインが最も近くなる。

この朝を狙ってフネで行き来するのが一般的だ。

しかし相手は尋常のモノではない、常識に当てはめるのは危険だった。

「問題は倒し方、か」

「一切の攻撃を受け付けなかったというのが気にかかりますわね。何度か精鋭を差し向ける必要がありますわ」

「オルレアン機関からすでに腕利きを送り込みました」

ウェールズとアンリエッタの会話に、オルレアン公夫人が口をはさんだ。

「元素の兄弟、彼らなら有益な情報を持ち帰ってくれるでしょう」

\*\*\*

才人は、プチ・トロワの彼にあてられた部屋で眠りについていた。その寝姿はルイズに嫌な想像を喚起させる。

静かに上下する胸をじっと目で追うしかできず、会議室に戻る気にもなれなかった。

「あの、ルイズさん」

「ルイズでいいわよ、ティファニアさん」

「じゃあわたしも、ティファニアって呼んで」

「ええ、ティファニア」

王家に連なる血筋という似たような境遇におかれ、虚無の担い手見習いという対等な立場で、平賀才人という同じ使い魔を得た。

ルイズとティファニアは奇妙な縁を感じていた。

「聞いてもいいかな？」

「なに？」

「サイトさんって、どういう人なの？」

——サイトがどういう人か。

ルイズは彼を召喚してから起きた出来事を思い出す。

ガンダールヴのルーンが刻まれた。

違う星から来たと聞いた。

ギーシュと決闘した。

泣いたわたしを抱きしめてくれた。

ワルドとケンカしてた。

メアリーと話をしてた。

そして、ウェールズを救った。

「サイトは、無鉄砲で、だけど優しいの」

言葉にすればたったそれだけ。

それでもティファニアはそこにルイズの持つたくさんの思いを感じ

じ取った。

「無鉄砲で、でも優しい人かあ」

「うん」

「わたしも、仲良くなれるかな」

「なれるわ、絶対になれる」

二人はじつと才人を見つめる。

その寝顔は、普通の男の子にしか見えなかった。

「これからどうなるんだろう」

「わかんない」

「怖いね」

「うん、でもサイトはもつと怖いと思う」

「そうだね、お兄様を助けてくれたときも」

ティファニアのまぶたの裏には、赤々と燃えるニューカッスル城が映っていた。

「ティファニア」

「なに？」

「わたし、サイトを召喚したこと後悔してるの」

「……なんで？」

「サイトの星は、平和なんだって。戦ったことなんてなかったって。なのにわたしたちの都合に勝手に巻き込んで。死ぬかもしれない戦争に彼を……」

「ルイズ」

ティファニアの声にルイズは彼女を見た。

彼女の穏やかな微笑みは、これ以上ないほどの安心感を与えてく

れた。

「悔いるよりも先を見ようよ。サイトさんのために何ができるか、とか」

「なにができるか……何ができるかな？」

「わかんない」

「わたしも」

二人顔を見合わせ、くすりと笑った。

「ありがとう、少し心が軽くなったわ」

「どういたしまして」

「……サイト、いつ起きるかな」

「待とう、二人いっしょに」

「うん」

## 泡沫の正夢を

頬を撫でる風に才人は起こされた。

不快ではない、新緑のにおいを感じさせる穏やかな風だ。

起き上がってみると、そこは草原だった。

「はい？」

目をしばしばさせて、ごしごしこすって、一度深呼吸をしてみても変わらない。

かなり遠くに黒い山が見える、ひたすらに開けた草原だった。

——なんで？

会議に出て、ハーフェルフの少女とキスをかわし、最後の記憶は心臓の痛み。

あんな美人とキスしたんだな、とちよっぴり頬を赤らめながら立ち上がってみる。

——夢、かな。

視点が少し高くなってもよくわからない。

現代日本では絶対に見ることができないような、広々という言葉では足りないくらい大きな大草原。

さほど出歩くことがなかったため、ハルケギニアでもこんな光景を目にしたことはなかった。

心当たりがあるとすれば地球にいたころ、海外の写真やテレビで見たくらいだったが、そんな記憶も頭の中にない。

——モンゴルとか、それっぽい。

相撲取りが馬に乗りながらドスコイドスコイやってそうだ、なんて変なことを想像しながら、ぐるっとあたりを見回す。

ちょうど才人の後方十メートルほどに、大きな大きな樹があった。

大人十人が手をつないでやつと囲めるくらいの大樹だ。

何かをするアテもなかった才人は、とりあえずそこに歩いていく。

「でつかいな」

感心半分呆れ半分の呟きをこぼす。

手を当ててみれば、生命の脈動が聞こえてきそうな気がする。木陰になっていて日差しの当たる草原よりは涼しかった。

風が一際強く吹き抜ける。

ざわざわ囁く木の葉が何枚か虚空に躍り出た。

才人は大樹に背をあずけて、めいっばい息を吸い込んだ。

——夢っぽくない。

身体を撫でる風も、ざわめく木の葉も、今背にしている樹皮の感触も、すべてがリアルだ。

ためしにほっぺをつねってみる。

ちゃんと痛みがあった。

はて、と少し頭をひねってみる。

心当たりはまったくなかった。

——目覚めたら知らないところ、かあ。

異世界召喚などというトンデモない事態を経験した才人は、あつ

さりと納得した。

服装が気絶する前にカッターシャツにスラックスということが、より現実感を与えてくれる。

とはいえ、納得しても今後の方針がたてられるわけではない。

「どうすっかなー」

樹に預けていた背中がずり落ちて、ぺたんとしりもちをついた。ほふうと力のないため息を一つ、それから首をぐるっと回して、視界の端にナニかが映った。

「え？」

気づけば、白いモノが隣にあった。

才人との距離は約一メートル、今まで目に入らなかったのが不思議なくらい近い。

真っ白なそれは、うずくまっている人間のように見えた。

——不思議なことがあるもんだな。

才人は物事をあまり深く考えない。

召喚された時も最初は「異世界なんて！」と思ったもののすぐに適応してしまった。

今回も、目が覚めたら知らないところでも、どこからともなく現れた白いのに対しても、警戒することはなかった。

観察すると、白いのは長い髪の毛と服のように見える。

全体を十秒ほど眺めて、これは真っ白な子どもがうずくまっているのだと才人は気づいた。

じくりと心臓が痛む。

アルビオンで別れた少女を、人でなくなった彼女のことを思い出した。

耳にこだまするあの時の咆哮が、彼女の慟哭のように聞こえたのは果たして才人だけだったのか。

木の葉のさざめきは相変わらず優しい。

これ以上ぼんやりしていてももちが明かないので、才人は思い切って声をかけることにした。

「どうしたの？」

返事はない。

伏せられた顔があがることもなかった。

ただ、才人は子どもの肩が震えて、嗚咽を漏らしているのに気付いた。

——泣いてる。

泣く子をあやす術など彼は知らない。

ルイズの時とは事情が違う。

何もできず葉っぱ越しに晴れ空を見上げる。

憎たらしいほどに、突き抜けるくらいに青かった。

それから十分か、二十分ほどたっただろうか。

ともすれば葉擦れにかき消されそうな泣き声は止んだ。

才人が目をやると、ごしごしと目をこすっているところだった。

「だいじょうぶ？」

出来る限り優しい声をかける。

それに反応してか、白い子どもが顔を上げ、才人は心臓を鷲掴みにされたような錯覚に襲われた。

長い、櫛を通して抵抗一つなさそうな純白の髪。

澄み切った晴れ空の下で輝く海を思わせる、青い眼。

そしてその無垢な表情は、顔立ちは、才人が右腕を斬り飛ばした少女と鏡合わせのような、ありえないほど似通っていた。

——え。

思考が、身体が、硬直する。

このありえない出来事はなんだ、と才人は自身に投げかけるが、答えが返ってくるはずもない。

彼をじつと見つめる瞳は、ともすれば吸い込まれそうなほど深く、その一点だけは血のように赤い眼をもつ少女と違っている。

「おにいちゃん、だれ？」

声は、才人が聴いたことのあるものより幼く甘ったるかった。

「……？」

才人の双眸は困惑と後悔、そして若干の恐怖に揺れていた。

無反応の才人を不思議そうに見つめる白い少女から、目を離すことができない。

「だいじょうぶ？」

才人がかけたように、優しい声だった。

「おにいちゃん、つらいことがあったの？」

——違う、ウソだ、夢だ、やめてくれ。斬り捨てた俺を、そんな目で……。

「めありーがきいてあげるよ」

喉と胸を締め付けられるような感覚。

悲鳴をあげることだけはしなかった。

才人の胸中を暴風のように雑多な感情が吹き荒れる。

気づけば、背中は脂汗でびっしょり濡れていた。

メアリーと名乗った少女は興味を失ったのか、草原で駆け回っていた。

走っては転んで、また立ち上がって無邪気に笑っている。

見た目はルイズと変わらないくらいなのに、それはひどく幼く見えた。

大樹にもたれかかったままぼんやりと空を眺める才人の視界を誰かが遮る。

小柄な金髪の、まだ若い悟りを開いたような、神秘的な雰囲気をもつ男だった。

その瞳には悲痛の色が見てとれた。

才人が声を出そうとする寸前、奇妙な浮遊感に襲われる。

それはいつも夢で感じているような、目覚めの合図だった。

刺すような夕日に目を焼かれながら才人は起き上がる。

ヤケに仲良くなっていたルイズとティファニアのことが少し気になったが、それ以上に変な感触が彼を苛ませる。

アレは本当に夢だったのか、そのことがおかしなくらい胸にひっかかっている。

夢でなかったとしたら、あの少女は、あの若者はなんだったのか。どこか気持ち悪い思いを抱えたまま、二人を置いてふらふらと部屋を出た。

昨日と同じような時間だからか、プチ・トロワの中をさまよっても誰もいない。

なんとなく思い立って庭に歩み出る。

植木に沿って気が向くまま散歩を続ければ、まるい広場の中央にある一つの石像に、そしてその前に佇む人影に足が止まる。

法衣姿の男性がゆったりと振り返った。

「おや、もう大丈夫でしたか」

「おかげさまで」

「身体に差し支えないよう、無理は控えてください」

茜色の日差しにキラリとルビーの指輪が輝く。

ヴィットーリオは杖を持つ白い像を見上げる。

その姿は何故か、親を想う子を才人に連想させた。

「この石像、顔がはつきりしてないんですね」

「ええ、始祖ブリミルは己の顔を残すことを禁じられました。自分に似た人間が崇拜されることや、迫害されることを恐れたのでしよう」

へえ、と才人が相槌を打って、二人は黙った。

そのまま時間が過ぎていく。

遠くでカラスの鳴き声が聞こえた。

「これも縁ということでしょうか」

「はい？」

「実は、あなたを訪ねようとプチ・トロワに向かう途中だったので。こうして始祖ブリミルの御前で出会えたのも運命なのでしょう」

「はあ……」

ヴィットーリオが才人に向き直る。

「ジュリオ、人払いを」

「はっ」

「うわ！ いたのか」

音もなくジュリオが現れ、また去っていく。

忍者みたいだなあ、と呑気に考えながら才人はその背を見送った。

「サイト殿は、夢を見ますか？」

「夢ですか。そりゃ見ますけど」

才人の脳裏には先ほどの草原と少女がフラッシュバックした。だが、あれが夢だとはとても思えなかった。

「夢の中では様々な人があらわれ、また出来事があります。死者と出会うこともあるでしょう」

「そうですね」

「しかし、こう考えたことはありませんか？　こうして我々が生きているのも、誰かの夢の中だと」

「……ない、です」

「それが真実だとすれば、あなたは どう思いますか」

想像もできないことだった。

こうして自分が息をしているのも誰かの夢だとしたら。

あのニューカッスル城での夜も誰かの夢だとしたら。

人が何かのために戦うのも、誰かの夢だとしたら。

その誰かが目覚めたら泡沫のように消えてしまうとしたら。

それは救いがあるようで、とてつもなく恐ろしいことだ。

「すごく、怖いと思います」

ヴィットーリオは寂しげな微笑を見せた。

「わたくしもそう思います」

才人には彼が内心何を考えているのか、さっぱりわからなかった。

二十歳ほどにしては老成しているように感じる。

夢のようなナニかで出会った男の人に似ていると、才人は思った。

二人して石像を見上げ、場に沈黙が訪れる。

気まずいものではなく、声を出すことなく語り合っているような、不思議な静けさだった。

「母は」

教皇が再び言葉を紡いだのは、それから数分たってからのことだった。

「母は邪神に憑かれ、殺されました。そしてトリステインのダンゲルテールで始祖の炎に裁かれたのです」

彼が目を向けているのは北の方、見たこともないダンゲルテールを睨んでいた。

「それを為した人物を憎いと思ったことはありません。わたくしの知る母はすでに死んでいたのですから」

左手の中指に、そこにある指輪に目を落とした。

「ただ、愛する母の遺骸を玩んだ邪神が憎い。始祖の教えを広めることに腐心した母の遺骸を、邪教布教のため辱めた邪神が憎い。できることなら消し去ってやりたい。そう思うほどに」

「……」

「わたくしの持つ使命感、人類への愛は何よりも重いと思っていますが、憎悪に身を焦がしてしまうとは……。教皇として、虚無の担い手として失格ですね」

「少しだけ、ほんの少しだけわかります」

それがヴィットーリオの秘めた激情に及ぶとは到底思えないが、才人も邪神に対して怒りを覚えている。

邪神さえかわらなければ、世界はもっと平和だったはずだ。

ちよつと変なだけの女の子が犠牲になることもなかったはずだ。

才人の戦友が命を落とすことも、なかったはずだ。

ジョゼフの語った通り、遙かに存在規模が違う相手だとしても一発殴ってやりたい。

「あなたに、伝えねばならないことがあります」

澄んだ眼には憎悪と、人類への愛が秘められている。  
何か大事なことを言おうとしているのがわかった。

ヴィットーリオは口を開き、しかし閉ざした。  
静謐な空間を裂く喋り声が聞こえたのだ。

「これはこれは教皇聖下！　こんなところでどうしたというのだ！  
ああ、始祖ブリミルの前で祈りを捧げていたのか。まこと信心深いな、あなたは！」

青髪の偉丈夫、ジョゼフ一世がシェフィールドを従えてやってきた。  
た。

その少し後ろでジュリオが苦りきった顔をしている。

「ジョゼフ殿」

対する中性的な教皇は、一切不快感をあらわにしなかった。

———すげえ、俺なら露骨に舌打ちするのに。

ものすごく大切なことを語ろうとしていたのを邪魔されて、不機嫌にならないほど才人は大人じゃない。

会議の時はあまり喋らなかったのだからなかったが、今ここで彼は理解する。

——コイツは、性格が悪い。

昨日彼が話したイザベラはまだ優しさが、ほんのちょっぴり見え  
た。

才人から見たジョゼフは性格の悪さしか目につかない。  
今だってジュリオがきつと足止めていたのにそれを振り切つて  
来たに違いない。

何より、ジョゼフは才人の方を一切見ようとしていない。

それが少年の心をひどく苛立たせた。

ジョゼフは才人の目の前で、彼からすればどうでもいいことを教  
皇に語りかけている。

——やっぱ貴族は性格悪いヤツが多いな。

話が終わる気配もないので、そんな失望感を抱いていい加減部屋  
に戻ろうとした矢先。

「ガンダールヴ」

青い王様が話しかけてきた。

「俺はガンダールヴなんて名前じゃない。平賀才人だ」

無視してもいいと才人は思っていたが、返事はした。  
彼の娘に対するのと同じだった。

「そのような些事はどうでもよい」

深く、冷たい視線が才人を射抜く。

平賀才人という人間の心底を暴くような、遠慮の欠片も感じられ

ない視線。

昨日のいじわる王女さまとは全く異質なそれは、ジョゼフという人間のいびつさを示しているようだった。

「おれはおまえが嫌いだ」

「俺だって、あんたみたいなヤツは嫌いだ」

「だろうな」

不敬だとかそういうことにはかまわず、才人は食ってかかった。ジョゼフは口元を釣り上げて鼻で笑い、すぐに真面目な顔に戻る。

「だが、それとこれとは話が別だ。おまえに渡すものがある」

「ジョゼフ殿、それは」

「始祖ブリミルの御前で、教皇もこの場にいる。かまわんだろう」

ティファニアとキスした時のルイズとは違う、凄まじい威圧感にと晒された才人は、腹に力を込めて耐えきった。

「ほう、始祖の血をひかぬなら膝をつくかと思ったが」

「……なめんな」

「それでこそ虚無の使い魔。癪だがこの剣を託す」

ジョゼフはマントを翻し、その下から一振りの長剣を抜き払った。一メートル以上ある片刃は夕日を反射して黄金に煌めき、刀剣類に詳しくない才人の目からも素晴らしい逸品だということがわかる。護拳はなく鍔もハバキも至ってシンプル、絢爛な装飾は一切なく無骨な印象を与える。

だというのに才人はこの剣に目を奪われ、魂が惹かれるような感覚を覚えた。

「神剣デルフリンガー、かつて聖者アヌビスの故郷で鍛えられ、始祖の血を嚼り、歴代ガンダールヴとともに星を護る戦いに身を捧げた忌まわしくも聖なる剣」

腰元から鞘を抜き、刃を納める。

両手でジョゼフが差し出すそれを、才人は恐る恐る受け取った。

「使い手よ、よろしく頼む」

「喋った!？」

「デルフリンガーには六千年蓄積した知識がある。教えを乞い、来る日に備えよ」

「ちよつ、待てよ!」

「これ以上おまえと話すことはない。そうする気もない」

来たとき同様、ガリアの武農王はシェフィールドを従えこの場を去る。

——な、なんて自分勝手なヤツなんだ。

あんな大人にはなりたくない、と思いながら才人はデルフリンガーに目を落とす。

鞘にも派手派手しい飾りはなく、刀身が見えていなければ一山いくらのカゴに放り込んであっても違和感がない。

神剣という仰々しい肩書持ちのくせに、全体的に地味な印象を受けた。

「あの、教皇さま？」

「ヴィットーリオでかまいません」

「じゃあヴィットーリオさん。さっき言いかけてたのは……」

才人の言葉に、ヴィットーリオは少し俯いて考え込み、やがて顔を上げた。

「やめておきましょう」

「へ？」

「ここにジョゼフ殿が現れたのも始祖の思し召しということでしょう。まだあなたが知るには早すぎる、と」

「……」

「また会うとき、その時に必ず話しましょう」

——き、気になる！

ヴィットーリオは自己完結した様子で、ジュリオを従えてグラン・トロワの方に向かった。

呆然とその後ろ姿を見送るしか才人にはできなかった。

「どうした使い手」

「いや……大人って勝手だなんて」

「歳をとればとるほど人は若き日々を忘れ、傲慢な身勝手さを身に着けるものよ。某の六千年の人生、あいや、剣生で学んだことだ」

「はあ」

「使い手も大人になればわかることだ。そなたは未だ齡十七、まだ人生はこれから、学ぶべきところはたくさんあるだろう。しかして、臆することはない。なぜなら若さとは……」

いきなりこんこんと説教しだした神剣に、なんと返せばいいのか。しかも相手は悪気がない。純粹に自分のためを思っただけで諭していると、才人は感じた。

とりあえず最近よく言うセリフを吐いてみる。

「使い手じゃなくて平賀才人っす」

「ふむ、異星出身だけあってなかなか珍妙不可思議な名だな。相棒と呼ばせてもらおう」

「あーいや、まあ、それでいいや」

完全に毒気を抜かれた才人は、新たに得た相棒とともに部屋に戻った。

これからは一人の夜も怖くないか、と気楽に考えながら。

部屋に帰るとすぐ、ルイズが呼びに来てトリステインに舞い戻ることになる。

嵐に翻弄される木の葉のように、平賀才人は戦場に身を投じる。

\*\*\*\*\*

「はあっ、はあ、つつ！」

泥まみれになりながらジャネットは暗い森の中、倒れ込んでしまった。

あたりには生物の気配がない、虫の声一つ聞こえなかった。ただ暗闇で彼女の吐息がこだまする。

——こんなはずじゃ、なかった。

彼女の思考を占めるのはそれだけ。どうしてこうなったのか、彼女には一切わからなかった。

ただ相手が強すぎた。否、そんな生易しい表現で済むものではない。

今まで仕留めてきたどのようなメイジよりも、どのような化け物よりも得体のしれない相手。

ヒトが原始的恐怖を抱く、夜の漆黒を相手にしているようだった。

『今回は少し危険だが、儲けは大きいぞ。情報収集だけで倒す必要もないそうだ』

そう言って笑った元素の兄弟の長男、ダミアンも、もういない。標的の、メアリー・スーの纏う冥闇に吞まれ、この世を去ってしまった。

他の兄、ジャックも、ドウドゥーも、同じ末路を辿った。

ジャネットは逃げた、この情報を持ち帰るため、強かった兄がまるで相手にならなかった敵が怖かったから。

他の手段をとろうとは考え付かなかった。

彼女は兄の死に際を思い返す。

はじめに堕ちたのはドウドゥーだった。

好戦的な笑みを浮かべ、唱えたのはブレイド。

ニューカッスル城での戦いで、ブレイドは一定の効果を上げていたことを彼らも聞いていた。

彼らは、並みのメイジとは比べ物にならないほど魔力量が多い。

それもそのはず、彼らの正体はハルケギニア六千年の歴史が造り上げた、対邪神用の戦闘特化メイジだ。

最強の竜種、水竜を相手取ろうと四人でかかれば五分で片づけられるほどの腕前を持っている。

マンティコアなど並みの怪物相手ならば群れで襲われても難なく対処するだろう。

当然、彼らの扱うブレイドも通常の、杖を包むような形状ではな

い。

巨木ほどの太さがあるのかという、青白い巨大な鞭になるのだ。見た目はか弱い少女にすぎないメアリーに声をかけることもせず、ドウドゥーは一気に長さ二十メートルのブレイドを振り下ろした。

次の瞬間に元素の兄弟が見たのは、夜であつてもなおわかる名状しがたい黒い光、あるいは発光する闇だった。

彼女の纏う闇の衣に触れた一瞬で、どこか神聖さすらあつたブレイドの光を犯し、元々自分が扱っていたかのように振るう。

ドウドゥーは、青白いブレイドを振るっていたはずのメイジは、漆黒の閃光に吞まれた。

それからは刹那の出来事だった。

ジャックとダミアンが間合いをとる間もなく、闇色に輝く触腕は二人を絡め取り、喰らった。

一人距離が遠かったジャネットは幸いにも、あるいは不幸にもそれを見ることになる。

光の届かぬ深海に蠢く、見るもおぞましい生物のような動きに、彼女は生理的な嫌悪感とともに心底から湧き出す恐怖に包まれた。

——これは、違う。

今まで殲滅してきた化け物とは何か、決定的に違う。

兄の仇を取ろうという気も起きず、反転して最高速度で離脱した。早く、ここから一秒も早く離れなければという思いをもって、全力全開のフライで逃走した。

数リーグは離れた森で今は一人、膝をついている。

しばらくそのまま息を整え、立ち上がって白いフリルのついたドレスの裾を払った。

その程度で汚れが落ち切るとは思えなかったが、精神的に立ち直るために必要な儀式だった。

——アレはなんだったのかしら。

まず、それを考える。

兄の死を悼むのは後でいい、あの光景を見て発狂しなかった幸運を噛み締めつつ、アレを打倒する手段を考察せねばならない。

元素の兄弟は、虚無の使い魔を見本として調整されたメイジだ。長男ダミアンを中核たるリーヴスシルと見立て、ジャックをヴインダールヴ、ドウドゥーをガンダールヴ、ジャネットをミヨズニトニルンとして、それぞれの役割に近い特製を持っている。

神の頭脳を模した彼女は、歩く図書館と言っても差し支えないほどの凄まじい知識量を誇る。

だが、その彼女の優れた頭脳をもってしてもあの現象の説明はつかなかった。

——ありえない、と断じるのは危険ですわ。

二十マイルも離れていれば大丈夫、と決めつけてかかって彼女の兄は死んだ。

なら自分はその教訓を生かさねばならないと、懸命に記憶を探る。邪神と言えど、人の身体を憑代としてこのハルケギニアに存在する以上、この星の法則にある程度縛られる。

過去に読んだ文献の記憶を片っ端から思い出しては破棄する。

数百冊分の記憶を掘り起こしたところで一つだけ、たった一つだけ心当たりが見つかった。

それに思い当たったと同時に、ジャネットは顔を青ざめた。

「まさか、いえ、そんな……」

狼狽しながら否定要素を探す。

見つからない。

一例だけほぼ同じ事象を引き起こせる魔法が存在する。

「スペル・ジャックなんて……」

机上の空論でしかない、という言葉は声にならなかった。

スペル・ジャック。

魔法大国ガリアとエルフが共同研究を行い、対邪神用のスペルを考案していた時、それは偶然生まれた。

簡単に言ってしまうえば、相手が唱えた魔法をそのままそっくり自分に乗っ取るスペル。

ゴーレムに言えばゴーレムの使用権は自分に、といった具合でありとあらゆる魔法のコントロールを奪うことのできる究極の魔法だ。しかしながら、満たさなければならぬ条件が多すぎ、実用化されることはなかった。

莫大な精神力の消耗、長い詠唱時間、これらは序の口に過ぎない。  
先住魔法の反射が扱えること、そして同時に系統魔法カウンターが使えること。

この二つの条件を併せ持つことは通常不可能だ。

基本的に、先住魔法はメイジには使えない。カウンターほど強力な先住魔法ならエルフにしか扱えないだろう。

そして精霊は系統魔法を嫌う、優れた行使手ならば系統魔法を学ぶなど間違ってもしない。

スペル・ジャックは約千年前に変わり者のエルフ研究者が扱えたのみで、それ以来使い手のいない忘れられた魔法だった。

そのはずだった。

——巫女は、邪神は精霊をねじ伏せてカウンターを使っているのかしら。

詠唱の気配も感じられなかったことが気にかかる。

この件に関して、今は明確な答えを出せないが、一つの情報は得られた。

さらにもう一つ、考えるべきことがある。

——攻撃するまで一切の反応を示しませんでしたわ。

遠くからとはいえ、進路上に立つ、石を軽く投げつけてみる、など反応を窺うためにも色々と試した。

だがメアリーはそれらに関して一切興味すら示さなかった。

現状、彼女に意志はなく自分の危機を察知して敵を排除しようとする事がわかった。

「まるでガーゴイルのようですわ」

心中のモヤモヤ感を毒として口に出すことで、ジャネットは思考を切り替えた。

考察は終わった、次にとるべき行動を何か。

オルレアン機関へ連絡、さらに帰還しなければならぬ。

——どうやってアルビオンを出ればいいのかしらね？

アルビオンに向かう際は、竜騎士でもあるジャックが操る風竜に乗ってきた。

現在地はサウスゴードの近く、精神力が完全にたまればギリギリフライで帰れる距離だ。

異常なまでの魔力量をもつ元素の兄弟ならではの帰還手段だった。

夜が明けるまではメアリーの進路から距離をとり、陽が出れば休む。

夕方にはフライでトリステイン、もしくはガリアに降下しよう、とジャネットは決めた。

「兄さま、仇は必ず」

身を翻して森を出るため一歩踏み出す。  
はたと気づくことがあった。

——臭いますわ……。

ジャネットは鼻をつく刺激臭を感知した。

森の外から差し込む月明かりを頼りにして周囲を見渡すと、ある一点に目が留まった。

「アレは」

木々から伸びるいずれかの枝から滴るように煙が染み出している。  
暗い中ではつきりとはわからないが、白くはなく、また黒くもない。

何か別の色で染められた不可思議な煙だった。

それは意志があるかのように凝集していく。

ごくりとジャネットは唾を飲み込んだ。

「ティンダロスの獵犬……」

彼女は無論、その冒瀆的な獣を知っていた。  
ありとあらゆる時空を超越して獲物を追う存在。

一度目をつけられれば逃れる術はない。

遙か昔、アディールで猛威を振るったという記録が残っている。その時は確か、獲物の死でカタがついたはずだ。

——目をつけられるようなマネは。

猟犬とは、あくまで執拗に獲物を追う様子を比喻した表現に過ぎない。

彼らは臭いではなく、異なる何かを目印に獲物を狙い続けるのだ。

ジャネットは覚悟を決め、右手に杖を、左手にナイフを持つ。具現化した獣はその長い舌をくねらせ、彼女に踊りかかった。

\*\*\*\*\*

愛するミレディーへ

何も言わずロマリアに君を置いて出なければならない私を許してくれ。

決して君が嫌になったとか、そういう理由ではないのだ。

私にしかできぬことを為すため、アルビオンに向かわねばならない。

おそらく、二度と帰ることはないだろう。

何から説明すればいいのだろうか。

何が起きたのか、なぜ君をロマリアに匿わねばならなかったかを説明しよう。

ことの起こりは、私たちの娘に、メアリーに大いなる邪神が憑いたことだ。

私も詳しくは分からない、枢機卿からはじめて聞いたことだ。

この六千年なかった事態で、ハルケギニアが滅亡するかもしれないようだ。

隠された神話ですら起きなかった、とのことだ。

気弱な君はこの時点で失神したかもしれない。

だが、こらえてほしい。

ロシュフォール家からそのような者を出したとあつては、普通取り潰しにあうだろう。

だが幸いにして、姫殿下と枢機卿はロシュフォール家の存続を認めてくださった。

ラ・フェール家から養子をとる手続きも済ませた。

君には苦勞をかけるが、ロシュフォール領のことを頼んだ。

執事のバザンは私が連れて行く。

後任にはトレヴィルを指名しておいた、彼ならばうまくやってくれるだろう。

君を置いていったわけは、私がアルピオンに向かう理由でもある。

メアリーを憑代にした邪神はナイアルラトホテップ、君も聞き覚えがあるだろう。

ヤツを崇める「ナイアルラトホテップ教団」というものが今のハルケギニアで暗躍している。

ひとところに固めねば対処できぬ、オーク鬼なんぞと比べ物にならないほど厄介な者たちらしい。

私はメアリーの父として、やつらをまとめねばならない。

トリステインのため、ハルケギニアのためにも教団をまとめて一網打尽にする一助とならねばならない。

それがメアリーの父としてできる最後の仕事で、ロシュフォール家を、君を守る唯一の選択肢だったのだ。

この任務は私の死をもって完遂されるだろう。

その知らせが来るまで、何があってもロマリアから出ないでくれ。

ああ、ミレディー。

愛する君を残して始祖の御座に向かう私を許してくれ。

そして、決して毒盃を煽るような真似はしないでくれ。

私は君の幸せだけを祈っている。

叶うならばもう一度、君とラグドリアン湖に行きたかった。

君の愛したジョン・フェルトン

\*

全てを包み込むような優しい月明かりだった。

ベッドに横たわる妻の頬を撫でる男の瞳は、それに勝る慈愛に満ち満ちていた。

音もなくドアを潜り抜けた金髪の男が立ち止まり、白髪の男はゆっくりとベッドから離れる。

「旦那様、よろしいので」

「ああ、行こう」

妻を見ていたときは全く違う、眼に焔を宿した白髪の男は歩み出した。

その後ろを金髪の男がついていく。

「すまん」

「かまいません。旦那様と死出の旅に赴くなら至福の極みにございます」

「……感謝する」

「仰せつかったマントをこちらに」  
「うむ」

金髪の男、バザンが手渡したサファイヤとルビーをあしらった漆黒のマントを翻し、ジョン・フェルトンはアルビオンを目指す。

## 公爵の杯を

「サイト殿。アルビオンの一件、改めてお礼を言わせてもらいますわ。ありがとうございます」

「え、はあ、どうも」

リュティスからトリスタニアへ向かう竜籠の中、アンリエッタは才人にお礼を言った。

これといった流れもなく、唐突なものだったので彼は呆けて、隣に座るルイズに肘でつかれて気のない返事をしてしまう。

「えっと、恐悦至極に存じます?」

「なんで疑問形なのよ」

ルイズは「もっと礼儀作法を覚えておくべきだったわ」と後悔したものの、アンリエッタは気にする様子も見せなかった。

楽しそうに、幸せそうに微笑む。

「そんなにかしこまらなくてもかまいません。あなたはハルケギニアで最も重要な存在なのですから」

「その通りです。本来なら教皇と対等の地位を設けるべきなのですが、時期尚早でしょうな」

アンリエッタとマザリーニは、ルイズにとってとんでもないことを、才人にはよくわからないことをのたまった。

ぼっと出の平民、それも出自のよくわからない異星人に与えていい地位ではない。

しかし平賀才人はアルビオン王家を救った英雄であり、今やハル

ケギニアの対邪神最終兵器とも言える。

彼なくしてハルケギニアの明日はない。

と言つても、アンリエッタもマザリーニも才人に政治をやらせるつもりはこれっぽっちもなかった。

あくまでお飾りの権力で、それを駆使して戦の準備を整えるのだ。

教皇と対等の地位、これはハルケギニア最高の権力者であることを示す。

邪神に対抗できるのは始祖ブリミル以外にありえない。

ブリミル教から破門されるということは、すなわち狂気に怯えながら暮さねばならないこともある。

したがって、その教えを守り、伝えていくブリミル教の僧は大きな力を持っている。

地球で言う、中世ヨーロッパはハインリヒ四世の時代と同等の力を有していると考えれば良いだろう。

万一破門の憂き目に会えば、国家のため、人民のためガリア王ジヨゼフですら教皇に膝をつかねばならない。

だがロマリアは同時に、貴族の武力なくして邪神に抗えないことも知っている。

緻密なバランスの上で貴族と僧は手を取り合っていた。

「ロシユフォール伯が上手くやればその問題は追々片付くでしょう。それより他の問題を考えないと、時間は有限なのだから」

「わたしは“爆発”と“解除”の習得、サイトは神剣に慣れながら引き続き鍛錬ですね」

ルイズは始祖の祈祷書をきつく抱きしめた。

トリステインの国宝である古びた本は、虚無の担い手にしか読むことができない。

当初は担い手が各王家に伝わるルビーを嵌めねば文字が浮き上が

らなかったが、制約が厳しすぎると判断した五千年前のロマリア教皇が“解除”によって魔法を部分的に改変したのだ。

始祖の秘宝にかけられた魔法は非常に強力であるにも関わらず、そのような条件変更を行うことができた当時の教皇の凄まじさがかがえる。

それほどの使い手も邪神との戦いで命を落としてしまったのだが。

「サイト殿とルイズは魔法学院に配置します。巫女がいた場所ですから、邪教徒も潜んでいることでしょう」

「姫さま、アニエスは呼び戻されるのですか？」

「……トリスタニアの防備に不安が出るのは好ましくないわね。ロシュフォール領にヒポグリフ隊から人員を可能な限り 配備、首都は銃士隊と……」

「軍事についてはグラモン元帥やポワチ工將軍に話してから決断するのはいかがでしょうか？」

「そう、そうね。人は道によって賢しという言葉もあるくらいですし」

アンリエッタは先ほどとは違って、力ない笑みをルイズたちに見せた。

「予想外のこと起きすぎて困っちゃうわね」

「……邪神の行動など誰にも予測できませぬ」

「マザリーニは固いわ。もうやるが多すぎてイヤになっちゃう。去年の今頃に戻りたいわ！」

「去年の姫さまですか。王宮に行くたび「退屈退屈！」って叫んだような気が……」

「そんな事実はないわ」

ルイズの突っ込みにしれっとアンリエッタは返す。

才人は友だちの友だちの家（しかも女子）に遊びに行ったときのような疎外感を味わっていた。

アンリエッタの隣にマザリーニが座っているのが、なおさらその感覚を加速させる。

あまり似ていないが、彼はアンリエッタの父親みたいだ。

今は穏やかな表情をしているけれど、その内くわつと目を見開いて「どこの馬の骨とも知れん奴に私のアンはやらん！」とか叫びだしそうだった。

「各貴族にも正式な通知を送らないと。教皇聖下とジョゼフ陛下、ウェールズ様の書面もどつさり手にいれましたし」

「まず公爵家に布告、次いで侯爵、伯爵に、子爵と男爵は王宮に集めて一斉にといった次第ですか」

「その順番が妥当でしょうね。ラ・ヴァリエールにはルイズが直接いけばすむことですし」

「え……それはちょっと」

「なんにしる邪神についてわかりやすく、信頼できる文章をつくらねばなりません」

「なんだってご先祖様たちは邪神の記憶を消しちゃうのかしら。理由はわかるけど、めんどろっただわ」

よくわからない話が竜筆の中を飛び交って、すごいなあと半ば放心していた才人は気になる言葉を拾った。

このまま謎話を右から左に聞き流すよりもマシかと思いつながら質問してみることにする。

「記憶を消すって、どういうことですか？」

才人がわからないのはそこだ。

邪神とやらがしばしばやってくるのなら記憶を消さずとも良いで

はないか。

みんなで備えてえいやとやつつければいいと思った。  
忘れることで得することなんか、才人には考えつかない。

「サイトにも説明しておいたほうがいいみたいね」

「待たれよ」

「うおっ!？」

「その疑問には某が答えようか」

才人が背負っていた神剣が渋い声でしゃしゃり出てきた。  
いきなり耳元でおっさんボイスが響いた才人は飛び上がって驚き、  
三人の視線が突き刺さっていることが恥ずかしくなあって腰を落とした。

「トリスティンでは邪神戦役後“忘却”を用いているのだな」

「ええ神剣殿。消極的と言わざるを得ませんが」

「それが悪いとは言わぬ、選択肢の一つなのだから。それと、某のことはデルフリンガー、もしくはデル公でかまわん。四千年ほど前のガリア王に公爵位を授けられたのでな。ああ、相棒はデルフと呼んでくれ。歴代の使い手からはそう呼ばれていたのだ」

とにかくこの剣、よく喋る。

一つ口を開けばとにかく言葉が重なって出てくる。

話をする機能が主で、斬るという剣本来の仕事はオマケなのかもしれないと思わせるほどだ。

ルイズもアンリエッタも「うわあ……」という顔で才人を、もつと言えば才人が背負っている柄を見ている。

デルフリンガーは領地など持っていないが家格としては最高位、一振りの剣にすぎないくせ、ヴァリエール家と変わらない。

その気になれば魔法学院のひよっ子を顎でこき使える身分だ。

「さて、記憶を消す手段と何故そうするかだったな」

「あ、うん」

「消す手段は虚無の魔法だ。“忘却”という、任意の記憶を消去する魔法がある。他にも使い方はあるのだが、今はいいだろう」

「ふむふむ」

才人は分かった風に相槌を打ってみる。

任意の記憶を消す魔法、この恐ろしさを彼は理解していない。

戦闘中に魔法関連の記憶を消されたら、敵対者に不利な記憶を消されたら。

応用の幅は非常に広いが、ルーン詠唱が長いという欠点を併せ持つ虚無のスペル。

それが“忘却”だ。

「では何故記憶を消去する必要があるか。わかるか？」

「わかんねーから聞いてるんだろ」

「相棒はもう少し頭を鍛えるべきだな。邪神は狡猾で残虐な存在だ。流されるままに剣を振るっただけでは決して勝てぬ。たゆまぬ鍛錬と常に冷静さを保ち、思考を続けることによってはじめて活路を見いだせるのであって」

「ああもう！ 説教はあとで聞くから！！」

「これは説教ではない。あくまで相棒のためを思っただけ、いわば忠告だ。某自身、人に何かを教え導くほど立派な人生、あいや、剣生を歩んでおらぬ」

「いやわかったから」

「む、仕方あるまい。何故記憶を消去するか、だったな」  
「そ」

——デルフと喋ってたら日が暮れても話が終わらない。

これは青いおっさんの遠回しな嫌がらせでは、と才人は思ったが口には出さなかった。

聞かれたら最後、再びマシンガントークがはじまりそうだったからだ。

マザリーニは若干渋い表情、美少女二人は顔をひきつらせている。デルフリンガーはする必要もないのに咳払いを一つして、真実を語る。

「簡単だ。邪神の存在を知れば発狂する」

「は……？」

「名前、姿形、あるいは存在するという事実。どれでもかまわん。それが狂気の入り口となる。普通の者ならば一年と正気を保てぬ」

「嘘、だろ？」

にわかには理解できぬ話だった。

邪神を知覚するだけで狂ってしまうなんて、才人には信じられない。

——それがホントだとすれば、それは、どうしようもないじゃないか。

「事実です。十四年前、彼奴らの存在を知ったワルド子爵の母君はそれで亡くなれました」

「ワルドさまの……」

「彼女は地の底に眠る風石の研究を行っていたようです。その過程で、何かに気づいたと。アカデミーは閉鎖的などころもありまして、我々が気づいたときには手遅れでした」

マザリーニは心底悔いているようで、その顔は暗く重かった。

「よっぽど精神的に強い者しか抗えぬ。例外は信仰に篤いロマリアの高僧か、色濃くブリミルの血をひいているもの、もしくは虚無の使い魔か」

「トリスティンではデルフリンガー殿が仰ったように、極一部の者しか知りません。公爵家であつても邪神について知らないでしよう。もつとも、具体的にない家伝にまでは手を出していませんが。アルビオンはどこからか、邪神の情報が洩れてしまったようですね。クロムウエルが染められ、そこから一気に広まったと」

程度の差こそあれど、各王家は邪神情報の機密保全に力を入れている。

どこでクロムウエルが邪神のことを知ったのか、謎は尽きない。

「彼も、元は敬虔なブリミル教徒であつたというのに……始祖の血をひいていなかったために、こんなことに」

クロムウエルのことを、マザリーニはほんの少し知っていた。

平民出身とは思えぬほどの教養を身に着けていた。

聖職者だというのにワインが好きで、酔うといらぬことを喋ってしまう男だった。

朝夕の礼拝以外にも、始祖ブリミルの像に祈っていることが多かった。

彼が知っているのはたったそれだけ。

たったそれだけでも、彼が本質的に善人であると、マザリーニはわかっていた。

「結局全部、ナイアルラトホテップってヤツが悪いってことだよな」  
その名を口にするだけで、才人の心臓が強く脈打つ。

この地上から排除せねばならぬと咆哮している。

「倒さなきゃ……」

「その通りだ、あの存在にこれ以上この星を蹂躪させてはならぬ」

才人の呟きに、デルフリンガーが力強く肯定した。

それっきり、竜籠の中は静かになる。

トリスタニアはもうすぐそこだった。

—— 公爵の杯を ——

翌日、ルイズは才人を連れてヴァリエール領に帰った。

懐にはアンリエッタが認めた手紙を携え、これまでのことを、これからのことを報告するために。

トリスタニアを早朝に発ち、朝食後のお茶の時間に滑り込むことができた。

連絡を一切いれずの帰宅だったので、使用人一同は驚き、そして公爵たちの下にルイズを案内した。

突如現れた娘に、公爵は相好を崩し、公爵夫人は眉をひそめた。

「ルイズ、学院はどうしたのです」

「オールド・オスマンには許可をとっていますわ。理由もきちんと

あります」

夫人は、ルイズのはきはきとした態度に疑問を覚えた。

彼女が何より規律を重んじるということを、彼女の娘はよくよく承知しているはずだ。

だというのに一切後ろ暗さは感じさせない。

何か重大なことがあったというのだろうか、と心中で口にする。

一方の公爵は、純粹に娘の帰郷を喜んでいた。

「おおルイズ、よく帰ってきた。何かあったのかね？」

娘を抱き寄せ頬に口づける。

父親の親愛の情に、ルイズは少しくすぐったそうにした。

「父さまと母さまにお話があります」

「いいとも、丁度昨日いい茶葉が入ったのだ。ルイズもかけなさい」

進められるままにルイズは腰掛け、差し出された紅茶に口をつける。

ほのかなマスカットの薫りが口に残り、思わずため息をついてしまう。

が、すぐに己の使命を思い返し、話を切りだした。

「父さま。アンリエッタ姫殿下から、いえ、教皇聖下、ジョゼフ陛下、ウエールズ皇太子の連名で書状を預かっています」

「……なに？」

ルイズが並べた名前は、始祖ブリミルの代にはじまり、六千年もの間ハルケギニアを支配してきた四国の代表者だ。

それらすべてが係わる書の重要性は計り知れない。

娘が差し出した手紙を、公爵は無言で受け取り印璽を確認する。彼ですら数えるほどしか見たことのない、教皇印だった。何事か、と思いながら開封して黙読する。

四枚の紙を一通り読み、もう一度最初から終いまで読み返した。

「そうか……」

ラ・ヴァリエール公爵は椅子に深くもたれかかった。

「にわかには信じられぬことだが……各国首脳が連名で認可しているならば、手の込んだ悪戯というわけでもないのだろっ」

その顔色は優れない。

手紙の内容がよほど堪えたのか、半ば放心しているようにも見える。

隣に座る公爵夫人に力なく、手紙を渡した。目を通した彼女もその内容に驚愕している。

「これは、確かに凄まじいことですわ」

夫人もアルビオンの顛末、これから起きる内容に顔をしかめている。

穏やかな太陽の下、親子三人でお茶をしているというのに空気は重い。

手紙の内容は大きく三つ。

一つ、邪神ナイアルラトホテップと教団について。

一つ、それに付随して今後予測される事態について。

そして最後に。

「いや、それよりもルイズ」

虚偽を許さぬ射抜くような眼で彼の娘を見つめる。

「魔法が、使えるのだな」

「はい、父さま」

「……伝説の、虚無の系統だというのだな」

「……はい」

老公爵は、厳めしい顔をほころばせた。

「おめでとう、私の小さいルイズ」

娘に対する心からの祝福がこもったその言葉に、ルイズは思わずハンカチで口元を抑えた。

堪えようと思っても涙が止まらない。

彼女は、ずっとゼロだった。

虚無の系統であると知られたのはおよそ六年前、アンリエッタとの会話が枢機卿に伝わったとき。

マザリーニは彼女に己の系統を、そして誰であろうとそれを教えではならぬと固く約束させた。

始祖の御前で誓約をさせたのだ。

幼いながらも彼女はその誓いを、決して破らなかった。

口さがない使用人が囁こうとも、家庭教師にさじを投げられても、父母から蔑みの目で見られているような錯覚を感じても、

本当は叫びたかった。

『わたしはゼロじゃない！ 魔法が使える！ 虚無の系統なんだ！』

そう、みんなに言いたかった。誰よりも家族に言いたかった。だがそれは許されないことだった。

虚無の系統は表面上、強力な魔法に過ぎない。

もし好戦的な貴族に知られれば、人間同士の不毛な戦、その旗印にされただろう。

そして情報というのはどこから漏れるかわからない。たとえ血のつながった家族であろうと、完全ではない。

ルイズは両親にずっと伝えたかったことが言えた。  
今この瞬間、彼女は報われたのだ。

歡びに満ちた涙は、静かに頬を流れていく。

公爵は立ち上がり、我が子を優しく抱擁する。  
柔らかな日差しが穏やかな時間を包んでいた。

「そうだ、ルイズ。カトレアに顔を見せてきなさい。お前に会いた  
がっていたようだからな」

「はい、父さま」

「それと」

ルイズは気づかなかったが、公爵の眼は鋭く光っていた。

「お前の使い魔を連れてきなさい。少し話をしたい」

\*

応接室のようなところに一人待たされた才人は、のんびりくつろいでいた。

元来小市民なところのある彼は、普通ならこんなゆったりとは過ごせない。

しかしハルケギニアに来てからご主人様の部屋をはじめ、ニューカッスル城やトリステインの王宮、果てはグラン・トロワまで様々なところを渡り歩いてきているので、流石にもう慣れてしまった。

今も「紅茶って案外うめー」とぐだーとしていた。

そこにルイズがやってきて、父親が呼んでいる旨を伝えた。

粗相をしたら斬首かもね、といつもなら言わないような冗談を飛ばしてルイズは軽やかに去って行った。

嫌な予感をひしひしと覚えつつも、行くという選択肢以外なかった。

「お前がルイズの使い魔か」

「はい、サイト・ヒラガです」

——も、モノクルだ。すげえ。

現代日本では、漫画の中でしかお目にかかれない紳士アイテムを目にして才人のテンションは一時的に急上昇した。

白髪が目立ち始めたブロンドの髪が、髭が、服装が、なんとも彼のイメージする貴族とマッチする。

これほどのダンディズムを体現した貴族がいるとは、と心中でちょっぴりはしゃいだ。

そしてルイズパパの眼光が鋭すぎることに気づいてテンションは急降下した。

なんというか、視線が殺る気に満ち溢れているような気がする。

「かけなさい」

有無を言わせぬ強制力を孕んだ言葉に、才人は大人しく従った。  
ルイズパパの隣に座る、ルイズが性格的にきつくなって成長すればこうなるかな、という容姿のルイズママも厳しい気配をビシビシ送ってくる。

これが普通の貴族相手なら喧嘩を売られていると思ったかもしれない。  
だが相手はルイズの両親だ。

——や、やつぱり「お前みたいな馬の骨が娘の唇をツ！」とか言われるのかな。

古典になりつつあるドラマ的展開を妄想して内心ビクビクな才人だった。

「まあ、飲みなさい」

「い、いただきます」

なぜか赤い液体が注がれたワイングラスを公爵は差し出した。

——固めの杯!?

脳裏で上映されているのは、古いドラマから任侠ものになった。才人はじつとグラスに目を落とす。

ぐびりと唾を飲み込んで、一息に飲み干した。  
味なんてわかったもんじゃないかった。

「ありがとうございます」

なんと言えいいのかわからず、とりあえずお礼を言う。

——学校じゃご主人様の親御さんへのあいさつの仕方なんて教えてくれなかったぞ！

内心ではどうしようどうしようとテンパリながらも表面には出さない。

そんな才人を後目に、公爵はワインクーラーから瓶を引き上げる。その瞳はラベルを読んでいるようで、どこか遠いところを見ているようだった。

「そのワインはジャン・ジャックが、ワルド子爵が好きだった銘柄だ」

「え……」

「あまり酒を好まぬと言っていたからな、浴びるほど飲ませたことがある」

「あら、そんな楽しいことをしていたのですか」

「一度だけだがな。普段は生真面目なジャン・ジャックもその時ばかりは前後不覚になっておった」

もう手の届かないくらい遠くを、ラ・ヴァリエール公爵は見つめていた。

「婚約は奴の父と酒の席で出た話だった。冷静になると家格が違すぎるから断ることも考えた。だが、あやつは家格の差を実力で詰めようとしていた。しばしば様子を見に行けば、よくルイズの話をねだられたものだ。そんな気になるなら自分で手紙を書けと言ったのに」

「彼は真面目でしたからね。気恥ずかしかったのでしょう」

「そこがいかん。男たるもの攻めるときは攻めねばならん！」

目の前の会話がまるで異世界の言語であるかのように、耳に入っても意味が通じない。

才人は自身が飲み干したワイングラスを、その底に少しだけ残った赤い液体を食い入るように見つめている。

「サイト・ヒラガと言ったな」

「は、はい！」

公爵の声に、才人は現実を引き戻された。

「教えてくれ、ジャン・ジャックの最期を。手紙ではなく、実際に見届けた男から聞きたい」

才人を見る公爵の瞳には、複雑な輝きがあった。

「子爵さんは……」

——何を言えがいいんだ。戦いの様子？ 最期に何を言ったか？  
何で、死んだか？

からからになった喉からは掠れた声しか出ない。

「子爵さんは……」

——あれ、良く考えてみれば俺あの人のこと何にも知らない。あんなに勇敢で、命の恩人で。他の人のことも、あっけなく死んで。

ぐるぐると心はマーブル模様を描いてまとまらない。

「落ち着きなさい」

凜とした声が溢れだしそうになる心情を押し留める。

才人は彼自身が気づかぬ間に自分を抱きしめるようにしていた。  
身体の震えが止まらなかった。

夫人の鋭い眼光が才人の瞳を射抜く。

「あなた」

「うむ、患っておるようだな」

「な、なにがですか？」

夫人は、カリィ又は『烈風』の二つ名を持つ、トリステイン最強の風メイジだ。

マンティコア隊隊長として数多くの武勲を立て、それゆえ兵の精神状態についても一定の知識を有している。

公爵も若かりし頃は魔法衛士隊に所属しており、さらに水メイジということもあって彼女以上に詳しい。

その二人の見立てでは、才人の状態は戦友を亡くした新兵と非常によく似ている。

戦友を思い出すと途端に平静を失うが、平時は何事もなかったかのように過ごす。

だが一般的に知られる症状はもっと軽く、才人の様子は二人から見ても重症だ。

「まさか、ニューカッスルが初陣か？」

「……」

沈黙をもって才人は答える。

同封されていたウエールズの手紙にアルビオンの惨状とジェームズ一世の最期は記されていた。

アルビオンはお国柄、大仰な修飾語を好まない。

直截的な表現が多く、それだけにどれだけ激しく、そして救いがない戦だったというのが生々しく伝わってきた。

そのような戦場で初陣を飾り、真っ向から敵と斬り結ぶなどと、そのような真似ができる戦士を公爵は知らない。

公爵は夫人と頷き合い、若き英雄に話しかける。

「アルビオンで何があった」

安心感を誘う低い声だった。

「人が、人が死んだんです」

ぼつりと、才人は胸中に溜め込んでいた言葉を吐き出した。

「そうだ、人が死んだんだ。いっぱい死んだ。なのに、なんで、なんで俺、何も感じなかったんだよ」

一度噴き出した感情は逃げ場を求めて胸の中を暴れ狂う。

ハルケギニアで生を受けた二人には、才人はまるで異質なものに見えた。

この世界で人死には珍しくない。

病気、オーク鬼、貴族の無礼討ち、寿命、事故。

それだけにとどまらないが、平民の命などさほど高くない買い物だ。

平民だろうが貴族だろうが死体を見ても強烈なショックを受けない。

だが、才人は違う。

平賀才人は地球の、さらに平和な日本で生まれ育った。

親戚の不幸もなく、交通事故や殺人現場に出くわすこともなく、至って平穩無事に過ごしてきた。

人の死など彼にとって仮想世界か、遠い場所での話にすぎない。そんな普通の少年が突然異世界に放り込まれ、さらにはこの世ならざる戦争に巻き込まれてしまう。

ありえない体験の連続にルーンの精神強化も限度を迎えつつあった。

脳裏にニューカッスルの夜が蘇る。

一人二人ならいざ知らず、目の前で蹂躪された百もの命が暴れ狂う。

壁に叩きつけられた貴族も、名状しがたい獣に踏みつぶされたメイジも、まぶたの裏で鮮明になる。

最後に見たワルドの優しい微笑みも。

「覚えてた。血を吐きながら死んだ人も闇に吞まれた人も覚えてたのに、おかしいよな。なんで、なんでなんで!？」

「いかん!」

才人の身体は激しく痙攣していた。

公爵は素早くスリープ・クラウドを唱え、彼を眠りに誘う。

意識を失う寸前、才人は考える。

——俺、何になっちまったんだろ。

\*\*\*

「というわけでちいねえさま、わたしは虚無の系統だったのです！」  
「あらあら、すごいじゃない」

ばんざーいとピンク姉妹が両手をあげれば周りの動物も追隨してくれた。

それから魔法学院で美味しい料理、ルイズの使い魔のこと、プチ・トロワの美しさなど、他愛もない話を彼女は姉にする。

ルイズの姉、カトレアは妹の話を楽しそうに頷きながら聞く。

夫人がルイズの苛烈な成長を遂げた姿ならば、カトレアは穏やかに、豊かに育った容姿の持ち主だった。

カトレアは体が弱い。

魔法を使えば大きな負担がかかるし、幼少のころからラ・ヴァリエール領から足を踏み出したことがない。

そんな彼女を想って、ルイズは外で起きた様々な出来事を話すようにしていた。

しかし、楽しい時間はすぐに終わる。

どこか硬質な音が二人の会話を中断させた。

「どうぞ」

「失礼します。ルイズお嬢さま、旦那さまが部屋で呼びです」

背筋をしゃんと伸ばしたメイドが率直に用件を述べる。

「なにかしら。ちいねえさま、行ってまいりますわ」

「いつてらっしゃい」

折角いいところだったのに、とぼやきながらルイズは部屋を出た。メイドを従えヴァリエールの広い屋敷を急ぐでもなく歩く。

久しぶりの帰宅だったが、花瓶の花や飾られた絵画が新調されているくらいで、大きな変化はない。

ほんのちよっぴりの懐かしさを感じながら父親の執務室に着く。

「旦那さま、ルイズお嬢さまがお見えになりました」

「はいりなさい」

メイドが開けたドアをくぐると、意外すぎるものが目に入った。

「サイト！？」

来客用ソファーに彼女の使い魔が横たわっていたのだ。

「どういうことですか父さま！」

それを見るなりルイズは公爵に突っかった。

彼は娘の様子に一瞬目を見開き、すぐに渋みのある声で諭す。

「精神面からくる発作に襲われたので眠らせた。ルイズ、話というのは他でもない彼のことだ」

才人をよく見ると、顔色こそ悪いものの外傷はない。

早とちりした自分を恥じたのかルイズは俯いてしまう。  
公爵は愛娘に空いているソファーに座るよう促した。

「彼は、何者だ？」

「何者というのはどういうことですか？」

「ワルドの話を聞こうとした。その時に発作を起こしたのだが、これほど酷い症状は聞いたこともない」

困惑した様子が表情からうかがえた。

これがただの平民なら公爵もここまで気遣わなかっただろう。

だが、平賀才人は虚無の使い魔で、亡国の皇太子を救い、ロマリ  
ア教皇までもが認めた平民なのだ。

感情面では折り合いのつかないところもあるが、今はそれを抜き  
にして考えねばならない。

ルイズはこの一週間のことを思い返す。

当然ながら才人がアルビオンの話題を出すことはなかった。

最初の三日はふさぎ込んでいたように見えた。

リュティスに行く直前からは元々の明るさを取り戻しつつあるよ  
うだと、ルイズは感じていた。

そこで彼女は気づく。

「サイトは、サイトの星は平和だって、争いなんかなかったって」

「争いがない……？ いや、彼の星とはどういう意味だね」

「違う星から、わたしは彼を召喚しました。魔法もない、貴族もい  
ない、オーク鬼みたいな危険な生き物もない星から」

「それは……」

ハルケギニアで五十年も生きている公爵に、そんな星は空想すら  
できなかった。

ロバ・アル・カリイエ以東に広がる不毛な大地を想像してしまう。

「人が死ぬことなんて滅多にないと、言っていました。サイトの国では大体八十歳までは生きられるとも」

「……始祖の御座のような世界だな」

ルイズの言葉に、思わずこぼした。

貴族という統治者がいないのに政治はどうしているのか。

魔法もないのに何故人死にが少なく、齢八十まで生きられるのか。オーク鬼に苦しめられることがない人々はどれほど幸せなのか。

公爵の疑問は尽きないが、話を聞いてわかったこともある。

「環境の差異から来るものかもしれん」

身の回りが急激に変化すると、身体と精神の両方に失調をきたすことは、ハルケギニアでも知られている。

そしてそれを解消するのは個人差もあるが、周りの人間であることが多いということも。

「ルイズ」

「はい」

「ニューカッスルの件はお前の使い魔の心をひどく蝕んでいるようだ。お前は主人として心の支えにならねばならん。それが彼のためであり、お前のためであり、またハルケギニアのためでもある」

娘と目を合わせて公爵は説く。

ルイズは真剣な表情で頷いてみせた。

「わかったなら良い。カトレアの部屋に戻りなさい」

「わかりましたわ」

言うとルイズは才人に近寄り、お姫さまだっこのような格好で持ち上げようとした。

これには公爵が仰天した。

「なにをやっているのだ！」

「だって、サイトも、ちいねえさまに、紹介しないと」

公爵はこめかみをもみほぐしながら幼い娘を諭す。

「あとで使用人に運ばせよう。淑女がそんな真似をしてはならん！」  
「……はい」

父親のお叱りにちよっぴりむくれながらルイズは部屋を出て行った。

同時に、カーテンの後ろに隠れていた夫人が姿を現す。

「カリーヌ、どう思う」

「あなたがルイズに厳しいのはいつも表面だけですわね」

「そ、そっぢゃない！」

公爵が少し慌てて弁明する。

夫人は素っ気ない態度で話を元に戻した。

「立場が違いすぎて推測すらできませんわね」

「そうか、そうだな。わしも同じだ。しかし、いかに武に長けていようと精神が弱ければ話にならん」

「王家に任せっぱなしというわけにはいかないでしょうね」

「その通りだ。平民というのが多少気に食わんが、公爵家として支援せねば」

「……彼を鍛える必要がありますわね」

ぎらりと夫人の双眸が輝く。

その煌めきは『烈風』として名をはせた時代のもだった。

\*\*\*\*\*

「急げ急げ食料と最低限の衣類以外は置いてけ！」

アルビオン南部、軍港口サイスは慌ただしい喧騒に包まれていた。  
響き渡る声は活気よりも必死さを感じさせる。

悲壮感を顔に張りつけた市民が列を作り軍艦にぞろぞろと乗り込んでいく。

これからトリステインに亡命する大衆は、生まれ育った地に戻れるのかという不安をぬぐえない。

「スワロー号、出港準備整いました」

「よし、残るはビジョン号だけだな」

白髭をたくわえたホーキンスは書状に目を通しながら部下の報告を聞いていた。

整理された机の右側にウェールズからの手紙が置かれている。

トリステインが避難民の生活を保障するという内容だった。

——平民の暮らしを気遣えるとは、トリステインも中々やるものだな。

実際この知らせを聞いてから避難に踏み切る平民が増えた。それでも父祖の地を離れられん、と残る住民も少なくない。彼らにかまけている暇はなく、そういった手合いは放置されている。

時間との勝負だった。

得体の知れない輩はニューカッスルから徐々に南下し、ロンディニウムを超えて数日後にはサウスゴータに到達するだろう。今は一刻も早くこの大陸を離れなければならない。

ホーキンスも荷物をまとめ、空軍司令部の施設を出た。その時、地面と空を交互に見つめている兵の姿が目についた。

「何をしている」

「こ、これは將軍閣下！」

ぎこちない敬礼で彼が新兵であるとホーキンスにはわかった。

「わたしは何をしていると聞いたのだ」

「はっ！ 太陽と影を見ていました」

「太陽と影？」

老將軍も思わず見たが、いつもと変わらないように感じる。いや、少しだけ違う。

「……何か違和感があるな」

「この時間帯にしては影が長いようです。それと、太陽の位置もおかしいかと」

「ふむ」

空中大陸アルビオンは空を旅している。

新兵の報告から、いつもより東にずれていると思われた。  
だが、それはおかしいことだ。

「いや、今は捨て置こう。お前も急げ」  
「はっ！」

アルビオンは決まった軌道を描いて空を移動する。  
僅かなずれすらこの六千年ありえなかった。  
大陸は東へ下へ、トリステインに近づいていく。

\*\*\*\*\*

才人が意識を取り戻すと、空を飛んでいた。  
「おわあっ!？」

心臓が止まりそうになるほどびっくりした。

轟々と唸る風の音がうるさい。

「ちょ、こ、これなんだよ!？」

地面に足がついていないというのが恐怖心を誘う。

ロープで何かにくりつけられているのか、腕は動かせない。  
気分は安全装置のないジェットコースターだ。

タバサの風竜の背に乗った時とは大違いだった。

「母さま! サイトが起きました!」

「魔法学院まであと一時間ほです。そのままでも問題ないでしょう」

轟音の中間き覚えのある声がする。

——も、問題大有りじゃねえかつ!

ジェットコースターをはじめ、スピードや浮遊感を味わうアトラクションが楽しいのは何故か。

非日常の体験というのもあるし、爽快感もあるだろう。  
だが、すべては短時間だからこそ楽しめるわけで。

「た、助けてえええええ!」

アルビオンの英雄は過去に思いを馳せることもできず、情けない  
悲鳴をあげた。

\*

「ひ、ひどいめにあつた……」

「大丈夫？」

一時間ぶりの地面は例えようもなく頼もしい。翼の生えたライオンのような、マンティコアという幻獣の尻尾に縛りつけられていた才人はふらふらと膝をついた。

学院の北側、ノルズリの広場に降り立った立派なマンティコアに興味をひかれたのか、風の塔の窓から身を乗り出して観察する学生の姿が見える。

しかし授業時間なのですぐに少年たちは引っ込んでしまう。夫人はその様子を厳しい目つきで睨んでいた。

「なんでルイズのお母さんが魔法学院に？」

「わたしも知らない」

ルイズ聞いてよ、いやよサイトが聞いて、とお互い肘でつつきあいながら囁きあう。

「聞こえてます」

『すいませんでした！』

ひそひそ話をしてても優秀すぎるほど優秀な風メイジである夫人には関係のない話だった。

「さて、ルイズの使い魔、サイト・ヒラガと言いましたね」

「はい！」

普段は心持無気力めなのが信じられないほど勢いよく、はきはきと返事をする才人。

そつせざるを得ないオーラを夫人は放っている。

——例えるなら、ヤクザの親分とか。

非常に失礼な感想を思い浮かべた。

「今日から私が鍛えます。以降私のことは隊長と呼ぶように」  
「へ？」

「返事はきちんと下さい！」

「は、はい！」

「声が小さい！！」

「はい！！」

「返事は「ウイ、マダム」！！」

「ウイ！ マダム！！」

魔法学院に『烈風』来たる。

ルイズはあんぐりと口を開いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6487w/>

---

始祖ブリミルの祝福を

2011年11月20日21時44分発行